
S.Fです

コアラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

S・Fです

【Nコード】

N10040

【作者名】

コアラ

【あらすじ】

わたしの幼馴染は文武両道に容姿端麗、性格も品行方正な所謂完璧人間。でもそんな人格者な彼に、わたしはある疑いを持っている……ほんのりSFラブコメディー。

第1話 小夜子編

昔から探し事って得意じゃない。消しゴムはよく失くしたし、ヘアピンは家中至る所で紛失した。2時間サスペンスドラマの犯人は最後の最後までわからないし、駅から5分の新しいカフェへ向かうのだって地図を見ても1時間迷った。脱出ゲームなんてやった日には最初の鍵にさえたどり着けずギブアップ。

ああ、だからわたし本当はこんな事向いてないのよ。人間には向き不向きと才能の有無って言う大きなカテゴリがあって、わたしにはそのどちらも否定的な能力しか持ち合わせていない。たった17年の人生経験でさえそれが重々わかつているのに、やらなければならぬってというのはどうしてなのか。

答え。自分で決めた事だから。

連続で出そうになる溜息を2回目で押さえて、わたしは大嫌いな数学の教科書を盾に目の前にいるターゲットを伺った。

オリオンかアンドロメダかはたまたオメガ星雲か。宇宙の彼方にある謎の惑星から、奴はきつとやってきたに違いない。

そう、自分で決めた事だから。わたしは探る。

教室で友人と会話している彼、佐川稜介が宇宙人であるか否かを。

「あら小夜子、今日も彼に熱い視線を送っているのね」

隣で先程の時限の英語を復習していた友人遙は、分厚い英和辞書を片手に話しかけてきた。

「遙、その熱い視線って間違いだからね。これは観察なの、個人的観察任務」

「大事な彼氏が他の女の子の所へ行かないように見張っているって事？　いくらなんでも今佐川君が話しているのは男の子じゃない。もう少し寛容に構えておきなさいよ」

「違うって。まず彼氏じゃないし、誰と話していても構わないし。でもとにかくこれは必要な捜査なの」

「ふーん……浮気調査もいいけど、教科書反対だからね」

はっと気がついてよくよく手元を見れば、逆様になった数式が並んでいる。遙が眼鏡の奥でにんまりと笑っているのを見ると、何だか恥ずかしくなってくるではないか。

ああもう、駄目だわこんな事では。わたしの決意は固いのに。

季節は初夏。みんなお揃いの制服は久しぶりの夏服セーラーに切り替わった。わたしの席は窓際一番後ろという席替え大人気の位置だから、たまに吹き抜ける風がとても心地よい。それに長い黒髪をポニーテールにしていると、うなじへの空気が特別ひんやりする。

「いい加減遂に彼への気持ちに目覚めた、ってわけじゃないの？」

休み時間の教室の喧騒はときに耳触りだけど、女同士の秘密ではないけど出来たら聞かれない会話、つてものを掻き消すのに丁度良いみたいだ。

遙の表の顔は学年一・二を争う才女にしてわたしの親友。そして裏の顔、というか本体は大好物のケーキと噂話を糧に生きている。

「何時誰が何処で何に目覚めるの？」

「あんたってどうしてそうなの……あの王子様みたいな容姿に学業優秀、陸上部は高跳びインターハイ優勝。おまけに誰にでも優しいときた。なんかもう憧れ要素120%じゃない」

眼鏡の奥で爛爛と輝く瞳を見てみると、遙は勉強よりもこういった事にかかる情熱の方がはるかに高い気がする。それである成績とは、万年平均女のわたしと交換してほしいよ。

「パーフェクト人間は倍率高いわよ、将来も有望だし。未はスポーツ選手か弁護士か、それともオーソドックスに医者かしら」

保険の生保レディよろしく他人の未来の展望を語る遙を尻目に、わたしは再度ターゲットの後ろ姿を見つめた。

白馬の王子とはよく言ったもので、日本人にしては色素の薄いウエーブがかった髪も、切れ長の瞳も、少し日に焼けた肌も、何もかもが顔立ちとして美しく整っている。彫が深いってこういう感じなのか、例えてしまえば美術の石膏系ビジュアルなんだよね。陸上をやっているから体形なんてすらりとしていて、あろうことかわたしよりも足が細い。今更気がついたけど姿勢もいいし。おまけに身長も高く、容姿としてケチをつける所が見つからない。よくもここまで万人受けする姿形に成長したものだわ。

ああ、でも。でもね遙。

「その完璧さが問題なのよね……」

ぼつりと漏らした呟きと同時に、観察対象が背後を振りかえった。

「小夜子」

低いけどよく響くこの声に、わたしの名前は何度呼ばれた事だろう。決して大きな声ではないのに、教室内のざわめきが一瞬にして耳から消える。

「綾介、何？」

さりげなく数学の教科書を鞆にしまうと、綾介はわたしの席の前までやってきた。これがまた乙女ソックアウト必死のどえらい笑顔で携えて。実際彼の歩いてきたルートにいた女の子達は、皆話を止めてちらちらと綾介の一拳一動に視線を送っている。

この高校に入って2年目、さすがにもう見慣れた光景。

綾介はそれらを一向に気にせず、というか気がついていないのか。極上の微笑みをわたしに向ける。優しいな雰囲気で、なのに目だけは悪戯っぽく細められて。

「今こつち見てたでしょ」

何て事なの、こいつは後ろにも目があるのだ。思わず口元が引き攣ってしまふ。今日の発見、宇宙人は目に見える範囲以外にも視覚を持っている。心のメモ帳に記録しておこう。

「うっん、別になんでもないの。今晚夕飯どうするかなと思ってたくらい」

冷静に平静に。よし、髪に櫛でも梳かして何気なさを演出しよう。

「ああ、今日は小夜子の家で食べるよ。部活があるから8時過ぎくらいかな、コロッケだと嬉しい」

「わかった、用意しとく」

綾介はコロッケがやたらと好きだ。わたしはダイエット中だから揚げ物は遠慮したいけど。

「あとさ」

彼は半袖のシャツポケットから2枚の券を取り出した。

「さつき上原に貰ったんだけど、小夜子が観たいって言ってた映画の割引券。来週の日曜日に行こう」

最近流行りのハリウッドアクション映画。しかも丁度次の休みに観ようと思っていたやつではないか。このタイミングでこれを出してくるなんて、流石は宇宙人。わたしの好みを熟知しているのね。

「うん、了解」

「よし、じゃあ日曜日にデートだな」

丁度予鈴が鳴り出したので、稜介は笑顔のまま自分の席へ戻って行った。少しだけざわめきの落ち着いた教室で、何となく彼が席に座るまでを他の女の子達と一緒に目で追ってしまう。隣の席の男子と談笑する、至って普通の光景のはずなのに。

すぐに次の授業の先生が来るかと思ったら、なかなか来る気配がない。この持て余す時間を遥が放って置くわけなかった。

「あのさ、やっぱり付き合ってるのよね？」

「ううん。只の幼馴染」

窓から見える校庭では下級生達が体育の授業をしている。規則正しい準備体操の掛け声を聞きながら、わたしはゆっくり首を振った。

「それであのやりとりなワケ？」

「うん」

風が初夏の匂いを運んできて、窓の外で大きく葉を広げた緑が揺

れる。きつとあと少ししたら、蒸し暑い夏がやってくるだろう。

「あんた達って本当よくわかんないわ……」

「わたしだって、宇宙人の考える事なんてわからないんだから」

しみじみと囁きを漏らす遥に、わたしも負けじと呟き返した。

第2話

わたしこと藤倉小夜子は、幼馴染である佐川稜介が宇宙人である事を疑っている。

初めに確認しておくけどわたしは勿論正気のもり。精神科のお世話になる程病んではないし、空想の世界に浸る程夢見がちでもない。そんな事よりも、どちらかと言えば今日の夕飯の材料をこのスーパーで揃えれば一番安いかを思案する方が大切な現実主義者。残念ながら彼と違って容姿も頭脳も体力も平均均一な凡人のただ、とにかく身体が健康なのは間違いない。

今時宇宙人の存在なんて誰も信じない、そんな事はわかってる。超常現象には全て科学的な理屈があって説明出来てしまう事も知っている。

でも。それでもわたしは、稜介が宇宙人だと本気で思っているのだ。

「じゃあ壁打ちやめ、次ペア組んでー」

放課後のテニスコート。不規則なボールの響きと共にスイングしていたラケットを下ろして、わたしは転がった硬式ボールを手に取った。

1時間の壁打ちは結構きつい。汗だくになって貼りついたTシャツが気持ち悪くて、用意していたタオルまでぐっしょり水分を吸っている。わたしは重たくなったそれをベンチに置いた。

「3年生の大会組みが第1から第3コートまで。残りの第4コートを2年ね、1年はボール回収とスコア記録に別れて」

3年生の片桐部長は熱血スポーツ少女で、とても熱いリーダーだ。今は引退間際の大会で良い記録を残そうと必死で部員達を鍛え上げている。実際ここ数年目立った実績のなかった我がテニス部が2年連続で県大会まで進めたのは、きっと片桐部長の指導のおかげ。ストレッチにマラソンに筋トレにと地道な基礎は辛いけど、そのおかげでみんなフォームが綺麗になった。短いショートカットに額輝く汗がアクセント、とても素敵な先輩だと思う。

「小夜子、サーブはあんたからね」

あまり人数のいない2年生はわたしと遙を含めて4人程。さらに今日は残りの2人が委員会で遅れているので、実質コートを貸し切り状態に出来るって事で。

「わかった、いくよっ！」

大会前のこの時期2年生がコートを使えるのは貴重だから、頑張らなくては。気合を入れてラケットを奮うと、遙も負けじと打ち返す。わたし達は有望株ではないけれど、一応息のあったダブルスを組んでいるのだ。

長くラリーを続けていると、気分が集中してきて余計な雑念が追い払われる。だからこの時ばかりは常日頃考えている幼馴染の事も頭から追い出してしまえて、爽快感抜群。ボールを追う事だけに神経を研ぎ澄まし、その他の事なんてどうだってよくなる。遙にボールされた球を拾おうとダッシュで無心のまま腕を伸ばしても、ギャラリーの声なんて――

「相変わらず超カッコイよね、佐川先輩」

「うん、やばい。神だよあれは」

聞こえないわけがなかった。うん、仕方ないよ。人間の耳は音を感知するためにあるんだからさ。

正常な聴力機能が災いしてラケットに触れる事なかった球は、コートを虚しく転がった。そしてその真横、グラウンドに面した休憩ベンチとスコアボードの間で1年生達が皆同じ方向を見つめている。この時間広い運動場を占拠しているのは、うちの高校で一番強い陸上部だ。

嫌な予感。ああ、また宇宙人の妨害が始まる。

「あ、跳んだっ！」

「うわ凄っ、今の高さ見た？あれ2メートル超えてない！？」

ここからだとして少し距離があるけれど、歓声に混じって高跳びのバールを軽々と跳び超える稜介の姿が小さく見えた。身体を大きく反らして撓らせ、重力なんて関係ないみたいな高い跳躍。青空を背景にしたハイジャンプってこんなに綺麗な競技なんだ。

「陸部の女子羨ましいなあ、あたし女子マネになればよかった。もしたら彼に差し入れとか出来るのに」

相変わらず1年生達の視線はグラウンドに釘づけだ。そういえばこの子達、片桐部長に指示出されていなかったっけ？

「抜け駆けは許されないよ、ファンの間では松の上不可侵条約が結ばれているんだから。1年は声掛け禁止、見るだけなの！」

「2年は複数での会話、3年生になってやっと単独接触可なんですよ、うちらが3年になる前に先輩卒業しちゃうじゃんか」

「でもどうせ彼女いるからね、藤倉先輩」

きやいきやいとした黄色い声に自分の名前が出されるとは思わなかった。ゲームを再開しようとしていたわたしは、1年生達の強い視線に思わずそちらを振りむいてしまう。

仕切りのフェンスを掴んで恨めし気な目つきをする彼女達は、そう小さくはない声でこちらを伺っている。獲物を値踏みをする女狩人のような鋭い眼光は、はつきり言ってかなり怖い。

「どうしてあの先輩なのかな、超普通だよな」

「幼馴染だって。いいよねえ、棚ぼたポジションだから」

あまりよろしくない感情の詰まった矢がわたしに向かって放たれる。将来は獵師の有力候補としてスカウトされそうな実力を感じさせる彼女達。しかしこうやって誤解されるのは実は初めてではないので、大打撃を受けないようわたしのメンタル面のガードは万全だ。だって恋人同士なんて事実無根だからね。

まったく、完璧人間の振る舞いは周囲に著しい錯覚を与えてくれるのだから困ったものだ。一度本気で被害届を出してやりたい。

それにしてもこれは一発ガツンと先輩として言わないといけないだろうか。そんな事を思っていたら、隣のコートから勢い余って飛んできたボールがこちらのネットに絡まって、恨めしそうにわたしの足元までやってきた。

土埃に塗れた汚いボール。勿論わたしの使う球だって泥まみれになっている。ああ、先輩達も頑張っているのに、集中を切らしている場合じゃなかった。

気持ちを切り替えてそのボールを投げ返してみれば、相方の方が動くのが早かったらしい。

「はいそこの1年」

空気を切り裂くようにわざと大袈裟なスイングをすると、遙はつかつかと1年生達へ近づいて行く。肩で切りそろえられたショートボブが風圧で踊って、後輩達の歓声がピタリと止まった。

「くだらないおしゃべりの前に部長から球拾いとスコアの記録は言われなかったの？ あっちで3年の補助してる仲間がいるみたいだけど」

剣呑な彼女の声に、流石に驚いたらしい1年生は竦みあがる。あれだけ動いてもずり落ちない眼鏡を光らせて、遙は0・0のままのスコアボードをこっこつ叩いた。

「今小夜子とわたしは3・4。さつさと直して」

「片瀬の言うとおり、何してるの1年」

更に運悪く背後から片桐部長がやってきた。多分ゲームを中断していたのが不審に思われたのかもしれない。真面目に練習に取り組まない部員には恐怖の校庭10周が待っている。

「いえ、判定で少し揉めていただけです。でももう遙の点で解決しましたので、3年生のボール回収に回ってもらいます」

わたしが強引にスコアを直してしまうと、1年生達は罰の悪そうな顔をして別のコートへ走り去っていく。おかげで片桐部長は何か言いたげだったけど、遙が自分のポジションに戻ってしまったのでそれ以上言及する事はなかった。

そのかわり、ふと視線を上げたままその動きが止まる。再びよろしくない予感に目線を追えば、グラウンドへとたどり着くわけで。

「ああ……そっか、この位置だと彼がよく見えるのよね」

どこか納得したような表情で片桐部長は頷いた。わたしにちらりと視線を投げ、その顔はどこか元気がない。

「このコートで試合をしたら3年にも影響が出そうだね。藤倉さん、後で彼に練習場所を変更出来ないか聞いてみて」

何だか部長も誤解しているのでは……と危惧を抱きつつ、わたしは渋々と返事をするのだった。

第3話

「あら、今日はコロッケなの？」

台所を新じゃがで占拠していたわたしは、背後からかかった声にゆっくりと顔をあげた。

わたしに良く似た平均的な日本人の顔をしたお母さんは、仕事帰りかと思われるスーツを着たまま冷蔵庫の麦茶を飲んでいる。

「稜介からのリクエスト」

「ああ、稜介君は小夜子のコロッケ好きだものね」

昨日作ったばかりの麦茶はもう半分以上消費されてしまった。新しいストックを作っておこないと、風呂上がりの一杯の行方が怪しくなりそう。

お母さんは手先が絶望的に不器用なので、藤倉家のご飯はわたしの腕にかかっている。部活帰りに食材を買って帰るのは結構大変だけど、これも体力作りの一環だと思えば。

「そういえば今年もインターハイ出場だった？ 毎回地区大会も突破出来ない誰かさんとは違うわよね」

「今年は勝つよ、今練習頑張っているんだから」

お母さんは昔から稜介の肩を持つ。どうして素直に血の繋がった娘を応援出来ないんだろう。

「はいはい、無駄な努力にならないように祈ってるわね。今日はーさん帰らないみたいだから、ご飯は4人分でいいわよ」

「お父さんまた仕事？ じゃあわたしとお母さん、稜介に… あれ健

太郎は？」

わたしは弟の不在に気がついて眉を顰める。中学3年生、受験を控えた弟は早々に部活も終わり、灰色の猛勉強付け生活真最中だ。

「図書館寄ってくるってさ。じゃああたしも仕事があるから、ご飯が出来たら呼んでね」

そう言つて2階の自室へ消える母は広告代理店で働いている。いつも山程の書類を抱えているから、仕事は多分忙しいんだろうな。うちは昔から両親共働きで、それぞれとても仕事熱心。そしてみんなマイペースで我が道を行くって感じかな。

そんな事を考えながら、蒸かしたじゃがいもを潰して炒めた挽肉と野菜と混ぜる。食欲をそそる匂いを丸く形作れば特製コロツケのタネが完成。食べ盛りの健太郎が文句を言いそうなので、心持ち大きめの力作だ。

簡単に後片付けをしてお風呂を沸かすと、そろそろ彼が予告した時刻に近づいていた。

大きめの鍋に油を注いで火をつける。じりじりと揚げ時の温度まで上昇するそれを見て、卵を溶かしてタネに衣を着せていく。聞き慣れたインターフォンが鳴ったのはそのときだった。

「ただいま小夜子」

あろうことか我が家の鍵を持っている稜介は、まるで自分の家はここだと言わんばかりに爽やかな帰宅をしてくれる。

「お帰り、お疲れ様……あ、健太郎も一緒だったんだ」

稜介の後ろからひょっこりと現れた弟は、重たそうな参考書を抱

えてテーブルへと辿り着いた。

「ただいま。ああ勉強のし過ぎでマジ疲れた、ご飯まだあ」

「こら、まずは手を洗ってきなさい」

どういうわけか、弟は平凡なわたしと違って稜介属性を持っている。つまりやたらと無駄に整った容姿を持っていて、短く刈った黒髪にきりつとした目が映える美少年なのだ。ただし学業成績は本家にかなり劣っている。

のろのろと洗面所へと向かう弟を見送ると、制服のブレザーを脱いだ稜介が台所のコロッケを見ていた。

「本当に作ってくれたんだ」

明らかにテンションの上がった彼を見て、そりゃ人に喜んで貰えればわたしだって悪い気はしない。

「うん、あと揚げるだけだからもうすぐ出来るよ」

「ありがとう、小夜子も疲れてるのに嬉しいよ」

不意打ちって言葉はこのためにあるのかもしれない。稜介があんまり底なしに嬉しそうに笑うから、わたしは柄にもなく一瞬ドキリとした。いつもいつも見ていた顔が、こんなに綺麗だって事はとくに知っていたのに。そしてそれがよくなかったのか、動揺したわたしは鍋の取っ手に腕をぶつけてしまったのだ。

液体の入った鍋は衝撃に弱かった。バランスを崩したそれは、まるでスローモーションのようにわたしに向かって中の油を浴びせてくる。心臓が凍るように息が止まり、逃げなきゃいけないと理性がわかっているのに身体が動いてくれない。閉じられた瞼の裏で、熱した油が人体にどんな影響を与えるのかなんてわかりきった結果だ

けが恐怖を煽る。

バシャン、とバケツをひっくり返したような水音がしたのは次の瞬間の事。わたしは腰から下に冷たさを感じて恐る恐る目を開いた。
——熱くない。というより冷たい。

あまりの火傷で神経がおかしくなってしまったのかしら？自分のエプロンを見下ろせば、しっかりと濡れたスカートと靴下が目に入った。肌も別に爛れてはいない。

「小夜子」

呆れを含んだ声を出す稜介は、空になった鍋を抱えていた。

「大丈夫？ 小夜子の料理は美味しいけど、おっちょこちょいなのは困るな」

「え……あれ？」

な、何が起こったの？

「幸い火にかけてない水だったからいいけど。これが油だったら大火傷だからね、気をつけて」

「水……？」

何で鍋の中が水なの？ わたしは油を注いで火にかけた。間違いない、だって稜介が帰宅する時間に合わせてクロツケを揚げようと準備していたんだから。

でも私に実際かかったのは水。これも相違ない、冷たいだけでちっとも熱くなんてないんだから。

「嘘でしょ、だってわたし油を——」

慌てて先程使った油のボトルを覗き込むと、中身は確かに油、ではなくて。

「水だ……」

そう、水。愛用のメーカーの使いなれたボトルには並々と水が入っていた。

何で？ 何で水がこの中に入っているの？ 我が家で料理をするのはわたしだけだし、わたしは油の容器に水を詰める趣味もないし、ましてやコロッケを茹でるという新料理法を確立したいわけでもないのに。

「おかしい稜介、これ怪奇現象だよ……うちに油を水に変える悪霊が住みついたんだ」

不意にこないだ家族で見た実録怪奇悪霊特集が頭をよぎり、思わず稜介の腕にしがみ付く。わたしは昔からその手の物が大の苦手なのだ。

「小夜子、やつぱり疲れてるんだね。とりあえず先にシャワー浴びてきなよ、制服も乾かさないと」

あきらかにわたしの言葉を信用していないを稜介は、逆にわたしの腕を引っ張ると無理矢理洗面所へと押し込んだ。手洗いと着替えを済ませた健太郎が驚いたように入れ替わり、さっさとタオルまで渡される。

「ちょ、ちよつと！」

「コロッケは僕が揚げておくよ、こゆっくりね」

有無を許さない強引さで扉を閉められ、わたしは濡れたエプロン片手にお風呂場で茫然と立ち尽くした。

第4話

そもそもわたしと稜介は生まれたときから家がお隣のご近所さんだ。お互いに同い年、更に周囲に年の近い子供が健太郎以外ほとんどいないなんて環境で暮らしていれば、仲良くならない方が不自然というもの。幼馴染の名に恥じず、それはそれは一緒に遊んだものだった。

当時は意識していなかったけれど、昔から稜介はずば抜けて頭が良かった。小学校のテストはいつでも満点で、授業中も間違えた事なんて一度もない。よく図書室で持ち出し不可の専門書を読んでいたけど、何のジャンルかなんて今のわたしでもわからない。知能テストがある度に先生に呼び出されて、校長室で難しい話もしていたらしい。だから担任の先生も私立の超名門校への推薦を進めていたけれど、稜介はあっさりそれを断ってわたしと一緒に地元の中学校へ進学した。理由を聞いてみたら、気が進まないから、とだけ答えてくれた。

わたしはそれを、稜介がわたしの両親に気を遣っているんだと思っていた。それと言うのも稜介の両親はわたし達が中学校に入る前くらいの時期に2人ともに事故で亡くなってしまって、あの頃から彼は藤倉家で生活するようになったからだ。稜介の家は親戚が全く連絡の取れない状況になっっているらしくて、わたしのお父さんお母さんが彼を引き取る事を申し出た。養子ではないから戸籍上は他人だけど、以来稜介は藤倉家の3人目の子供として育ったとしても過言ではないはず。

でも彼は優しいから、負い目を感じていたのかな。そのまま一番近くの公立高校に入る前辺りから稜介は一人暮らしを意識していたみたいで、受験に合格したのを切っ掛けに元の隣家で生活を始めた。それまでは衣食住のほとんどを藤倉家で行っていたけど、それから

はまるつきり我が家に来なくなったのだ。健太郎が泣くし、わたしも家族だと思っていた人が突然いなくなるのは耐えられなかったから、説得して食事だけは一緒にとるようになったけど。あの当時はわたしも随分堪えた。

そう、稜介はある意味家族のように近しい幼馴染。そこに居て当然という人だから、学校で女の子達がドキドキしているような感情は湧いてこない。でも離れていってしまうと悲しい。こういう感情をなんて呼ぶのか、それが上手く説明出来ないのだけど。

けれど少し距離を置いたからこそ、見えるものもあった。

わたしが彼を宇宙人ではないかと疑いだしたのも、丁度彼が家を出ていった頃だった。

「ごちそうさまでした」

こんがりきつね色に揚がったコロッケをお腹に収めた面々は、それぞれ思い思いに食後の一服を図る。お母さんは煙草に火をつけ、健太郎は麦茶をがぶ飲みし、稜介は綺麗に食べられたお皿を片付け始めた。だらけ切った藤倉家と礼儀正しい宇宙人の対比がちょっと情けない。

わたしはその中でも唯一真つ当な感覚を持つ地球人としての自負を胸に秘め、食器を流し台で洗い出した。隣には布巾を持つ彼が立つ。こうして並ぶと頭2つ分くらい身長が違うので、会話するのは首が疲れてしまう格好だ。

「あのね、部活なんだけどさ」

「陸上の事？」

流水で洗い終えた皿を手渡ししながら、稜介は首を傾げた。

「そうそう、ほら高跳びの機材一式がテニスコートの近くであるじゃない」

「ああ、あれね」

「あれ動かせるの？」

「まあやろうと思えば出来るけど」

それがどうかしたの、と彼は目で促す。

「もう少しテニスコートから離れた所で出来ないかなって思って」
「音がうるさい？」

眉を顰める稜介に、わたしは言葉が詰まる。貴方のせいでテニス部の女子が色ボケして困っています、とは流石に言えない。

「うっん、いやあの……そ、そうだ。こっちのボールがフェンスを越えて当たったら大変じゃない」

「何を今更、そもそももっと近くに野球部の練習場があるし」

そりや旦那、御尤もです。頭の中でわたしは扇子をぺしんと叩いた。ああ、失敗しました片桐部長。駄目な後輩でごめんなさい。

「それにもっと遠くしたら僕が見えないし」
「何を」

洗剤の泡がぶくぶくと膨れ上がって、小さなシャボン玉が一つ生まれた。虹色が巡るその表面に、ぐんにやりと歪んだわたしと稜介の顔が混じり合っている。儚い球体はふわふわと宙を漂い、その頼

り無げな動きが可愛らしい。

「小夜子を」

その言葉から一拍遅れて、お気に入りのアクリルグラスが指先から排水溝へと滑り落ちる。飲みかけのお茶が泡を伴ってひっくり返り、大きく撥ねた水が頬にまで貼りついた。慌ててコップを拾おうと伸ばした手は震えている。

予想外の事をあんまり平然と言うものだから、手元が狂ったのだ。一瞬指先へ視線を移していたら、その間にシャボン玉はもう消えてなくなってしまうている。

「今日片瀬さんと随分頑張って練習してたね、小夜子去年よりずっと上手くなつたよ」

見てたんだ。いや、そりゃあ見えるよね、なにせこっちのテニスコートから稜介が見えるんだからさ。

決まりが悪くなつて二の句が継がないでいると、お母さんが3本目の煙草に火をつけて口を開いた。

「ねえ小夜子、ところでそれは何？」

不思議そうに指差すその先はガスコンロの脇、調味料が置かれた台の上にある小皿に入った油。

「お供え物よ」

わたしはきつぱりとお答える。

「さつき油を水に変えたマニアックな幽霊へのお礼なの。ううん、

もしかしたらただの幽霊じゃなくて先祖代々の守護霊かもしれないけど。とにかく万が一悪い霊だとしてもそのおかげでわたしは火傷をしなかったから、感謝しておかないと。祟られたら嫌だし」

先程の事件とお風呂で考えた結論を語ってあげると、まずお母さんはお腹を抱えて笑いだした。稜介は無言だったけど、布巾を動かす腕が止まって肩が震えている。そして全ての麦茶を飲みきった健太郎はわたしを見て、しみじみと呟いた。

「姉ちゃんってほんと、鈍感だから……」

うちの家族は変わっている。この先一生油が使えずコロッケもてんぷらもトンカツも食卓に並ばなくなっても、それはわたしのせいじゃない。

思い起こせばあの時も季節は夏だった。小学6年生、セミの声が鳴り響きひまわりが咲き乱れる夏休みの頃。

連日のあまりの暑さに参っていたわたしは、稜介に河原へ遊びに行こうと誘った。わたし達の住む家の近くには小さな川が流れていて、夏場そこで遊ぶのはお決まりの定番コース。流れも緩やかで浅いので、地元の大人達もあまり警戒していない。そして当時は小学校の間で川の中の綺麗な水色の石を見つける遊びが流行っていて、わたしもご多分に漏れずその石が欲しかったのだ。

「ねえ行こうよ稜介、大きな石を見つけてみんなに自慢しよう」

部屋で本を読んでいた稜介は、新聞の天気欄を指差して渋い顔をする。

「今日は夕方から雨が降るし、危ないかも。今度にしようよ」

「平気だよ、だってあそこ赤ちゃんだつてハイハイ出来るくらい浅いんだから」

わたしの表現は誇張ではなく、本当にそれくらいその川は水位が低かった。それこそスニーカーのまま川面を通過するのはわけのないくらい。とにかく子供特有の向こう見ずな好奇心と根拠のない自信、それと無駄に熱い弁を駆使して、わたしは無理矢理稜介を外へ連れ出す事に成功した。健太郎は風邪を引いて寝込んでいたので、2人だけで川へと向かう。

たどり着いた河原は光を反射しきらきらと輝いていて、わたし達は早速石の搜索を開始した。多分張り切っていたのはわたしだけだったけど。

足首にすら届かない水は暑さのせいか妙に温く感じ、あまり涼しくはない。それに期待していた水色の石は全く見つからなくて、1時間もすると嫌気がさしてくる。芳しくない結果に稜介は帰ろうと促したけど、わたしはそれに素直に頷けない。だってどうしてもその石が欲しかったのだ。

「いいもん、稜介は帰ればいいでしょ。わたし一人でも見つけてみせるから」

そもそもこの付近はきつと友人達が搜索して石を獲りつくしてしまったのかもしれない。だったら範囲を広げようと思っていたわたしは、一人どんどん進んで行った。それが普段大人すら決して踏みこまない領域まで来ていたとは知らずに、水は腰まで覆っていて。

如何に浅い川といえど上流から水が下降している以上、水底が削

られて深くなっている部分は必ず存在する。けれど残念ながら幼いわたしはそんな事を知らなかった。

夢中になって探していたせいなのか、わたしは雨が降り始めてからやっと自分がとんでもない所までやってきたのだと思い知った。背後を振り返っても稜介の姿はなく、むしろ川岸すら雨で隠れて遠い。慌てて引き返そうとしたけれど、焦りは足を纏れさせ、その場に頭から転倒する。

水が、足が、冷たい、暗い。

感覚の鈍る水中は平常心を簡単に破壊してくれる。

——痛い、助けて、誰か！

混乱した頭で必死に状況を理解する。水底の石に足をぶつけたらしく、痛みで歩く事が出来ない。それでももがいてもがいて水面に頭を浮上させると、恐ろしいくらい激しい雨が顔面を叩いた。

「小夜子っ！」

どこかで稜介の声がする。でも雨で瞳が開けられない。

「稜介、来ちゃダメっ！！」

それだけ叫ぶのが精一杯で、わたしは再び水の中へと引きずり込まれた。雨で増した水位はわたしの身長を悠々と超えていたのだ。

この時になつてわたしはようやく後悔する。どうして稜介の言う事をきちんと聞かなかったんだろう。子供の水の事故がどんな不注意から発生するか、どうしてわからなかったんだろう。ああでも、稜介を巻き込まないで済んだのだけは良かった。

泥で濁った水の中、もはやわたしは抵抗をしなかった。身体がひどく重たくて、そんな気力がなかったのだ。

「小夜子」

だから助かったはずの彼の声が聞こえたとき、わたしは驚いて目を見開いた。暗い水の中で、何も見えないはずのある一点から声は響いている。

「大丈夫、君は必ず僕が守る」

綾介、綾介なの？　お願いだからわたしに構わずはやく逃げてよ！

前後左右もわからない、真っ暗な水の底の空間。そこへ走る一筋の光のきらめき。黄金色の蝶々が夜空を舞う軌跡のようなその光は次第にわたしへと近づき、次の瞬間、視界から水がはじけ飛んだ。

最初は何が起こったのか理解出来ず、わたしはぽかんと口を開いて茫然としていた。その口から空気が吸える事に気がついたのは、目の前の光が綾介だとわかったのと同時だった。

髪の毛の先から爪先まで、綾介は体中が黄金色に光っていて、その足元は水底から少しばかり浮き上がっていた。もちろん空中に浮かぶような道具は持っていない。それなのに瞳だけは真っ赤で、お母さんのルビーの結婚指輪を思わせる。彼を中心に水は氷柱のようにはつきりと左右に分かれていて、底には苔で覆われた黒い石がごろごろしているのが見えた。降りしきる雨も何故かこの一帯には落ちてこない。

綾介は何の感情も読み取れない表情で、静かにわたしを見下ろしている。

「小夜子、目を閉じて」

何か抗えない圧倒的な強さを感じて、わたしは大人しく目を瞑った。綾介にしては大きい、けれど多分彼の腕だと思われる温かい何かに抱きかかえられて、わたしの身体も光を纏う。触れた箇所から

じんわりと熱が伝わって、自然と身体の緊張が解けていく。

「今起こった事は、多分小夜子の人生に関わってはいけない事だ」

瞼の境に黄金の光がちらついて、耳の奥で何か不思議な音が聞こえる。断続的にモーターが回るような低い音。

「全てがわかってしまったら、一緒にはいられない。だからこれは僕達だけの秘密だよ」

段々とおぼろげになる意識の中で、稜介はそんな事を言っていたような気がする。わたしは曖昧な相槌を打ちながらまどろみに落ちていき、何一つ理解出来ないまま眠りについた。

第5話

その事件の後、気がつけばわたしは自分の部屋のベッドで眠っていた。

パジャマに着替えてあんまり普通に寝ていたものだから、目が覚めたときはまずあれは夢だと疑った。とりあえず足を見てみたけれど、怪我一つしていない。おまけにその他体中どこにも傷や痣すら見当たらなかった。でも何故か頭の上にはでっぷりとした氷嚢が乗っかっている。溶けかけた氷が水滴となって額を濡らし、その滴の冷たさが頭を覚醒させたのだ。

慌てて飛び起きてリビングへ向かうと、テレビを見ているお父さんとお母さん、それにやっぱり本を読んでいる稜介の姿があった。

「あら、起きたの？」

飲みかけのコーヒーを継ぎ足そうとしていたお母さんが気がついて、わたしに駆け寄る。その後ろではお父さんが心配そうにわたしを見ていた。

「熱射病で倒れたんだぞ。あんまり無理はするなよ」

はて？ 思いがけない単語に動きが止まる。

「そうよ、道端で倒れたのを稜介君が運んでくれたんだから。もう少し寝てなさいね」

「え？ 倒れてた？」

「この暑いのに帽子も被らず外で遊んでいたからでしょ。家の前の通りでひっくり返っていたのよ」

そう言ってお母さんはわたしをさっさと追いやり、ベッドに連れ戻してしまった。やたらと額をこしこしとこすられて、わけもわからずされるがままのわたしは、スタート地点に戻された理不尽な人生ゲームの気分で記憶を辿る。

あれは夢なのか、夢でないのか。何だか霧がかかったようで頭が上手く働かない。少なくともカエルのように裏返っていた覚えはないのだけど。

それでも現金なもので、しばらく横になっていると再び眠気が襲ってきた。身体は疲れているらしくて、寝返りを打つのも億劫。お母さんが置いていってくれた氷枕のひやりとした感じが気持ちよくて、やっぱりわたしは熱射病でおかしな幻覚でも見たんだわ、と尤もな説が浮上する。そうしてわたしがうとうとと船を漕いでいると遠慮がちなノックの音が聞こえてきた。

聞き慣れた響きに、わたしはそれが誰だかすぐにわかった。ぼんやりしていた意識を切り替えようと、息を大きく吸い込む。

「あのね」

彼が部屋に入ってくる気配はなかった。

「本当は稜介に水色の石をあげたかったの。水色の石はね、1回だけ持ち主の願い事を叶えてくれるんだって」

布団越しに囁くように声を出すと、稜介は扉の前から動かずこちらを伺っているようだった。聞こえているのかいないのか、構わずにわたしは続ける。

「だから稜介にあげたかったの。お父さんとお母さんともう一度会えるように、稜介にあげたかったの」

話しているうちにいろんな感情がごちゃまぜになってしまつて、自然と声が震えてしまう。水色の石を彼に渡したかった。両親を亡くした彼を元気にしたかった。そしてそのために自分だけでなく彼を危険に晒して、何か取り換えしのつかない事態を招いたような気がしてならない。

けれどこの原因が自分のエゴだったと認めてしまうには、多分わたしは幼すぎた。善意には良い結果が伴うものだとは幼稚に信じていたせいかもしれない。

「もし全部がわたしの夢だったら、今言つた事は忘れて。でも、ごめんね……」

消え入るような声でそれだけ呟くと、もうそれ以上を口にする勇氣はなかった。涙が枕を濡らして冷たいけれど、顔を上げる事も出来ない。

本当はわかっている。あれは夢なんかじゃないって。

「おやすみ」

たった一言、確かに稜介は声を返してくれた気がする。けれど熱が出て本当に具合が悪くなったので、この後2、3日は寝込んでいて記憶が薄い。全ては彼の家族が亡くなって一カ月頃の出来事だった。

かといつてもそれ以降、稜介の態度は今までと変わる事はなかった。

わたしが彼を宇宙人だと思い始めたのはこの後からで、そう、高校生になって稜介が隣家で暮らし始めてからになる。

この頃になって、と言うよりも少し距離を置いたからこそ、わたしはようやく稜介が他人様からどう見られているかを知ったのだ。高校に入った稜介はそれはそれは異性に大人気だった。まずはやつぱりその容姿で、多くの友達曰く雑誌のモデル以上に格好良いらしい。なんと影でファンクラブまで出来たって言うんだから、普通の美形の域を超えている。けれど一緒に暮らしていた家族を相手にそれを意識する事なんてなかったわたしはただただ驚いた。

頭も良いっていうのは知っていたけど、全国模試で一桁レベルや入学当初から大学側の推薦お誘いが来るのも次元が違う話だった。おまけに中学から続けていた高跳びは今や全国大会の出場で、あっさり優勝。美術で絵画を描けばコンクール入選、音楽では習った事もないはずのピアノを初見で弾きこなす。英語のスピーチ弁論大会ではネイティブ顔負けの言語を操って、温厚な人柄は先生からの信頼も厚く、同性の友達も多い。まさに老若男女問わずの理想が服を着て歩いている状態。そう、稜介は完璧人間だ。

完璧、無欠、パーフェクト。

そしてそのあまりの無双ぶりに、わたしの頭の中で疑いが芽生えたのだ。

ちよつとスーパーマン過ぎないかな、これって。

勿論世の中には非凡な人間は数多くいるけれど、わたしは彼程欠点が見当たらない例を知らない。ううん、ただ幼馴染がこんなに凄い人間だった事実が、余計に頭の中で誇張されてしまったのかもしれないけれど。とにかくわたしにして見れば規格外。稜介に出来ない事なんてあるのかしら？

断っておくけどこれは凡人の僻みや嫉妬ではない。そんな負の感情は吹っ飛んでしまいうくらい稜介の築き上げてきたものは大きいから、だからこそその異常さが際立つのだ。

そして思い起こされる、小学生の時のあの事件。

わたしは稜介を怖いと思った事はない。あの事件で不思議な力を見てしまったけれど、別段それをどう言うつもりはなかった。記憶の中で彼が秘密にして欲しいと言ったのだから、誰にも言わない。あれはわたしと稜介だけの秘密。そもそも助けられた身分で文句など言い様がないのだから。以降この件を深く考える事もなく変わらぬ態度で生活してきたけれど、最近になつて彼の非の打ちどころのないステータスを知ったわたしはようやく考える——人間以上の力を持つ存在って何なの？ 限りなく外見は人間に近い——幽霊じゃない、妖怪じゃない、悪魔でも天使でもない。そして辿りついたのが宇宙人。それも極めて人型に近いタイプ。

ああ、彼がもし不思議な能力を持つ宇宙人だったら？ 人知を超えた力を持つ、心優しい人間の振りをしたわたしの幼馴染。きつと何らかの事情があつて、人間社会に混じり込んでいるのかもしれない。馬鹿馬鹿しい発想だったのに、今ではわたしはそれを信じている。だってあまりにそれが納得出来たから。

わたしは稜介が宇宙人だつて構わない。けれど問題はあつた。

彼が何か大きな秘密を抱えているのは間違いない。そしてその秘密がいつか彼を押しつぶしてはしまわないだろうか。何か漠然とした不安が、常に彼を圧迫してはいないだろうか。

そして彼が本当に宇宙人だったら、わたしを助けてくれたあの記憶通り、その事実によつていつかわたしから離れていつてしまわないだろうか。

どこにも行かないで欲しい。

恋のように甘い感情じゃなければ、こんなふうに思う事って許されないのかな。でもわたしは彼にそばに居てほしい。わたしの大切な家族で、幼馴染で居てほしい。そんな醜い独占欲は際限なく広がってしまう。

だから、わたしは今日も彼が宇宙人でない事を祈つて、意味のあるように全くない観察を続ける。彼が宇宙人ではないと、何か決定

的な証拠が欲しいのだ。けれど不可能や悪魔の証明が難しいように、そんな確証は何処にもない。疑いばかりが広がって堂々巡りで、はつきり言って不毛過ぎる。

昔から変わらないエゴイズムの塊が、平凡人間の裏の顔としてここまで大きく育ってしまった。彼が本当に普通の人間だとわかれれば、わたしのこの誰にも話せない不安は消えてしまうのだろうか。

オリオンもアンドロメダもオメガ星雲も。わたしのちっぽけな脳にはこれ以外の名前は思い浮かばないけれど、どうかこれらが彼の故郷ではありませんように。いつか未知なる地球外生命体が家に乗り込んできて、我々の仲間を返せと直談判されませんように。稜介は立派な地球人で、全てがわたしの頭の中の愚かな妄想で終わってしまいますように。

「藤倉、次の英訳やったか？」

そうは言っても個人的観察任務はなかなか大変。今日も教科書をブックにちらちらと鋭くはない眼光を投げつけていると、背後からクラスメイトの声がかかった。

よく日に焼けた浅黒い肌の彼は、友人の上原君。

彼は学年でも有名なサッカー少年で、少し背が小さいのを気にしているらしい。わたしから見れば同年代の女子と同じ目線でも特に問題を感じないんだけど、年頃の男の子、特に背の順が前方範囲の子にその話題はNGだと遙に教えられた。だけどその問題を抜かせば愛嬌のある顔で人気がある男の子だってことも知っているし、話しやすい人柄で結構親しくしている。

「俺今度当たるんだけど、23ページのこの行がさっぱりわからないんだ」

手元の盾を指差す彼に、ああ、と心の底で呟く。休み時間に英語の教科書なんて広げているからいけないのか。

「ここ？ 難しい構文だね、わたしも上手く訳せないよ」

「藤倉もか、困ったな……」

残念ながらわたしの頭脳は平均点をとる事にかけてだけ一人前なので、ちよいとレベルの高い質問なんかはするだけ労力の無駄と言うもの。上原君には悪いけど、他を当たって頂きたい。大丈夫、胸を張って幹旋出来る人物がいるからさ。

「稜介に聞いたら？」

それが確實だって。そもそも彼は宇宙人と深い交流をしている一人だし。

「え、ああ……そうだな」

ところが何だか上原君の表情は曇りがちで、そのまま主が不在だった前席へと座り込む。教室のざわめきに紛れて、歯切れの悪い声が続く。

「そういえば映画のチケットなんだけど」

うつむき加減の上原君の顔はほのかに赤い。

「ああ、あれ？ 上原君からなんだってね、ありがとう」

日曜日に予定されている映画を、わたしは密かに楽しみにしている。前々から好きなシリーズの最新作なので、復習をかねて前作のDVDを見ておかなくちゃ。

「チケットはさ、親戚が配給会社だからいくらでも手に入るからいいんだ。でもあれさ、本当は俺が藤倉を――」
「孝之」

そこで丁度紹介予定だった稜介の声がして、わたし達は顔を上げた。

「向井先生に呼ばれてるよ、急ぎっばい」

そう言って提出物プリントの山を持った稜介が、教室の入り口から顔を出していた。サッカー部の運動場貸出の申請がどうたら、と短く言葉を交わすと入れ替わりに上原君が扉から慌てて姿を消していく。途中ちらりと残念そうな顔でわたしを振りかえったけれど、何も言わなかった。きっと本当に急な件なのね。

それとも、もしか？

「ねえ、映画の券ってどういう経緯で稜介が手にしたの？」

宇宙人はクラス委員という面倒な役割もさりとこなしている。わたしはプリントの山を半分手にとって配ろうと立ち上がった。

「孝之の発案で。テトリスで勝った奴が仲間内で貰える事になったんだ」

そういえば近頃クラス内では何でも賭け事ゲームが流行っていた。

商品はジュースとか宿題の写し程度だった気がするけど。わたしも前に数人で学食のパンを賭けてトランプをした事がある。泣く泣く遙にクリームパンを献上したのは良い思い出だ。

「そっか、上原君本当は自分で観たかったんじゃないのかな」

さっきのやたら名残惜しそうな顔を思い出して、わたしは首を傾げる。

「伯父からチケットは大量に貰ったって言ってたから、小夜子が気に入る事はないんじゃないの？　自分で観たければ観に行けばいいし」

「それもそうだよね……」

これがタダ券で2枚しかなくて、っていうなら話が別だけど。――応割引券で彼の手元には複数枚あるらしいし。

「もし上原君がどうしても稜介と観に行きたいなら、わたし遠慮するから言っただけ。さっきの様子からして、本当は稜介と行きたかったんじゃないかと思うのよ」

男の友情を壊す趣味はない。わたしが神妙に口を開くと、隣の稜介は何故か複雑そうな顔をしていた。

第6話

じりじりと照り付ける太陽は今日も元気に輝いていて、空は雲一つの浸食も許さず真っ青。どの運動部も絶好の練習日和に気合十分、グラウンドには掛け声や怒声が響き渡っている。それに混じって鳴くセミのコーラスはうるさいけれど、もっと激しい動きをすれば気にならない。先輩達と入れ替わりのラリー練習を続けているといい加減手が痺れてきた頃によりやく休憩が入った。

「さっきのサーブは良かったね、あたし反応できなかった」

お互いベンチに腰掛けて、タオルを片手に飲み物を手にする。遥は汗を拭きながら喉を鳴らした。

「本当？ でも片桐部長みたいなラインギリギリの絶妙な感じには程遠いのよね」

大会まではあと三日。地区大会突破が目標レベルではあるけれど、去年よりかは動けるようになったと思う。1年の積み重ねが実感出来るのは嬉しい。グリップがボロボロになってきたラケットも勲章ものだ。

程良い疲労感に満足していると、足元に誰かの影が重なった。ふと顔をあげれば、見覚えのある女の子が目の前でわたしを見つめている。

あれ、この子って？

「藤倉先輩」

その声でわたしはあっと思ひ出す。

「どうしたの？」

「あの……この間はすみませんでした」

2つに結んだ長い髪と小柄な身体が印象的な彼女は、小動物的可憐さを持ち合わせている。腕や足が細くって、肩なんか折れそうなくらい華奢で、これぞ女の子って感じ。

「私、1年の文坂綾乃です。えっと、謝罪したいのはまずこの間練習中に余所見して補助しなかった事。それから佐川先輩について盛り上がっててひどい言葉を言ってた事です。部長から庇って頂いたのに、申し訳ありませんでした」

丁寧な謝辞に深々としたお辞儀のダブルコンビを披露するものだから、わたしは慌てて思わず立ち上がった。

「き、気にしてないよ？ いいから顔上げて、わざわざありがとね」

隣で遥が笑いをこらえているのが気配でわかる。だってこんなの慣れていないし、全く人事だと思ってるさ。

「先輩は……何だか不思議な人ですね」

顔を上げた綾乃ちゃんは、大きな瞳をくりくりさせて首をかしげる。

「みんな普通の人普通の人って言うし、確かにそんな雰囲気醸し出しているけど……どこか達観して物事を見ていて、さりげなく配慮が出来て優しい。それに何でも受け入れてくれるというか、全てがすごく自然体なんですよね」

人生17年、初めての他人様からそんな評価を頂いた気がする。
何て返事をすればよいのかわからないわたしに、遥は更に肩を震わ
せていた。

「そうそう、小夜子って誰にでも警戒心を抱かせない人畜無害的な
良さがあるのよね」

感動の台無しをありがとね、遥。でもそれ褒め言葉じゃあないで
しょう。もしや頭がおめでたいとも言いたいの？

「佐川先輩とは、お付き合いされてないんですね」

「そうなの、幼馴染だから結構誤解する人はいるんだけど。お互い
恋愛感情なんて全くないよ」

ナイスタイミング、これは1年生の間で誤解を解いて貰わなきゃ。
わたしが意気込んで答えると、綾乃ちゃんは嬉しそうに微笑んでい
る。

「佐川先輩って本当に凄い人ですよ。あれだけ格好良い上に勉強
も運動も、およそ高校生で出来得る範囲を軽く超えている感じで。

しかも人望まで厚いとか」

「うーん、そうだね……」

やっぱり後輩からの視線だと3割増しくらいの美化はあるのかな。
そんな水増しなんて必要ないくらい立派なんだけど。

目をキラキラさせて頬を赤らめる、そんな可愛い彼女を見て
いると、これが本当の恋する乙女の姿なんだろうなと実感する。周
囲の空気をピンク色に染め上げるオプション機能付きとは、やっぱ
りわたしにはちょっと無理だ。

「確かに、昔から無駄に何でも出来るんだよね」

「あはは、それじゃ何かあまりに出来過ぎで人間じゃなくて宇宙人みたいですよ」

この瞬間。心臓がぎゅつと握り潰されて口から欠片が飛び出るんじゃないかと、本当に誇張ではなくてそれくらいの衝撃がわたしの胸を走った。試合時の緊張感溢れる鼓動よりも数段早い動悸に頭がくらくらし、ひよつとして倒れ込むんじゃないかと思うくらい。

ここが学校でなくて、後輩の前でなければ。わたしは絶対この場から一目散に逃げていたかもしれない。

綾介が宇宙人。わたし以外の人にまで、そう思われてるの？

「だから先輩は羨ましいです。私佐川先輩にあこがれているので、先輩がライバルじゃなくて良かった」

綾乃ちゃんが可愛らしい笑顔を向けてくれるけど、それに微笑み返す余裕がない。

セミの声がうるさく鳴り響き、太陽に蒸された地面の上はゆらりゆらりと外気が震えている。その先にフェンスがあり、隙間から陸上部員達の姿が見える。目を凝らせば彼の姿を見つけてしまいそうなので、わたしはわざと横を向いた。心臓の音が鼓膜の奥で反響して、耳が痛い。

落ち着いて、はやく落ち着いてよわたしの心臓。

休憩終了の笛の音が鳴ったのはそのときで、綾乃ちゃんはぱっと集合場所へ振り返る。

「あ、じゃあわたし1年の持ち場に戻りますね。先輩のスコアはぱつちり記録しておきますから」

遠ざかる背中に揺れる髪を見つめても、わたしの平常心は戻らない。隣でラケットの具合を調整していた遙が、不審そうにわたしの顔を覗き見る。

あれは冗談だってわかってる。わかってるのに、この言いようのない不安は何？

「藤倉さん、片瀬さん」

「片桐部長？」

休憩が終わったら自主練習の時間だ。けれど珍しくラケットもボールも持たない状態で片桐部長がやってきた。

「調子はどう？」

「小夜子はかなり調子を上げてきてるので、わたしも何とか。ダブルス初の優勝目指しますよ」

遙はにっこり笑ってVサインを作って見せる。わたしも頷いて、ちよつと強張った笑みを顔に貼りつかせた。

「それは良かった、期待してるわね」

よく日に焼けた肌に、白い歯を覗かせた笑顔が輝く。片桐先輩は夏が似合う人だな。

「あ、あとそれで申し訳ありません。陸上部の場所の件ですけど……」

「本当に聞いてくれたの？」

わたしが行動を起こしたのがそんなに意外だったのか、片桐部長は目を丸くしている。でも結果は失敗なので、報告は心苦しい。

「そう、ありがとう。気にしないでいいのよ、駄目元って言うか、結局自分のために言ったただけだから」

「自分のため？」

それこそ意外な返答。どういう事なの？

「最後の大会を前に自分をおかしな方向にもっていきたくなかったの。でも、人間自分の感情に嘘はつけないわね」

部長ははにかんだ様に笑って、ユニフォームのポケットから白い紙を取り出した。

「これ、彼に渡してくれないかしら」

綺麗でシンプルな封筒に入ったそれは、多分手紙。誰に、なんて問いかける必要はなかった。正しく折られた表の折り目に沿って、小さく彼の名前が書かれている。

「中身は秘密」

封をした赤い花のシールがやけに繊細に見えて、ぼんやり綺麗だなと思った。そしてわたしは何時の間にかその手紙を自分で持っている事に驚いた。割と強引にわたしの手に押しつけるようにそれを持たせていた部長は、わたしの指先をぎゅっと握る。掴まれた人差し指の先が少し熱い。

「全てスッキリさせて試合に臨むのも悪くないと思って」

「ねえ小夜子、大丈夫？」

生ぬるい風が吹いて、わたしのポニーテールを揺らしている。汗で頬や首に貼りつく髪が気持ち悪いけど、タオルで拭う気にはなれなかった。顎を伝った滴が重力に負けて、ぼたりぼたりと地面に染み込む。

「うん……」

身体はどこも悪くない。そう思うんだけど、何となくお腹の下辺りにもややもやしたものを感じる。すつきりしないと言うか、喉に刺さった小骨が胃にやってきたと言うか。

何かがどこかでつつかえている、そんな感じ。

「でもあんた、今にも泣きそうな顔してるよ」

心配してくれる遙の声すら、どこか遠い。大丈夫、と返す声は半ば自分に言い聞かせているように頭の中で反芻される。

だって心が重くて、どうしようもないの。

第7話

家に帰ると健太郎は分厚い眼鏡をかけて、居間のテーブルを占拠していた。裸眼両眼驚異の2・0を誇る弟がなぜ視力矯正なんて必要なのか。聞かなくても長い付き合いでわかる、勉強はまず形からインテリごっこは眼鏡から。過矯正が眼精疲労の原因なのだと、このお馬鹿な弟はわかっているのかしら。

そしてそんなテーブルには、この時間には珍しい先客がいたりする。

「おかえり小夜子」

「お父さん、今日は早いね」

読んでいた新聞の影から顔を出したお父さんはごく普通のサラリーマン。どちらかと言えば健太郎は父親似で、だから結構渋いナイスミドルではあると思う。

「今日はやつと今までの仕事が一区切りついたから。ああ、タイガ―屋のどら焼き、冷蔵庫にあるよ」

「うんありがとう、2人とも食べるよね？」

台所の湯沸かしポッドに火をつけて、急須にお茶つばをよそう。

お父さんが帰ってきたから、今日の夕飯は5人分、カレーでいいかな。

「はいお茶」

程良く蒸らしたお茶をテーブルへ運べば、弟は相変わらず参考書と格闘していた。

「健太郎、勉強は進んでる？」

「参考書見てもさっぱりわかんね。兄ちゃんに聞くからいいけどさ」

どら焼きを片手に出る名前が稜介なのは、彼の頭脳が目の前にいる姉よりもずっと信頼されているからかしら。まあわたしだって自分に聞くより稜介に聞いた方が安心だから、何も言わないけどさ。姉としての威厳が底辺なのは確かだ。

「姉ちゃん、何か顔色悪くない」

「そう？」

お茶を飲む健太郎が眉を顰める。

「あ、宇宙人戦隊ビビンジャー始まるぞ」

新聞をめくっていたお父さんの手が、テレビ欄で止まった。そして同時に健太郎のシャープペンを握る腕もストップ。

「いつけね、もうそんな時間？」

慌ててテレビのリモコンを掴めば、今年買ったばかりの新しい液晶テレビから軽快なマーチが流れてくる。そして黄色いテロップでど派手に強調されるメインタイトル。

「健太郎はこれ好きだよね、おもしろいの？」

そう、彼は意外にもアニメが大好きで、ちよくちよく流行りのものをチェックしているらしい。今のお気に入りはこのビビンジャー。

「プレアデス星団からやってきた謎の怪宇宙人達を、宇宙パトロール隊のビビンジャー・ハロルドがやつつけるんだ。毎回毎回すごい超能力を使つてさ！ 女にはこの興奮がわからないんだ、マイナ―だけど今一番熱いと思う」

やたら息を巻く弟は年より随分子供に見える。黙っていればそれなりに見栄えのする子なのに。

「これが主人公？ やたら格好いい人ね」

画面に映った長めのパーマがかった髪に、切れ長の瞳の青年。甘いマスクはどことなく稜介に似ている気がして、わたしはその姿を目を細めて見つめた。

「ハロルドは不慮の事故で地球に辿りついた別銀河系の宇宙人で、詳しい正体は謎。どうやって帰ろうかと模索しながらも、地球の平和のために命を懸けて戦う孤高のヒーローなんだぜ」

故郷でもない星のために戦ってくれるなんて、素晴らしいボランティア精神の持ち主ではあるまいか。さすがは主人公ね。

『ハロルド……話があるの』

『どうしたんだい、ミカ』

テレビの中ではヒロインらしき少女とハロルドが肌にフィットする派手な赤い服を着て、これまた近未来空想都市のような場所を歩いている。

『スペース・ステーションへ貴方の星から連絡が届いたわ。ハロルド、貴方やっと帰れるのよ』

『本当かい！？』

ミカちゃんは可愛い女の子で、年はわたしと同じくらいかな。アニメだからはつきりしないけど。彼女は暗い顔をして、ハロルドを見上げる。目に浮かぶのは今にもこぼれんばかりな涙で。

『ミカ……？』

『貴方は、やっぱりわたしを置いていくの……？』

ハロルドの困ったような表情がアップで映し出されて、メロドラマみたいな悲しいBGMが流れてくる。頬を伝うミカちゃんの涙に次第に高まる緊張、そしてその答えは——てな感じで、以下次週オチ。

「おお、遂にハロルドは星へ帰るのか」

何だかんだでお父さんも見ていたらしく、お茶を片手に興奮している。

「ミカは人間だからな、彼とは寿命が違うし。置いていくだろうなあ」

どうやら2人は恋仲で、ただど種族の違う結ばれない運命でという悲恋モノも織り込まれたSFアニメのよう。わたしはストーリーを詳しく知らないからのはつきりとは言えないけど、仮にミカちゃんの立場を思うとやっぱり切ない。

どら焼きを食べ終え切りよくアニメも終わったので、わたしはデビューを離れて夕飯の準備に取り掛かる事にした。いつものように部活帰りに買ってきたスーパーの袋をこそこそあさっていると、背後から健太郎の声がする。

「姉ちゃん、何この手紙」

人參を握る腕の力が抜けて、そのまま床へと転がる。わたしは焦って振り返り、不思議そうに手紙を見つめる健太郎の腕からそれを全力で奪い返した。

「ちょ、何だよ！」

かなりムツとしたらしい弟は、剣呑な目つきでわたしを睨む。

「今制服のポケットから落ちたから拾ってやったのに」
「ええっと……」

あきらかにこちらに非があるので、わたしは素直に謝った。

「ごめんごめん、部活の先輩から稜介に渡すように頼まれた手紙でさ」

けれどそれがいけなかった。彼の名を出した途端健太郎の目が益々激しく吊りあがったのだ。

「兄ちゃんに渡すように？ それってどんな内容かわかってるの？」
「さあ、中身なんて見てないからわからないけど」

何処に地雷があるかなんてわからない。健太郎は一際苛立ったような表情を見せたけれど、結局何も怒鳴らずに首を振る。

「姉ちゃん……」

やたらと弱々しい声で、なのに信じられないという非難を込めた
呟きだ。

「俺が口出す事じゃないけどさ。これ女の先輩からでしょ？ 年頃の女が男に手紙だなんてラブレターに決まってるじゃん。何でこういうのゴキブリはいはいばりに受けてくるの」
「受けちゃまずいの？」

健太郎が何を怒っているのかわからない。それに姉を恐ろしい生物の捕獲兵器に例えるとは何事か。

「まずいに決まってんじゃないか、どんだけ鈍いんだよ！ 姉ちゃんなんて100年経っても200年経っても何も気がつかないんだろ！」

「何わけのわからない事を……そもそも普通の人間が100年以上生きていられるワケないでしょ！」

わたしがガツンと思い切りテーブルを叩き、健太郎がガタンと音を立てて豪快に椅子から立ち上がる。姉弟喧嘩開始のゴングによってお互い臨戦態勢。回収した人参剣と参考書盾を装備してお互いに牽制しあう。

「姉ちゃんはどうしてそう呑気なんだよ、何もわかってないくせに！」

「だから何をわかってないのよ!？」

「兄ちゃん、本当は——」

「健太郎」

ついつい口論が激しくなって、さすがにお父さんが口を挟んでき

た。

「こちらが口を出す事ではないだろう。いいんだ、全部稜介君に任せるから」

目ぼしい記事を読み終えたのか、新聞を折りたたむ。まだ喚いている健太郎を宥めながら、わたしを向いて笑いかける。

「ここはいいから小夜子、夕飯を頼むよ」

わたしは頷いて、人參を持ったまま台所へと戻っていった。

健太郎とはしょっちゅう喧嘩をしているけれど、大抵お父さんが稜介の仲裁で終わってしまう。今日みたいにヒートアップする事も少なくないのは、もしかしてわたしの精神年齢が健太郎と同レベルなのかしら？

この問題を深く考えるのはよくない、気を取り直して夕飯はカレーだ。各野菜や肉を切つて、玉ねぎと炒めて、あとは市販のルーで煮込めばおしまい。隠し味にはチヨコレートを入れて、ご飯は昨日の残りで済ませよう。

手際良くリズムカルな包丁裁きはわたしの密かな自慢。無心でじやがいもを切っていると、不意にまた心が曖昧なもやもやに包まれてくる。とつてもとつても嫌な感じ。

まったく健太郎め、誰が鈍いつて？　これがラブレターだなんて、わたしだって薄々気がついてたもの。

片桐部長、稜介が好きなんだろうな……そんな事が更に心中浮かび上がってきて、わたしは首を何度も振った。けれど霽は晴れなくて、握る包丁にもつい無駄な力が入ってしまう。

どうしてこんな気持ちになるんだろう、別に稜介が誰と付き合おうと構わないのに。そんな事をぶつぶつ考えながら3つ目のじゃがいもに手を伸ばした瞬間。気を張り詰めたせいなのか、右手から包丁がすり抜けた。

あ。

刃はわたしの左指をかすめ、そのまま真つすぐ落下していこうとしている。黒光りするステンレスの予想着地点は右足の甲だけど、今から脳に避けると命令した所で間に合わない。よく研いだ刃は野菜も肉も魚も筋まで切れると自負する程。スリッパも履いていないし、靴下も脱いでしまった素足だから、それなりのダメージは覚悟しないと。

痛みに備えて目を瞑る。ああ、何だか今日って散々だわ。

けれど予期した衝撃は数秒経つてもこなくって、わたしはゆっくり瞳を開けた。恐々と足元を覗きこめば、果たしてそこに包丁はあった。そう、確かにそこにあるんだけれど。

甲の上、5センチ程度。そのわずかな上空に刃を下にした包丁。紐も糸も付いていないけど、それは空中で静止している。

「え？」

まさか自分の足の上でこんな事がおこるとは思わなかった。わたしがゆっくり右足をその場から引き抜くと、台所マットの上に包丁の静止画という実にシニールな絵面が完成。

な、な、何これ！？

「お、父さん……健太郎……」

視線を離さず後ずさるように距離をとると、うわごとのように2人の名を呼んでみる。このまま振り返ってダッシュしようかと思っただけのとき、ゴツンという音をたてて包丁はマットへ落下した。今度こそ重力に反発せず、予想通り先程わたしの右足があった場所へ。そうつと近寄って手にとってみれば、いつもと何も変わらない包丁で。近くのショッピングセンターで買った有名メーカーのそれがない。わたしは包丁の柄を抱えて思わずその場にへたり込んだ。その拍子に背後にあつた食器棚へ後頭部が軽くぶつかる。ええつと、何時から藤倉家にはこんな怪奇現象が起こるようになったの？

「小夜子、何か音がしたけど？」

「稜介？」

気がつけば居間との仕切りドアに帰ってきた稜介が立っていた。

「どうしたの、包丁抱えて……それに顔色悪いよ」

「あ、うん、えつと」

何だか上手く口がまわらない。それにあまりに混乱していて、今起こった事が伝えられる自信がない。

おかしい。絶対におかしい。しかも何だか変なところを打ち付けたのか物凄く頭がズキズキする。もしかしてこの間の水油事件の霊の仕業なの？ ちゃんとお供え物をしたのにどれだけ了見の狭い霊なのよ、こんなにビビらす事ないじゃない。

「……それともこれ夢？ わたし寝てるの？」

真剣な顔で稜介に尋ねてみると、彼はわたしの手から包丁を取り上げてまな板の上に置いた。

「やっぱり随分疲れてるんだよ。早く寝なつて」

「うん……」

確かに頭痛がするし、今日は身体も本調子ではない気がする。でもだからと言ってそれで納得ですませられるレベルじゃあない。

「稜介、今その包丁が――」

「ほらいくよ」

ぐいつと意外なくらい強い力で腕を引っ張られ、わたしは思わず中腰になる。

「ちょ、ちよつと!」

「ん? 抱っこで運んで欲しいの?」

「いやいやいや、そうじゃないでしょ!?

けれど有無を許さない笑顔が降ってきて、わたしは何も言い返せず自分の部屋へと向かうはめになった。余裕な態度があまりに悔しいので、宇宙人は無駄にフェロモン全開、と心のメモ帳に赤ペンで追記しておく。

第8話

「37度4分。うーん微熱ね」

お母さんが目の前で体温計を凝視する姿が見える。

「まったく、具合が悪いならはやく言いなさいね」

見慣れた電球の丸い形の光が虹色の輪っかのようで目に眩しく、わたしは頭から布団を被った。瞼の裏がチ力チ力と明暗に揺れて変な感じ。

「あんまり心配させないで頂戴」

「ん……」

「ごめんなさいと口を開こうとしたけれど、それがあまりに億劫に感じて言葉にならない。ベッドに身を横たえていると、体中にじんわりと熱が広がるのがわかって、ああ本当に風邪引いていたんだなと思う。

「夕飯は稜介君が作ってくれたから食べなさいね」

「あ」

「あ？」

お母さんが怪訝そうな顔でわたしを見る。

「えと……何でも、ない」

まさかの包丁浮遊事件を母に告げるかどうかは躊躇いが大きかつ

た。だってあり得ないし、それこそ具合が悪くて見た幻覚かもしれないし。

本当にあれは何だったんだろう。軽く30秒くらいは空中停止してたと思うんだけど。

「とりあえずこれはお水。飲めるようなら飲みなさい」

ベッドサイドボードにお母さんがコップを置いてくれる。喉がからからに乾いていた事に今更ながら気がついて、わたしは身体を起こした。結構汗をかいているらしく、全身の肌がじつとりと湿っている。

そのとき丁度、ドアがノックされた。

「綾介君？」

わたしが水を飲み干すのと同時にやってきた彼は、お盆に小さな器をのせて持っている。

「小夜子のご飯です」

「ああ、ありがとね」

お母さんはもう一度わたしの額をさすって熱を確かめると、飲み終わったコップを持って出て行った。スーツ姿のままでったから、家に帰って真つ先にわたしのところに来てくれたのかもしれない。普段はわかり辛い母の愛情をちょっぴり心の奥でかみしめて、わたしはベッドの横に腰掛ける綾介に向き直った。

潤いを取り戻した喉はなんとか話す気力も与えてくれて、彼の手の中にある白いお粥は魅力的な匂いを漂わせている。

「ほら、これ」

手渡されたそれはシンプルな芋粥で、昔から藤倉家の病人食王道メニュー。少量口に含めば優しい味が口内に広がった。

「稜介、料理出来たのね」

「小夜子程上手くは出来ないよ。いつもこっちでご飯食べてるしさ。でも、たまには作るかな」

一人で暮らすなら、多少の料理の腕は必要だもの。うちはわたし以外誰もお粥すら作れないから、立派だと思う。そういえばこの間のコロッケも結局揚げていたのは彼だった。

わたしに唯一誇れる事があるのなら、それは料理の心得だったのに。ないとは思っけど、稜介が本気でこの道を目指す事だけは遠慮して貰いたい。

「そっついえば部活は？」

思えば稜介の帰宅には少しばかり早い時間だった。何の連絡もなかったけれど、どうかしたのかな。

「早退してきた、健太郎からメールで連絡きて」

弟は何時の間にそんなスパイ行為をはたらいていたのか。いやそれよりもそんな事で早退したの？ 稜介はわたしと違って全国区の選手なんだよ？

ちよつと半眼で彼を睨んでみると、稜介はゆっくりり首を振る。

「いいんだよ、小夜子の方が大事だから」

あっさりと穏やかな表情でそう答えられれば、わたしの非難の言

葉は脳から吹き飛んでしまった。

このタイミングで、それがくるなんて。

「ずるい」

そうだ卑怯だ、不意打ちだ、不公平だ。

「何でそんなに優しいの、どうしてそんなに完璧なの」

ますます完全無欠に近づいて、どんどんわたしから遠くなる。ますます得体の知れない宇宙人になる。

ああ何だろう、この感じ。やっぱり心の底がもやもやする。

「僕は完璧じゃあないよ」

稜介は苦笑して、わたしが長年愛用している枕元のクマのぬいぐるみを手にとった。幼い頃に両親から誕生日プレゼントとして貰ったもので、名前はクマ吉。実に安直なネーミングセンスだ。

「小夜子の知らない所で、欠点と矛盾だらけなんだから」

「どこにそんな弱点があるのよ」

その2つに苦しんでるのはわたしだ。彼にそれがあるのなら是非教えて欲しい。

「それは秘密。もう少し寝てなよ、頭は痛くない？ 寒気は？」

「ちよつと頭痛がする。寒いよりは熱くて」

「わかった、マヤさんに着替えを用意してもらつように言っておくよ」

わたしがお粥を食べ終えた事を確認すると、綾介は立ち上がった。

「待って」

差し込まれたクマ吉を押しつけて、わたしはサイドボードの鞆を指差す。熱さで頭がぼうつとして、その距離を歩く事が出来ない。

「その鞆の中に手紙が入ってるの。知り合いの先輩から綾介につて頼まれたものだから、持っていて」

綾介は一瞬眉を顰めたけれど、何も言わず片桐部長の手紙を取り出した。ちらりとわたしに視線を投げかけて、でもこの場で手紙を開く事はない。段々身体が辛くなってきたので、わたしはいそいそと布団の中へ身を沈めた。

「おやすみ」

閉まる扉の外から掛けられた言葉がやけに耳に残って、これで約束を果たしたという安堵感なんてまるでなかった。わたしはクマ吉をぎゅっと抱きしめて、はやく夢の世界が訪れるよう無理矢理目を瞑る。でも瞼を閉じてても頭痛がひどく響いていて、穏やかな眠りは明け方近くまで許されなかった。

「おはよう小夜子……って、どうしたのそのマスク」

教室に入るなり、本を読んでいた遥は驚いた声をあげた。

「ん、風邪引いたみたいで」

わたしは顔の下半分を丸々と覆うマスクを身に着けていたので、答える声も若干くぐもっている。お粥と薬のダブル効果はそこそこ発揮されたのか、一応朝には平熱まで下がっていた。頭と喉は痛いけれど咳はそれほどでもない。マスクはだから、念のため。遥にうつしたら嫌だしさ。

よろよと自分の座席へ向かうと、前の席には友人と談笑している上原君の姿があった。

「あれ、藤倉具合悪いの？」

「少しね。でも薬飲んだから結構楽になったよ」

「夏風邪か？ 無理するなよ」

相変わらず彼は気さくな人だ。そういえばサッカー部もそろそろ試合が近かった気がする。

「部活出れそう？」

遥が隣から声をかける。眼鏡の奥の瞳で眉が顰められて、心配かけてるんだなとわかった。

「放課後まで様子見て考えるね、大会近いし出たいんだけど」

「体調崩されちゃあ話になんないでしょ。いいから休みなさいよ」

それももつともなご意見で、わたしとしても悩みどころ。もう日にちがないし、熱がないならなるべく練習しておきたいんだけどな。まだ朝のホームルームが始まるまで時間は結構あるのに、教室は登校してきた生徒達が半数以上。うちの高校はごく普通のレベルだ

けど、割合真面目な校風で生徒もそういう傾向がある気がする。ただ陸上部員の子達は全員姿が見えないから、朝練の最中なんだろう。稜介もきつとグラウンドを走っているに違いない。ふと窓の外に目を向ければ、ジョギングの規則的な掛け声とともに走っている野球部の一団がいた。今日は風もなく暑いから、さぞかし大変だろうに。

公立高校にも全国統一でクーラーをつけるべき、と何時だったか怒っていたのは遥だったかな。確かに隣の学校は冷暖房完備でウチには一切の設備がないとは如何なものか。健太郎の通う中学にさえ設置されているらしいのに。

「あれ。あそこにいるのって稜介か？」

上原君が窓枠に両手をついて、外を見下ろしている。ここは4階だから校庭が一望出来るんだけど、彼が見つめているのはグラウンドの隅。かなり距離のある、南門にある雑木林だ。

「本当、佐川君ね。隣にいるのは片桐部長じゃない」

遥も席を立って彼の隣へやってきた。野次馬根性とも言つべきか、心なしか声が弾んで嬉しそう。

「こんな朝から人気のない校庭の奥で……やっぱりね、部長も佐川君が好きだったんだわ」

「テニス部の部長さん？ さすが稜介、年上からもあるんだな」

上原君も、もしかしたら遥と同族かしら。会話の声に好奇心が滲んでいる。

「そりゃ松の上不可侵条約の君だもんね。小夜子、今日は旦那を觀

察しなくていいの？」

いつの間にか締結されていた稜介ファンクラブの条約。そうか、3年生じゃないと単独で彼と接触出来ないんだっけ。

「うん、今日はいいや」

だって今、片桐部長と一緒にでしょ？ 何か悪い気がして、そう視線を逸らそうとしたとき稜介がゆっくりとこちらを向いた。遠目で距離があってもはつきりわかる。でもその表情まではわからない。何だかとても気まずくて、わたしはぱっと顔をそむけた。向こうはわたしが見てた事をわかってしまっただろうか。

稜介と部長。そもそも面識があるのかどうかさえ知らないけれど、話していたのは――手紙の件？

「ほら、そろそろ一限始まるよ」

折よく予鈴チャイムが鳴ったので、教室がばたばたと騒がしくなってきた。遅刻ギリギリで駆け込む者や、隣のクラスへ遊びに行っていた者、部活の朝練組が次々と教室へ入ってくる。おかげで一気に熱気が溢れてきて、あきらかに教室の温度が上がった。そしてそのざわめきが頭に響く。

幸いにして窓際の席なのに、今日はあまり風が吹いていない。ああ、涼しい風が吹かないかな。分厚い窓に遮られるわずかな清涼感を求めて視線が泳いだ。すると上原君と目があって、暑いというジエスチャーと苦笑を交わしあう。せめて半開きになった窓を全てスライドさせようと片手を上げたとき、それは起こった。

まず聞こえてきたのは、ピシ、ピシリ、という微かな音。

何、と思う間もなく。目の前で突然窓ガラスの1枚に亀裂が走った。白い線が生き物のように透明な板を這いまわり、その軌跡を縦

横無尽に広げながら、物凄いスピードで一面を覆い尽くす。ほんの数秒で不均等な白い筋だらけになったそれに最初に気がついたのは多分わたしで、次に二つ前の席の女の子が悲鳴をあげて席から立ち上がった。そしてその行動に目を動かしたクラスメイト全員が、ようやく事態を目の当りにする。

「きゃあああああっ!？」

「おわっ、あぶねえっ!」

浸食をさらに隣の窓にまで及ぼして、あっと言う間に校庭に面した窓全てにヒビが入り、耐えきれなくなった部分が一気に決壊した。ガシャガシャンという硬質な音に窓際の席の子達はみんな一斉に飛びのいて、教室は騒然。わたしも慌てて廊下側へ避難して、青い顔をして震える遥と手を繋ぐ。

な、何なのこれ!？」

一度割れ出したガラスはもろく、見る見るうちに派手な音を立てて教室の床と外側へと破片が散っていく。わたしの机の上にも欠片がきらきらと光っていて、ここからだとは反射で綺麗に見えるのがひどく滑稽だ。今日まで特別意識した事もなかった教室の窓は、今や青空を映すその枠組みだけを残して、無残な姿を晒していた。

「……やだ、怖い」

「嘘だろ、何で急に割れたんだ?」

「っーか危ねえ、どうすんだこれは」

突然の惨事にみんな思考が停止して、出来るだけ窓から離れて固まっている。わたしだって遥の肩から手が離せない。そんな中上原君が恐る恐る窓へと近づいて、散らばった破片を手にとった。

「うわ、マジで粉々だよ」

先程まで求めていた風が入りこんできたけれど、きっとみんな暑さなんて忘れていて。嫌な汗が背中一杯に流れていて、むしろこの風でガラスの欠片が飛んでしまうの事の方が危険だった。

「小夜子っ」

不意に肩を叩かれると、背後の入り口に稜介が立っていた。陸上部のユニフォーム姿に、珍しく肩を大きく上下させて、額には汗が浮かんでいる。

「——片瀬さんも、怪我はない？ 今隣のクラスの先生が職員室に連絡行ってくれてるから」

もしかして校庭の端から走ってきたのだろうか。いつになく髪が乱れているし、息も荒い。心なしかわたしと遥を見つめる顔も何だか強張っている。

非常事態だからなのか、でも稜介のこんな顔って珍しい。だって目つきがすごく厳しい気がするのだ。

「ありがとう、わたしも遥も大丈夫だけど……一体何が起こったのか」

窓ガラスが割れた。それも唐突に全部。

「わからない」

混乱の続く教室の中、鋭利に割れたガラスを一欠片手にして、稜介はそれを指先で弾いた。

「わからないけど、君が無事でよかった」

第9話

幸いにして怪我人がでなかったから良かったものの、窓ガラス破損事件はその日のうちに一気に校内で騒ぎとなってしまった。結構な音がしていたし、クラス中も避難と動揺でざわついていたから、校内中に知られてもおかしくはないと思う。あれから駆け付けた何人かの先生が話し合つて、とりあえずわたし達のクラスは特別に家へ帰される事になった。多分こんな不可解な事件、とても対応仕切れなかったんだろう。

一応第一発見者、もとい目撃者として誰一人窓には触っていないかった事、ひとりでに亀裂が走って割れたのだという事だけは話しておいたけど、先生達はあんまり信じてくれなかった。本当に窓に触れていないのかと念を押されて、後は窓を施工して何年だの耐久年数だの、業者側の責任だのとあんまり外聞の良くない話ばかり。それ以上はわたしには関係ない話なので、遥と一緒に大人しく家に帰る事にした。

「あーもうマジ怖かった。何なのよねあれ、ム力つく！」

しおらしく怯えていた可愛い遥はもういない。いるのは理不尽な事態に怒りの反動を抑えきれない親友だけ。

遥とわたしの家は比較的近くて、同じ住宅街の丁目違い。その大通りへと続く商店街を2人で歩いていると、彼女は納得いかないとばかりにケースに入ったラケットを振りまわす。

「何で急に割れるのよ、一步間違えば大怪我よ。おまけにさつさと帰らされて。授業はどうでもいいけど部活は大会は明後日なのに！」

未だお昼をまわっていないような時間に解散になってしまい、数

人は部活に参加してもよいかという旨を申し出ていた。けれど他の生徒への建前上やっぱり認められなくて、半ば強制的に下校となっている。

「でもみんな無事でよかったよ」

ガラスの水溜りとなった教室は、窓の取り付け云々以前に一度徹底的に掃除しないとまずいかもしれない。今日の午後にも専門業者さんが来てくれないと、明日の授業さえ危うい。

「そうね、まあ小夜子も微妙に本調子じゃあないから練習はいいけど。明日には治しておきなさいよ」

「うん、ありがと。それじゃ気をつけてね」

お互いの帰路の分かれ道で手を振って、わたしはそのまま一人住宅の合間を歩きます。稜介は別の友達と寄り道して帰るらしいので、きつとわたしの方が家に着くのは早い。昼間の住宅街は閑静で人通りもないので、ときたますれ違う買い物袋を持った主婦に会釈をしつつ、足をひたすらに動かした。こんな時間に一人で通学路を歩く事なんて滅多にないことなので、一人でいると頭の中が考え事で一杯になってくる。

最近わたしの周囲で起こる不思議な出来事、これは気のせいなのだろうか。油が水に変わったのも、落下する包丁が空中で停止したのも、直接遭遇したのはわたししかいない。この二件は確かに謎なんだけど、よくよく考えるとわたしに降りかかる危機を回避してくれるとも思う。熱した油をかぶったり、素足に包丁の刃を落としたら怪我は確定だし、はつきり言ってこのおかげでわたしは命拾いしているはず。だから疑問に思う事があれど、陰ながら感謝もしているのだ。本当に藤倉家に最近住みついた幽霊が家賃代わりに手助けしてくれたのかもしれないしね。うん、そろそろこの説は言い訳苦

しいかな。

でも今日の窓ガラス事件は前述の二件とはあきらかに違う。何と
言うか、無差別な危険がすぐ近くにあった。規模も大きいし、原因
も全く不明。もちろん三件に関連性があるかどうかはわからないけ
れど。

緑の葉を繁らせた桜の木、夏場の別名毛虫ロードを足元に注意し
て進めば、自宅はもう目の前。お父さんもお母さんも仕事、弟は学
校なら当然家には誰もいないはず。そう思って玄関に鍵を差し込む
と、施錠はされていなかった。驚いてドアノブを掴むと、開いてる。
何て不用心。いやそれよりも、誰かいるの？

「——やっぱりもう限界よ」

ゆっくりと扉を開くと、リビングから玄関まで響いてきたのは母
の声。

お母さん？ 仕事はお休みなの？

「全てを話しても、小夜子が受け入れてくれるかしら」

中に入って扉を閉めようとして、その手が止まった。複数の人の
気配。

「もう隠し通せないだろう……拒絶されればそれまでだ」

これはお父さんの声だ。重々しくて、いつもの明るい感じが
ない。「兄ちゃん……全部姉ちゃんに話したら、もう一緒にはいられない
かな」

それに健太郎の声まで。平日の真つ昼間からみんな何をしているの？

「稜介君、いいかい。僕たちは娘の幸せを一番に願っている。君には辛い選択になると思うが……」

「わかりました。僕が秘密を、小夜子に話します」

掌が汗で滑って、わたしはそつと扉を閉めた。

お母さんとお父さんの声がした。弟も家にいるみたい。仕事が急にお休みになって、中学校も緊急で下校になったのかな。はは、じやあ家族揃って午後お出かけできるねえなんて。

そんな事を考えられる程お子様ではなく、けれど現実を見つめられる程大人でもなく。

百歩譲って家族が家にいてもいい。意味不明な会話をしててもいい。だけどそこにどうして彼がいるの。

秘密を話す？ 誰が、誰に？ 稜介が、わたしに？

嫌だ、やめて。

聞きたくない、そんなもの。だってそれを知ったら、稜介はわたしの前からいなくなる。それが嫌だから秘密なんでしょう？ どうして暴くの、どうして言うの、精一杯知らないフリをしてきたわたしは何なのよ。

お願い、やめて。

目の前が真つ暗で、治まってきていた頭痛がカーニバルのように鳴り響く。最低最悪の気分だったけれど、この場に留まる事が出来ず、わたしは元きた道を走りだした。

泣き喚くセミの声を聞きながら、全身に日差しを浴びる。正午辺りの直射日光は一日のうちで最も容赦がないので、セーラー服の下は汗だくだ。

マラソンには向かない季節なのに、私は一体何をしているのかしら。とりあえずマスクの装備は限界だから、新鮮な空気を求めてそれを外した。

世界中に幼馴染が宇宙人でしたって人はどのくらいいるんだろう。いや、そもそも宇宙人と深く関わった人の数の方がいいのかな。みんなこうして正体がばれたら姿を消しちゃうのかしら、だったらあんまりだ。そもそも正体がばれたら一緒にはいられないなんて三流恋愛映画みたいな設定は誰が決めたのよ、全宇宙の共通事項なの？ そしたら地球は適用外でいいよ、ううん、この際彼だけ例外に。だいたいそんな狭い視野で未来の宇宙開拓時代を切り開いていけると思ってるの？ もっと先見の明を持つべきなのよ、つまり異星人との交流はオープン情報で始めるべき。

ああ、わたし相当動揺してるし、混乱してる。自分でも論点のずれたこんな情けない事をぐるぐる考えながら、足だけが意志を持って目的地へ進んでいる状態で。目の前で住宅街の景色が開けて、ようやくほっと息をつく。

5年前、わたしが全ての切っ掛けを作った河原。相変わらずハムスターでさえ歩けそうなくらいの浅瀬が広がり、所々に雑草が群生している。当時溺れた辺りの付近も今にしてみればやっぱり浅い。わたしの平均的なこの身長で肩より下くらいですむだろう。

あのときのわたしの馬鹿な行動が全部原因かと思うと、どうしようもないくらいに罪悪感と嫌悪感が全身を苛む。タイムマシンがあれば昔のわたしを引っ叩いても川になんか行かせないのに。感傷が募ってどうしようもない。

もし。もしもあのとき川に行きたいなんて言わなければ。大人し

く稜介の言う事を聞いていれば。未来は変わったの？

背後から足音が聞こえてきたのはそのときで、わたしは咄嗟に岸辺へ座り込んだ。

「小夜子」

長い付き合いは靴音でも人物を判断出来るようになる。

とうとうわたしに最後の審判を下す彼がやってきたと思うと、とても顔が上げられない。裁かれる罪人の絶望と懺悔の念が脳裏を掠めて、体育座りで両腕の上に頭を伏せた。つい日焼け止めを塗り忘れた首筋を、日光が舐めるに降り注ぐ。汗が体中を巡って制服と素肌を貼り付けるのが気持ち悪い。

「……何でこの場所がわかったの？」

背後にいる稜介が足をとめ、こちらへ近づいてくるのが気配でわかった。

「昔からそう。稜介はわたしがかくれんぼでどんなに難しい場所に隠れても絶対に見つけてた。迷子になったときも迎えは稜介。どうしてわかるの」

「小夜子、話があるんだ」

判決は直球に言い渡す気らしく、背中に落ちてくる声は固い。わたしの心臓もその声にあわせて大きく鼓動する。

「き、聞きたくない」

被告人として黙聴権を主張するも、声が震えてしまうのは隠しようがなかった。

「稜介の話なんて、こ、今後一切聞かない」

なんて見苦しい悪足掻き。それでも嫌だ、聞きたくない。

でもそんな虚勢は稜介の長く伸ばされた両腕であっさりと解かされる。

稜介がわたしの頭に手を差し込んで、両頬を包み込むように力を入れた。指先まで優しい手つきで肌をうつすらなぞり、けれど顔をあげさせようとする力は強い。スーパーヒーロー並の力を持つ宇宙人相手に平凡人間の抵抗など笑止千万、わたしの顔はあっさりと持ち上げられた。

「聞いて」

眼前5センチもないところに稜介の顔がある。腹の立つくらい整った甘い顔に、がっちりと掌に掴まれた両頬の熱さが最後の反抗を許さなかった。瞳からぼたぼたと涙が零れて、彼の手をつたっていく。

ああ、もう駄目だ、限界なんだ。

「わたし……わたし稜介が宇宙人だって構わない」

一度堰を切った流れは止められない。ついにしてしまった秘密の暴露で、確実にわたし達の何かが変わる。

「だけどそのせいで離れていかれるのは嫌なの。宇宙人が人間に混じって生活するのって何かいけない事なの？ 何にも悪さなんてしてないじゃない、昔からわたしを助けてくれたじゃない。正体なんてきくと周りの人は気がつかないし、もしばれてNASAとか偉い

科学者達に連行されそうになったらわたしが絶対守るよ。だからずっと傍にいて、稜介がいなくなったら寂しいよ」

そう、寂しい。

わたしは稜介がいないと寂しいのだ。

「熱烈な愛の告白だね」

口元をにつこりと形作って、彼は満面の笑顔を見せる。お互いの息遣いでさえわかるこの距離で、学校の女の子達が見たらまた条約が厳しくランクアップされそうなのこの微笑み。それに対して泣いて平凡以下になったひどい顔面を晒すわたし。当然宇宙人の天然タラシ成分をスルー出来るような余裕はなかった。

「こんなときに冗談言うなんて怒るよ！」

ひどい泣き顔を彼から引き剥がしたいのに、稜介は決して頬を離そうとしない。それどころか、制服のポケットからハンカチを取り出して人の涙を拭き始める始末。

「僕はいつだって本気だよ。だからありがとう小夜子、僕をそんなふうに思ってくれて」

でもはやく泣きやんでねと、わたしの目じりを親指で拭う。鼻をかすめたハンカチから我が家の洗濯物の匂いがして、それがやけに胸にきた。逆効果だよ、それ。

「けど、ちょっと勘違いしてるかな。今度こそ聞いてね」

わたしを涙で朦朧とさせておいて、宇宙人は遂に判決の鉄槌を振

りおろす。

「残念ながら僕は人間。そして正真正銘の宇宙人は小夜子……君の方なんだよ」

第10話

『被告人、藤倉小夜子。そなたは自らが宇宙人でありながら人間と詐称して生活、及び周囲の人間を欺いて生きてきた。これによって被った被害は大きく、以下次の証人の発言を許す』

『ひどいわ、小夜子……今までずっと親友だと思っていたのに、宇宙人だなんて。どうして何も言ってくれなかったの』

『宇宙人って何だよ。俺、藤倉のこと……』

『練習熱心だし、結構期待の後輩だったんだけど。残念だわ』

『藤倉先輩ってひどいんですね。周りのみんなを騙して喜んでいましたか』

『また、本裁判官の幼馴染として十数年来偽り続けた罪は最も重い。大切な友人として築き上げてきた時間は全てが嘘偽り。以上の事から言い渡す判決は――』

遙、上原君、綾乃ちゃん、片桐部長、それに綾介。

脳内で見知った顔が実にくだらない裁判を繰り広げる。頭の中で架空法廷に1人ポカンと立たされていたわたしは、現実でもおそろく相当間拔けな顔をしているはずだ。

「……何言ってるの？」

あの綾介がこんな荒唐無稽な事を口走る日がこようとは、悲劇に

酔っていたような涙も冷めるといふもの。わたしが怪訝な表情で見上げてみると、稜介は頬を掴んでいた腕を離した。そしてそのまま川岸のすぐ近くにあった大木を指差す。

何の言葉もなくとも、彼があそこに移動しようと思っていることはすぐにわかった。あの木陰なら2人分の日差しを防げるスペースがあるし、何より位置的に道路から見える岸边よりかは人目に付きにくい死角にあつたからだ。こちらは無言のまま歩きだした稜介の後姿を追う。

引つ切り無しに泣いていたセミが、接近する外敵に気がついて名残惜しそうに声を顰めた。いくらか暑さを軽減できる大木の根元に2人で腰を下ろすと、視線の下がった川がよく見える。まるであの頃の目線みたいだ。

誰もいない河原。水のせせらぎだけがのどかに聞こえ、昼下がりの光景は平和そのものの。

稜介が口を開いたのは、わたしが手持無沙汰に足元の雑草に手を伸ばしたときだった。

「正確に言えば藤倉一家こそ、って表現になるけど」

ここらではよく見かける、葉の細長い草——名前なんて知らないけれど、それに触れようとしていたわたしの指先が止まる。

稜介の声はやっぱり少し固かった。

「僕が3歳になるかならないかの頃、君達はこの地球へやってきた。イーグル星雲M16から旅行としてこの辺境の惑星にやってきた君達一家は、シンプトラブルで地球へ不時着。それがどこか人気のない山の中ならまた違ったんだろうけど、生憎墜落現場は僕の家だった」

すっかり枯れた涙の跡が頬を引きつらせて痛い。稜介はこちらを

見もせず、片手を川へ伸ばしてハンカチを水に浸した。

「当然すぐに故障個所を直して飛び立とうとしたんだけど、この星では文明や物質の材質が違いすぎて、宇宙船を修理する事は絶望的だった。そこで一さん……小夜子のお父さんは決断した、このまま地球で暮らすということを」

冷たい感触が目元を覆う。彼が濡らしたハンカチを受け取って肌に押し当てると、そこからじんわりと心地よさが広がってくる。

エイプリルフルはもう終わったし、そもそも嘘の公認日どころか普段でさえわたしを騙したりしない稜介なのに、なんだってこんな手の込んだ冗談を言っただろう。

「ねえ稜介、本当に何の冗談なの？ わたしが宇宙人のわけがないでしょう？ 見てよこのれっきとした地球人の姿。嫌んなっちゃうくらい平凡な容姿に頭脳。どこから見たら地球外生命体に見えるっていうのよ」

「君達種族最大の特徴は、外見からでは見分けられないくらい地球人類に酷似しているって事だ。身体の構造は人と同じで血も流れているし、身体的能力は全くの同レベル。決心さえしてしまえば人間社会に溶け込む事なんて容易かったんだよ」

相変わらず淡々とした口調で告げる彼に、わたしは溜息を吐いた。

「何て都合のいい設定なのよ……それじゃわたしが宇宙人だなんて証拠にならないじゃない。そもそもお父さんもお母さんも、それに健太郎まで宇宙人だなんて。みんなわたしに事実を隠していたっていうの？」

不意にこないだのSFアニメが思い浮かんできて、わたしは首を

捻る。まさか稜介も弟のように好きで影響されちゃったのかもしれない。

「そう、君の家族はずっと全てを隠してきた。でももう秘密を守るのも限界に近い。やっぱり人類にはない能力が備わっているからだ。ねえ小夜子、これが何だかわかる？」

一体どこに隠していたのか、稜介の腕には見覚えのあるぬいぐるみが握られていた。

「クマ吉？」

何でそんなものを稜介が持っているの？ 疑問に思うよりはやく、彼の腕が無造作に半円を描く。

「悪いけどこれ、捨てさせてもらっね」

「は？ ってちよっとっ！」

やめてやめてっ！！

まるでボール投げのように綺麗に宙を飛んだクマ吉。その落下地点が川の中心であると理解したとき、わたしは思わず立ち上がる。重力と競争しても敵いようがないけれど、それでも足が地を蹴って前方に目一杯腕が伸ばされた。目測では明らかに距離も時間も足りない。だからクマ吉がびしょ濡れになるまではコンマ数秒——も、要らなかった。何秒、何分経ってもクマ吉が川へダイブする事はなかったのだ。

「え……？」

例えばクマ吉が鳥だったら。その場でパタパタとホバリングでも披露してくれていたのなら問題ない。けれどこれはあくまでクマで、何より只のぬいぐるみだった。だから間違っても川面から数センチ、空中でピタリと直立不動で停止しているのはおかしい。

「……どうして」

動くべきか、動かないべきか。散々思考が迷走したのちに、わたしは一応靴を脱ぎ川に突っ込んでクマ吉をキャッチした。指に触れた途端、クマ吉は確かな重量を感じさせる。念のため今度は稜介めがけて投げてみたところ、やや不格好な放物線を描いてきちんと彼の手の中へ着地した。

足裏をさらさらと水が流れていく。じゃりじゃりと小石が当たっていたけれど、痛みは感じなかった。ただただその場に立ち尽くし、こちらを見つめる稜介と視線が絡み合う。

「僕も詳しくは知らないけれど、君達には自らや自分の属するものに対しての防衛能力が備わっているんだ。つまり自分に近づく危険や好ましくない事柄なんかを無意識にある能力をつかって避けている。小夜子の力はずっと眠っていたんだけど、最近になってようやく覚醒したらしい」

稜介が何を話しているのかわからない。もしかしてこれこそ夢？ だけど辻褄が合う事がある。熱した油が水に変わる。落とした包丁が空中で停止する。わたしの危険に対して、わたしだけの目撃として起こった不可思議な出来事。

わたしがやった？ わたしの力？ わたしが——宇宙人。

いやいやいや、信じるわけないじゃん、これ手品でしょ？

……うん。そう、だよな？ なのに稜介は何でそんな真剣な顔をしているの？

人生をひっくり返すような衝撃的な出来事なのに、意外にも頭は冴えていて気持ちもすぐく落ち着いている。まじまじと慣れ親しんだ自分の掌を見つめ、グーやパーを試みたり、指を折ってみたり。その場で足をばちやばちと水しぶきをあげてみたりもした。水が撥ねた肌は冷たく、頬を抓れば痛く、髪に触れば柔らかい。暑さで喉は渴きを訴えるし、ずっと目を見開いていたから瞬きが早くなる。そして水面に映った自分を見下ろせば、やっぱり平凡なわたしが驚いたような顔をしてそこにいた。

自分が宇宙人だって言われても、ショックより微妙な戸惑いの方が大きい。自分の人生１７年を覆す重大な発言のはずんだけど、だってどうみても人間にしか見えないよ、これ。

「嘘……でしょ」

そもそも何なの、その『力』って。

けれど蒸し暑い教室に、風邪で火照った身体。そして求めたのは、涼しい風。それを得るのに邪魔なのは――窓ガラス。

まさか。だけど、こんな事で？

「じゃあ今日窓ガラスが割れたのは、もしかしてわたしが……」

不意に走った嫌な予感に、全身の血がゾツとする。あの騒ぎを起こしたのはわたし？　たくさんの友人達を危険に晒して迷惑をかけたのはわたしの？

「いや、あれは……ううん、僕にはわからない」

稜介は首を振った。

「結果的に誰も怪我をしなかったし、君が気にする事じゃないよ。最近具合が悪かった、特に頭痛がひどいのは度々その力を使った反動だと思う。それに能力に関しては小夜子が自覚しているのならそこまで問題もなくて……けどその辺りは家族に聞くといいよ、人間の僕じゃ詳しくはわからないからね」

「お父さんも、お母さんも、健太郎も……こんな力があるの？」

彼は頷いて、手にしていたクマ吉をわたしに見せる。

「じゃあ家族全員が宇宙人って、本当なのね」

普通なわたしの中流家庭を彩っていてくれたはず家族。マイペースで強引だけど優しいお母さん、明るくて穏やかなお父さん、生意気で喧嘩ばかりでも可愛い弟。

みんなみんな大好きだったのに。

「どうしてわたしに黙っていたの……綾介も知っていたんでしょ」

こんな大切な事、どうしてわたしだけに秘密にしていたの。

乾いたはずの瞳がまた潤みだして、視界に映る綾介の姿が滲む。

家族だけじゃない、綾介も知っていたんだ。それもずっと前から。

失望というか、落胆というか、裏切りというか。お腹の底からどんより重くなるような感情が這い上がってきて、涙を止める事は出来なかった。

人間じゃないって何なの。どうしてわたしだけ教えてくれなかったの？

「それはあたしが答えてあげるわよ！」

稜介が何か答えるよりも早く、わたし達の背後から威勢の良い声が飛び込んできた。

一気に場の空気を一変させるこの声は――

「お母さん！」

驚いて振り向いた先でスーツ姿のまま仁王立ちしているお母さん。そしてその更に後には。

「やあ小夜子」

「よっ、姉ちゃん。俺達もいるぜ」

何故か普段着姿のお父さんと健太郎。失意の内に泣く娘の前に、当然の本人達がやってきたのだった。

第11話

涙を伴った感動の再会、ではない。けれどとりあえず家族一同役者が揃ったのは間違いなかった。稜介は何て言葉を発せればよいのかわからないわたしを岸まで引つ張り、再び木の根元へ座らせた。お母さんはそれを見て、盛大に溜息をついていた。

「全くごめんなさいね稜介君。うちの馬鹿娘が面倒かけちゃって」「ちよつと、お母さん！」

この重大な局面で何て失礼な事を言うのだ。

「あら。学校は早々に下校になったはずなのに、帰ってこなかったあんたを迎えに行ってくれたのは誰だと思ってんの」

「まあまあマヤ」

いつだって場を収集するのは苦労性なお父さんと決まっている。母娘喧嘩を取り成して、お母さんの肩を叩く。

「無事だったんだから良いだろう、それよりきちんと話さない」と

お父さんは健太郎をわたしの隣に座るように目で促して、お母さんとその間に自分の体を挟み込ませた。長年仲裁係をやっていると割り込み方も自然で見事って、気にするのはそこじゃない。

「ま、いいけど。じゃあもうさっくり本題からいくわよ？」

お母さんは組んでいた腕を解いて、びしりとわたしを指差した。

「いい小夜子。わたし達の正体は聞いたと思うけど、確かに人類じゃないの。地球から7000光年程離れたイーグル星雲内のある小惑星が故郷の異星人。まーはやい話がエイリアン。もう帰る事は出来ないから、詳しく知らなくても問題ないわね」

イーグル星雲。さっきから思っていたけれど聞いた事もない名前だ。7000光年っていうのは、つまり光が7000年かけて辿りつく距離って事だね。えっと、ちょっと壮大過ぎて頭が働かないというか。有名な銀河の名前3つ程度しか知らないわたしには、ここが宇宙の何処に位置しているのかさっぱりわからない。

「僕とマヤは当時既に結婚していて、小夜子も健太郎も生まれていたよ。そして現地で流行っていた太陽系家族旅行を計画していた。ああ、向こうの文化レベルは地球より遥に高い水準ではあったよ。おかげでこれだけ距離のある星間を渡ってこれたんだから」

2人の口から遂に宇宙人説を肯定する発言が出て、心の奥底でほのかに期待していたドッキリカメラ説はもろくも崩れ去ってしまった。お父さんもお母さんも宇宙人。どこからどう見ても人間にしか見えないけれど。

「でもエンストだろ？」

ついでに弟も宇宙人であるらしく、その辺の小石を川へ投げながら口を挟む。

「そう、宇宙船のエンジントラブルでたまたま通りかかった地球に不時着。あとは稜介君の言う通り、宇宙船がとて修理出来なくてね。幸いにして家族揃っているし、このまま地球人として生きていくって事になったんだ」

奥様の井戸端会議的な雰囲気ですらりと自分達の地球活動第一歩を語られて、わたしは稜介に座らせてもらった事を感謝した。だってもう頭がくらくらして倒れそうなもの。

いいやでも、ここまできたら肝心な事を全て聞いておかなくちゃ。

「どうしてわたしはその事実を知らなかったの」

そう、まず重要なのはここ。わたしは何で自分の正体を知らなかったのか。

「何せ2、3歳の頃の出来事だし、記憶が薄いのも無理ないでしょう。地球で暮らすのに混乱しないためにも、自分の正体がわかっていないならそれでよかったのよ。その方が言葉だって覚えるのに不自由しないしさ。おまけにあんた、生まれたときから例の力が全く発現しなかったから」

お母さんが煙草に火をつけて吸いだした。ええい、ヘビースモーカーめ。

「じゃあ健太郎は？」

「健太郎だって小さい頃は何もわかってなかったわよ。でもええつと、中学校に上がる前くらいだったか、急に私達に言ってきたのよね。俺人間じゃないの？ って」

何それ。健太郎は自力で自分の正体に気がついたって事？

「べ、別に俺の事はいいだろ……薄々感じてたんだよ、ごくたまに変な事が起こるから」

わたしが疑惑の眼差しを向けると、何故か弟は口ごもって指先から小石を落としてしまった。水面にいくらかの波紋が広がる。

「そのわけのわからない力って、結局何なの？」

「ああこの力はね、多分無意識下で働く一種の超能力みたいなものだよ。僕達の星には多くの人が備わっていて、自分達や自分の属するものの危険に対して回避する現象を引き起こす。でも願えば毎回発動するわけじゃなくて、本当に何かの拍子に発現するんだ。まあ、ほとんど偶然として捉えられるね。悪い力じゃないんだけど、コントロールは不可能なのは玉に瑕かな」

お父さんの解説ではますます理解が難しい。わたしの情報処理能力が低下しているのかと悩んでいたら、意外にも再び健太郎が口を開いた。

「つまり奇跡を呼ぶ力なんだよ」

「奇跡？」

やたらと美しい言葉。イメージががらりと変わる。

「普通の人間よりほんの少しラッキー、程度の力なんだ。自分で制御も出来ないし、何時発現するかもわからない。だから気にする事はないけどちょっとばかり頭痛がするから、力が発動したら自覚出来る」

「そうそう、水溜まりの中で転んでもお氣に入りのワンピースが汚れなかったりとか。そのくらいのレベルなんだから」

3人揃って大した事ない、気にしないというスタンスを見せつけられて、肩に込められていた力が抜けていく。

それって結局は曖昧で御都合主義全開な力じゃない？しかも奇跡

という割にはわたし最近ちよくちよくそれらしき現象が起こりまくりなんだけど。

「最近になってわたしがその力とやらを起こしているのはどういう事なの？　今までこんなおかしな事わたし経験したことないよ」

「それはわからないな。こっちだって急に発現し出して驚いたんだから」

「力の事は実害もないからおいおい考えればいいでしょ。とにかく地球で怪しまれず生きていくために、一応私達は自らの正体を隠す事にしたわ。でも例外は稜介君とそのご両親ね。だって船は彼の家の裏庭に墜落したのよ、もうばっちり目撃されちゃって」

お母さんの言葉に隣の稜介の顔をまじまじと見てしまう。庭に落ちてきた怪しいわたし達を、稜介の家は受け入れてくれたという事？

「ちなみに今の家も、佐川家の持ち家だったのよ。当時住む人がいないってんでそのまま住まわせてくれたし、お父様はお役所勤めでしたでしょ。戸籍まで用意してくれちゃって」

ちよつとちよつと、どんだけ佐川家にお世話になってるのよ、うちって。

ああ、亡くなった稜介のおじさまにおばさま、こんな藤倉家で本当にごめんなさい。

「まあそんなこんなで生活は始まったわ。わたしは健太郎の世話、一さんは地球の生活様式に慣れるのに一生懸命だったから小夜子の事にかまっている暇もなくて、つい稜介君に任せきりにしてたけど」

段々お母さんの子育て放棄論になってきた気がする。そりゃちっ

ちやい頃は稜介と遊んでいた記憶しかないのも頷けるってものね。

「早くに稜介君の御両親が亡くなられたのは残念だったけれど…本当に順調だったよ、地球での暮らしは」

昔を懐かしむようにお父さんが目を細めた。けれど健太郎は腕を組んで鼻を鳴らす。

「なのに姉ちゃんが兄ちゃんをこの河原まで連れだしたりするから「は？」

突如思いがけない出来事を持ち出されて、一瞬心臓が飛び跳ねる。

「小夜子、あの時何があったか覚えてる？」

「ええ？あれは確か……」

稜介が宇宙人だと思った一因。不思議な力でわたしを川底から引き揚げてくれたのは彼だ。でもそんな事を家族の前で口走っているものなのか、不安でその先を紡げない。

なのに当の本人は、隣でふわりと笑ってわたしを見ている。

「小夜子は忘れてるだろうけど、あのとき溺れたのは僕なんだよ」

「えええ！？」

はあ？

「嘘でしょ、だってわたしは稜介に助けられたんだよ！」

あの金色に輝く圧倒的な力。今でもはっきり覚えている、瞳だけが赤く光って、私の身体を抱きしめてくれた温かい腕。

あれは稜介だ。絶対に稜介だよ。

「そこが大きな間違いなのよね。あんたは彼の身に危険が迫っていると理解した途端……ここからは直接現場にいたわけじゃないから推測だけど、多分初めて能力を使っちゃったのよ」

わたしが力を使った？

「そんな覚えないうって」

「でもそうでなきゃ腑に落ちないのよ。あの日、あんたはびしょ濡れの稜介君を抱えて家まで帰ってきたの。稜介君が川で溺れて、助けようと思ったら身体が光って水が割れた。あんた確かにそう言ったよ」

なにそれ、記憶と違う。そもそも溺れたのはわたしでしょう？

「待つて、待つてよ！ わたしそんな事してない！」

知らないよ、そんなの覚えていないし！

「あの後熱を出して随分寝込んでいたから、記憶があやふやになったんだよ。あれ以降小夜子が力を発現させる事なんてなかったから、この件は伏せておいたの。だからてつきり安心していたのに」

ふうと溜息をつくお母さんを尻目に、わたしは稜介のワイシャツの襟首を掴んだ。必死になって彼を引きよせて、小声で囁く。

「稜介、その、違うよね？ わたし……稜介に助けて貰ったんだよ
ね？」

「いいや、僕が小夜子に助けられたんだよ。君の身体が金色に光っ

て、目が赤かったのを覚えてる。冷え切った僕の身体をぎゅうつと抱きしめてくれたでしょ」

その言葉に、頭の中で100トンハンマーを振るったどでかい衝撃がわたしを襲った。

いくつかの記憶の中のキーワード。それをまさか稜介の口から聞くなんて。

じゃあわたしは……あろうことが稜介を自分の姿に重ねていたってこと？ これまでのわたしの葛藤はどこへ消えろっていうの？
っていうか今度こそ本当に、わたし人間じゃなかったのね！？

……けど何もかもが記憶と違うなんて事あるの？ わたしが真実を忘れて、勝手に新しい記憶を作っているの？

まだどこかに引っかけがあるような。わたし、何かを見落としていない？

「何なのよ、一体……」

けれどももう色んな事があり過ぎて、限界かもしれない。頭を回転させるのが辛くなって、全身の力が一気に抜けた。

自分が宇宙人だったなんて。人間じゃなかったなんて。

今まで信じて疑わなかった根底があっさりとひっくり返されて、隠されていた真実はあまりにショックが大きくて。なのはどうしてみんなこんな平然としているのか。

ああ、でも。

「稜介、ごめんね」

「何が？」

ぎゅっと掌にあった襟首をそっと放すと、物凄く皺が出来ていた。

わたし、すごく強い力で掴んでいたんだ。

「わたしずっと綾介こそ宇宙人だと思ってたの。頭も良くて、運動も出来て、完全無欠なスーパーマンで、不思議な力を持っている。でも違ったのね、ホッとした」

むしろ自分が宇宙人でしたっていう展開で、はは、笑えない。

「ねえ小夜子、それでさっきの返事だけど
「うん？」

認めてしまえば何もかもすっきりするのだろうか。すっかり脱力して綾介の肩にもたれかかっていると、彼が首を捻ってわたしを見下ろしている。

全く呆れるくらい整ったこの顔も、嫉妬すらお辞儀しそうな才能も、いつもわたしに向けてくれる優しさも、みんなみんな宇宙人ではなかった。つまり綾介はわたしが逆立ちで地球一周したって敵わないくらい非常に優秀な人類だったのだ。

そう思ったら、笑ってられないこの状況もなんだかどうでもよくなった。わたしの大切な幼馴染は人間だ。

「僕だって小夜子は何者でも構わないよ。地球人だろうが宇宙人だろうが、それ以外の何者だろうが。そもそも君達の事は僕以外誰にもばれていないし、これからも秘密が漏れる事はない。マスコミに取り上げられたり、何処ぞの研究施設に人体実験されそうになっても僕が必ず守ってあげる。だから――」

見つめる瞳にわたしの顔が映っている。距離の近さに焦って身を引こうとしたわたしの腰を、彼の腕がぐっと引き寄せるように力を込めた。

「ずっとそばにいるよ」

耳元で口づけるように囁かれた言葉とともに、熱い吐息がうなじに触れた。瞬間心臓があり得ないくらい早鐘を打って、顔が大熱をだしたときのように真っ赤になる。天然フェロモンは宇宙人ではなく、稜介固有の必殺技だったのだ。

「ち、近いつて……」

「あらあら、あたし達お邪魔だったかしらあ」

振り向けばお母さんがにんまりと笑みを浮かべて煙草を口にしていた。その後ろでお父さんが複雑そうな顔をしてわたしと稜介を見ている。

「こんなに早く娘を手放すときがくるとは……まあ稜介君なら小夜子を幸せにしてくれるだろうし」

「兄ちゃん、良かったな。呑気な姉だけどよろしくな」

遂には健太郎まで見当違いな台詞を口にして、3人仲良く河原を後にしようと歩きだすものだから、わたしは多いに慌てた。

「ちよちよちよ、ちよっと！ 違うつて、あれは愛の告白じゃないってば」

絶対に勘違いしている家族の後ろ姿に、わたしの叫びが虚しく響き渡る。

そもそも稜介に恋愛感情なんて持ってない。あるのは――

「そつだ部長！ 片桐部長はどうするの!？」

不意に浮かび上がった人物の顔にはつとして稜介を見やった。けれど彼は一瞬眉を顰めて微笑む。

「ああ、片桐さん？ きちんとお断りしてるよ」

やっぱりあれは告白だったの？ そんな疑問を思うまでもなく、腰に回された腕にますます力が入った。

「もしかして妬きもち？ あんなに泣く程僕が好きなんでしょう？ 嬉しいな」

「違うつて！ いや、この気持ちはね、つまり親愛というか、家族愛というか……上手く言えないけど、恋愛とは少し違うような……」

稜介の事は大切だし、もちろん好きだ。でもその好きって、やっぱり恋じゃないと思う。だってファンクラブの女の子達のようにあんなに甘く可愛らしい想いなんて今更抱けないもの。

「ここまできて否定するの？」

往生際が悪いとばかりに、稜介がわたしを半眼で睨む。じと目でも魅力的な顔なのが却って憎たらしい。それでもわたしが必死に首を振っていると、稜介は仕方ないな、と呟いた。

「小夜子は宇宙人だからさ」

こつんと額が合わさって、彼の指先が頬に触れる。その部分だけがひたすらに熱い。

「いくら外見が人間に似通っていても、心のつくりが違っただよ。」

だからその気持ちに上手くはまる表現がない。恋愛感情つてものがよくわかっていないんだ。だからそれぞれ心の真ん中から気持ちの距離を確認していけばいい。そうしたら一番近くに残るものがあるでしょ？僕は小夜子の心のどこにいるの？」

いきなり概念的な事を言い出すものだから驚いたけど、ちよつと冷静になって考えてみる。

稜介が宇宙人だったら、わたしのそばからいなくなったら嫌だと喚いていた今までの自分。物心ついた頃からいつも一緒に、半分家族のように感じていた一番近い他人。彼がいなくなるのは悲しくて、辛くて、寂しい。いつもわたしの隣にいて、それが当然だと思ってた。気持ちの距離で表すならば、心の真ん中から近いというよりは重なっているくらい？

でもいつか稜介に好きな人が出来て、その人と付き合つて結婚したら。彼が宇宙人じゃなくなつたつて、そう遠くない未来にわたしから離れていく未来は十分あり得るんだ。わたしから離れちゃう、何だかそれつてちよつと、あれ、泣きそうかも。

家族のように、幼馴染のように、友人のように稜介が大切。じゃあ異性としては？

「……好き？」

「疑問形は駄目」

王子様のような顔がにっこりと笑みを浮かべるものだから、本物の宇宙人の心はキャパシティを超えそうだ。というよりも多分限界、色んな感情が溢れかえっている。やっぱり甘くはないんだけど、その代わりに心臓の鼓動が一世一代のフルスロットル。

ああもう認めます、認めますよ。でもだからつて最後まではずきり言葉にさせようとは、なかなか意地悪じゃない？

「……す、きかも」

「僕は大好き」

弱々しい反撃はストレートで吹き飛んだ。

最後の抵抗をあつさりと破壊力ある一言で返されて、わたしは大人しく全面降伏の白旗を掲げる事に決めた。彼の耳元で彼と同じ言葉を囁いて、そのまま長い腕に身を絡ませる。この暑いのに何をしているのかって、だって今どうしてもこうしたい。

心のメモ帳、全ページに渡り注意書き。どうも、佐川稜介の笑顔が心臓の天敵みたい。

第12話

衝撃と驚愕と怒涛の大波が押し寄せた夜が明けても、日常は続く。わたしが宇宙人だという事実は今のところ家族と稜介しか知らないし、今後も誰にも教えないつもり。というか家族会議の末そのような結論を厳命されたのだ。お父さんもお母さんも、自分達の正体は決して誰にも明かさない事を決めているから。

健太郎は自分を宇宙人だとは知っていても普段はまったく意識していないらしく、わたしがあれこれ色々と考えているのを鼻で笑っていた。そりや自分で気がつくのところで突如発覚するのでは受け止めの度合いが違うと思うのだけど、結局のところ、確かにせせら笑うくらいで流せばそれでいい事なのかもしれない。なにせわたしは、悲しいくらい普通の人間に酷似しているのだから。

「それじゃ行こうか」

左足の靴紐から結ぶのはわたしと遥の昔からのジンクス。ベンチでシューズを履き終えたわたしに、眼鏡をコンタクトに変えた遥が声をかけた。

「うん」

特別な日はいつだってポニーテールを白いリボンで結うのもわたしだけの願掛け。長い黒髪を頭上できっちり縛ると、いつも以上に気合が入る。

不安定で不確定な力の事はネックだけど、お母さんはもう当分発現はないだろうと言っていた。両親の経験曰く、元々数年に一度、それこそ、ん？と思う程度の確率でしかないものらしい。だからここ最近のわたしの頻発ぶりをみるに、もう一生無くてもおかしくは

ないと。

本当に、どうして急にこんな力は成長してしまったのか。それは謎だけど、こんな事態にならなければお父さんもお母さんもわたしに真実を言うつもりはなかったらしく、それはそれでどうだろうと頭を抱えてしまう。

「優勝したら県大か、ダブルス初記録を打ち立てるよ」

張り切ってラケットを握る遙がコートへ進み、審判が試合開始のホイッスルを鳴らす。わたしも後衛として彼女の後ろで構えをとった。

地方大会で特に有名な強豪校もいなければ、まず観客なんて部内の先輩と後輩しかないもの。客席とコートを仕切るフェンス越しは聞きなれた声が飛び交っている。

「片瀬さん、頑張ってるー！」

「藤倉、応援してるよー！！」

「遙ーっ、小夜子ーっ、勝てよー！」

言われなくたって、勝つつもりだよ。

青く澄んだ空に、降り注ぐ太陽の光。ラケットに白球を打つ感触を確かめて、何となく、今年の夏はまだまだ暑くなって、それも悪くないような気もした。

陸上部の朝練があるので、稜介の朝はわたしより早い。近くのコンビニで買っておいたパンで手早く御飯を済ませ家を出る、それが

これまでの彼のお決まりのパターン。早朝の慌ただしさの欠片も感じられない整った後姿は嫌味に近いと思っていた。何でそんな事を知っているかって、それを寝起きのまま自室の窓から見送っておくのこそ、今までのわたしの日課だったからだ。

けどその習慣を大幅に変更するはめになったのは最近の事。わたしは藤倉家の中でも一番早くに起きて、昨夜予約して炊きあがったご飯でおにぎりを作る。彼の好物である鮭やおかかを沢山詰めて大きめの俵飯を2つ程、付け合わせに玉子焼きとウインナーを添えたらランチヨンマツトに包んで完成。

バレバレのような気もするけど、家族に詮索されるのは遠慮したい。だから自分と健太郎にも同じものを用意してみたりして、今日もわたしは隠蔽工作に勤しんでいる。昨日はお父さんもお母さんもニヤニヤしながら私達も欲しいとのたまっていたから、偽装の手間が余計にかかるのは致し方ない。まったく、お年頃の娘への配慮してものを知らないのかしら。

わたしは朝が得意じゃないし、本当は料理もそこまで好きってわけじゃない。今でこそそれなりの腕にはなっているけど、元々はお母さんがもつとおいしいご飯を作ってくれば自分から包丁を持つ事はなかったと思う。だけど何でかな、あれから朝も目覚めが良くなったし、暇があれば新しいレパートリーを増やそうとレシピを考えている事が多い。疲労回復とかスタミナ増強とか、ピンポイント目的でネットを検索したりもする。その理由なんて自分でも嫌ってくらいいわかってはいるけど、これは絶対原因となる張本人には教えてあげないんだから。

まだぬくもりの残るおにぎりを片手に玄関へ向かうと、開いた扉の先に彼がいた。

「おはよう」

見慣れた部活のジャージを纏った稜介は、わたしがドアを開くといつもタイミングよくそこにいる。

「うん、これ」

さりげなさを装って、包みを渡す。決してこれを作るのにどれだけ気持ちを込めているのかなんて、匂わせないように。

「頑張って」

束の間、というより多分1分もないくらいの邂逅。この後学校に行けば嫌でも同じクラスだし、そもそも家だって隣で今日もどうせうちで夕飯を食べていくだろうに。何だってわたしはこの時間のために救いような無駄な努力をしちゃうんだろう。

「ありがと、学校でね」

お互いに作って欲しいとも作るとも言っていない。でもやり取りは自然で、稜介は笑っている。きっとこれは立場が逆になっていたとしても、わたしは同じように笑っていると思う。だから多分、わたし達の距離ってこんな感じ。この人といるのが心地良い。

やたら心臓をどきどきさせる彼の笑顔を見送って、わたしは再び家の中へ戻っていった。

色々問題はあるけれど。

たとえ宇宙人でも大切な人が傍にいて、くだらない事で笑えて、そんな毎日が愛おしいから。

さて、今日も頑張ろう。そう思える事に感謝したい。

閑話 Fからのメール

From

Sub . アイス食べたい

今日家庭科の授業でオムレツを作ったの。結構上手く出来て、味は上々。でも隣のクラスが選択していたカップケーキの方が私は良かったな。だってお菓子の方が人にあげやすいし、先輩にプレゼントしている友達もたくさんいたから。あ、先輩っていつもの人の事ね。けどみんな受け取ってはくれなかったみたいだから、やっぱり恋人がいるって噂は本当なのかも。

あと悪いけど例の機械の修理は難航中。夏休みに入る前までにはって思ってたけど、この調子じゃ無理だわ。ごめんね、でも高校生って忙しいのよ。

じゃあこれからお風呂入ってくるから、おやすみ。

From

Sub . 部活がキツイ

何度経験しても夏って季節は慣れないわ。何もしてないのに汗がだらだら流れるし、この長い髪も正直うざったい。もう切るのかな……あ、でも二スに出会った頃はショートカットだったっけ。メル友になって早数か月、そりゃあ髪も伸びるってもんよね。

それより部活がキツイのよ、大会前だから。1年なんて中学から

の経験者しか出場させて貰えないのに、毎日毎日走り込みだけ。あーやだやだ。

おまけに明日の1限は古典の小テスト、とりあえず追試だけは免れるように祈っというてね。

From . x x x
Sub . やつてしまった

寝坊↓遅刻↓再テスト。はい3コンボ達成つと。

昨日あれから頭痛がひどくって勉強に何も手がつかなかったの。大事をとって今日はもう寝るわ。ばいばいね。

From . x x x
Sub . 風邪じゃないよ

昨夜味噌汁を作ろうと思って鍋にお湯を沸かしてたら、誤ってひっくり返っちゃって。やばいと思ったたら水でしたっていうね。ああもう、助かったには助かったけど、久しぶりの発現だったのにこれかよって感じ。

え？ 身近で同じような事でもあったの？

ふーん……そうそう、教えてあげようか。故郷ではこれ『奇跡を呼ぶ力』って言うんだよ。

F r o m . x x x
S u b . 機械の件

マザ・ビュータの修理。もうちょっとだけ待って、今かなり頑張ってるから。

何？ エスドット族の星の話が知りたいの？ 別にいいけど……
本当に99%地球と一緒によ？ 生き別れの双子かと疑うくらいの酷似レベルで、文明も生態系も歴史も、無限の宇宙空間の中でさえここまでそっくりな天体は他にないくらい。文化の水準は多少高かったけど、この星もあと数百年くらいで追いつくと思うわ。

私達、辿りついたのがこの星で本当にラッキーだったわけよ。

F r o m . x x x
S u b . ビビンジャー

ごめんつまらない。何あれ？

ところで私、失恋したみたいなんだけど。そう例の人、しかも同じ部活の先輩とくつついて。その先輩だって同郷人とかね、もうどれだけ宇宙は狭いのってくらいの遭遇率じゃない。

……実はちよつと、こうなる事をわかってたんだけどさ。乙女心としては認めたくないから困るわ。だからこの間ほんの少し彼女に意地悪しちゃったの。あーこの人間みたいな複雑な心を身をもって

体感する日がこようとはね。

おっと年下のお子様にはまだわからない話だったかな？

じゃあとりあえず二ース、慰めのメールをあと10件送って。はいスタート。

F r o m . x x x

S u b . ホームシック

なんてなつたところでどうしようもないんだけど。今夜みたいに月の綺麗な夜は正直ちよつと胸にくるものがあるかも。

宇宙船のトラブルで別の星へ住む事故って多いけど、私もそれ。今でもよく覚えてる、満月の日だったなあ。

家族が揃って不時着出来たパターンは数少ないから、私達お互いに幸運なんだけどね。私はあつちで暮らした記憶もあるからさ。この星に慣れるまでは、やっぱり帰りたいって思う事が多かったわ。

ああ湿っぽくなってきちゃったね、ごめんごめん。気を取り直して受験勉強、頑張つてね。同じ高校に通いたいでしょ？

来年の4月、待ってるからね。

閑話 Sの日記

○月2日

きょう、となりの空き家にあたらしい家ぞくがやってきた。

2かいの自分のへやからこつそのぞいていたら、かみの長い女の子がいるみたい。年もぼくと同じぐらいだし、ぜったいに仲良くなつていっしょにあそぼう。

このあたりは同じ年の友だちがいなくて、ぼくはいつもつまらなかつたんだもの。

あしたのあさ、あの子の家についてみよう。

○月3日

さつそく女の子の家にあそびにいった。お父さんとお母さん、それにちいさな弟が家ぞくなんだって。

おばさんはぼくをかんげいしてくれて、おいしいクッキーをやってくれた。ぼくはそれを彼女とわらいながら食べて、夕方になるまで家にかえらなかつた。そうしたらぼくのお父さんがやってきて、かえりがおそいとおこられた。ひどい。

でもあの子となら、なかよくなれそう。ぼくのひみつをしつても、友だちでいてくれるかな？

お母さんがだめだと言うから、ひみつをはなすことはできないけど……。

○月8日

きょうは彼女とかくれんぼをした。彼女はいつもおんなじところにかくれるから、みつけるのはかんたんだ。

それからおやつにゼリーをたべて、トランプをして、おばさんと

夕はんをつくった。はじめてつくったハンバーグは少しコゲてしまったけど、すごくおいしかったな。

○月15日

彼女といるとたのしい。まいあさ、きょうはなにをしようかとワクワクする。

こんなまいにちがずっとずっとつづけばいいのに。
ずっとずっといっしょにいたいって神さまにおいのりしたら、かなえてくれるかな？

×月7日

中学校へ入ったとたん、彼女はテニスをやりはじめた。いつものように家へ遊びに行ったら、庭にラケットが置いてある。気になって訊いてみたら、テレビで見た外国人選手のプレーが格好良くてあこがれていると言っていた。

明日、僕もラケットを買いに行こう。

×月9日

昨日念願のラケットを購入して、彼女と2人で近くのテニスコートへ行った。

僕は昔から勉強も運動も何でも人並み以上に出来るから、ルールすら知らなかったテニスだってすぐに上達した。けどこの1日で彼女から何度もセツトを奪ってしまったので、少し加減をしなくては力の調節はむずかしい。でも、秘密を守るためにはしかたない。
なにより、彼女に泣かれるのはイヤだから。

×月20日

おばさんに夕飯に誘われて、娘に彼氏が出来たら教えてくれと頼

まれた。僕はしばらく考えてから、多分まだいないよ、とだけ答えておいた。

その後、彼女の部屋で数学の宿題をやった。ちょっと気になっていたので恋人が出来たのか尋ねてみたら、気になる人はいると答えが返ってきた。

彼女の心を動かしたのは、誰なんだろう。

×月24日

2人で夏祭りへ行った。彼女の浴衣姿は初めて見たけれど、黒髪をまとめるとすごく大人っぽくなるんだ。

わたあめと焼きそばを食べて、花火を見た。人混みがすごくて、彼女がはぐれないようにそっと手をつないできた。

熱なんてないと言っていたけど、彼女の手は熱く、顔はほんのり赤かった。

×月28日

彼女といると楽しい。本当に楽しい。

こんな毎日がずっとずっと続けばいいのに。

けれど僕はもう知っている。神様に何度祈ろうが、望む未来は手にはいかない事を。

それでも僕は彼女のそばにいたい。

ああ、だけど。僕には秘密が。

月19日

高校生になるとお互い今まで以上に忙しい。

テニス部に入った彼女は、毎日練習に明け暮れて、あまり僕に構ってくれない。僕は僕で陸上部に入ってしまったから、2人の時間

はめつきり減った。

それに、学校のテニスコートは車の通行量の多い道路のすぐそばにある。前にも飛び出し事故のあった場所だから、何だか心配だ。

月24日

クラスメイトの一人が彼女を好きらしい。

友人が面白半分伝えてきたけれど、何だか気分が悪い。ちょっと精神が不安定だ。

その理由も薄々わかつているからどうしようもない。

月30日

コートの近くで道路整備の工事が始まった。毎日大きなトラックが往復されて、ますます危なくなるじゃないか。

それにしても、クラスの男が彼女に話しかけるたびにイライラする。

やめてくれ、彼女は僕の……

ああ、秘密が邪魔だ。

□月3日

彼女に秘密を打ち明けるべきなのか。ここ最近はそれしか考えられない。

けれどそれを伝えたところで、事態は何も変わらないんだ。

彼女とずっと一緒にいたい。昔から願っていたのはそれだけなのに。

□月4日

どうも日記を書く気になれない。
自分の臆病さと優柔不断さに嫌気がさしてくる。

□月5日

□月6日

□月7日

□月8日

この一週間、僕は本当に悩んだ。そして今日、決断した。
この選択が本当に正しいのかどうか、それはわからない。

それでもこれが、この選択が、僕にとっても周りにとっても最大
限の幸せに違いない。

だから僕は決して後悔しない。

もう二度と、彼女に会うことはないだろう。

けれどいつだって君が幸せに笑っている事だけを願っている。

「ご飯よ」

聞きなれたお母さんの声がして、わたしは久しぶりに読んでいた日記を閉じた。

「うん、今行く」

母お手製の肉じゃがの匂いに誘われて、自分の部屋を後にする。階段を下りてリビングへ向かうと、食卓にはお父さんと弟の姿もあった。

「2人とも、もう帰ってたの？」

特に毎日帰りの遅い父が、夕飯の時間に合うのは久々ではないだろうか。

「うん、テスト前だからさ。姉ちゃんは何してたの？」

美味しそうにご飯を頬張る弟を見て、わたしは試験週間が近づいてきていた事を思い出した。

「別に何も。机の整理してたら古いノートとか一杯出てきて。懐かしいなと思って」

「ああ、勉強する前ってやたら部屋の掃除したくなるんだよね」

それで結局肝心の学習は進まないんだ、とお父さんがお酒を飲みながら笑いだした。

そう、教科書を読むつもりで机に向かったのに、ふと引き出しに

伸びてしまったこの手がいけないのだ。

あの日を最後に、この日記には何も書かれていない。

もう彼は、どこにもいない。

第13話 稜介編

朝目覚めると、僕は必ず自分のベッドの横にあるそれを見つめる。無機質な灰色のボディをしたそれは、相変わらず昨日までと同じ表示のままでも何も変わらない。

今日も変化なし。そしてそれに僕は失望し——心の奥底では安堵している。

「そんなに気にする事はないと思うけど」

大好物のキャラメル・ポップコーンを目の前にしながらも、小夜子は眉間に皺を寄せて渋い顔をしている。手元に置かれたオレンジジュースのカップの水滴が垂れて、彼女の白いワンピースに染みを作った。

「無理……」

片手で顔を覆っている小夜子から飲みかけのカップを失敬し、一口ばかり喉へ流し込む。100%独特の濃い甘酸っぱさが口に残ったので、からんと音を立てる氷も飲み干した。

「あれは小夜子のせいじゃないんだから。先生も窓の施工業者側が工事不備を認めたって言うてたじゃないか」

「それはそうだけど、もしかしたらって罪悪感があるじゃない」

つい最近自らが宇宙人だという事実を知った彼女は、何かにつけて例の事件を気にしている。そのまま本日何度目かの溜息を吐きながら耳元で流れた髪を指先で正し、ようやくカップを口に運んだ。

「みんなに申し訳ないじゃない、かといって真実も言えないから謝罪も出来ないし」

「だから謝る必要もないでしょ？」

小夜子は普段髪を束ねているが、休日は大抵ロングのまま背中に流している。個人的には彼女はこちらの方がよく似合うと思うけれど、いつものポニーテールもつい手に絡めたくなるので捨てがたい。

「カーテンとか、どうかな」

そつと伸ばしかけた手が、その言葉で動きを止める。

「何が？」

「ガラスが付着したり所々切れ切れになって、カーテンも変えなきゃって言ってたの。あれをわたしが用意しようと思って」

名案を思い付いたとばかりに小夜子の目がきらきらと輝いた。

「一生徒から理由もなくカーテンの貢献なんて、学校側も受け取らないかもよ？」

「生地だけ買って、家庭科室を借りて作るの。ほら、卒業記念……じゃないかった、かなり気が早いけど3年生への進級記念って事で」

白い頬が興奮で薄く色づいて、自然と笑みが浮かんでいる。彼女の笑顔は子供の頃からちつとも変わらない。無邪気で自然で、ふわ

りと優しい。

不意に幼い彼女の笑顔が脳裏を掠めて、今の小夜子と重なった。何かとても眩しいものを見たような気がして、僕は目を細める。

「いいんじゃない。そしたらこの後は生地を見に行こうか」

ついでに言いだしたら聞かない頑固な一面も知っているので、僕は彼女が一際喜びそうな提案を試してみる。案の定大きな目を見開いて小夜子は身を乗り出してきた。

「いいの？」

「勿論。でも今はそれより映画が始まるよ」

上映開始時間が近づいたため、疎らだった客席が次第に込み合っ
てざわつきはじめていた。薄暗い館内の中、菓子やジュースを片手
にはしゃぐ親子連れに道を譲ると、僕達が席をとった真ん中の列は
満席になっている。

大ヒットしたアクション映画の続編というだけあって、前評判は
上々。特に小夜子は熱心なファンだったはずだ。

「小夜子」

キャラメル・ポップコーンを片手にパンフレットを注視していた
彼女の無防備な耳元に、僕はそっと口元を寄せる。

「地区大会優勝おめでとう」

彼女が答えるより早く幕開きのベルが鳴り響き、辺りは暗闇に包
まれた。

金髪を振り乱した美女がサブマシンガンを物陰から打ちまくり、麻薬の運び屋の足を中心に血飛沫が舞う。派手なアクションで見栄えのする転がり方を披露してくれた悪役は、後ろに控えていた仲間へトランクを渡し、力尽きる。勿論この最後の最後を気のきいたアメリカンジョークで皮肉る事は忘れないのがハリウッドのお約束だ。ついでに爆発の景気良いラッシュも定番か。

平和主義者と見せかけて、小夜子が好むのはこういったバイオレンス要素を含む活劇物が多かった。それは多分健太郎の影響だと思う。

「で、今日はどうだったの？」

今日も参考書と睨めっこをしていた健太郎は、先程から1ページも進んでいないそれを気にもせず僕を問いただしてくる。

藤倉家のリビングは広く、健太郎の座っているテーブルは6人掛けだ。その向かい側に腰掛けた僕は、今日の夕刊の目ばしい記事に目を通す。

「楽しかったよ、最近の洋画の中ではそこその出来かな」

特別映画が好きなわけではないので、僕の総評は曖昧だ。どうもああいっただ類の物は映像の出来だけで腹を満たされる気分になってしまう。

「違っつて、そこじゃなくてさ」

赤いマーカーを振りかざして、健太郎は首を横に振る。

「デートだったんだろ？」

「そうだよ」

彼が何を期待しているのかわからないわけでもないが、伝える義務はないだろう。

「……まああの姉ちゃん相手じゃあ大した進歩もないだろうけどさ。映画と買い物だけでさっさと帰ってくるし」

さすが弟と言うべきか、健太郎は感慨深そうに呟いてそれ以上の追及はしなかった。代わりに僕の手元にあった夕刊のテレビ欄と時計を見て、慌ててテレビのリモコンを掴む。

「おっとビビンジャーの時間だった」

一瞬眉を顰めなくなる固有名詞だったが、テレビ画面に映し出されたそれを見て納得する。最近健太郎が好んでいるSFアニメだ。今日最終回なんだよね、と言う彼の目は真剣そのもの。その熱意の半分でも参考書に向けてみれば、受験勉強など遥かに捗ると思うのだが。

『ミカ……』

画面には若い男と少女が宇宙を背景に立っている。赤い服を着た長い黒髪の女の子は、背格好がどこも小夜子に似ていた。その優しそうな目元が涙で潤み、男の袖をぎゅっと掴んでいる。

『僕はこれまで自分の星に還る事を第一に考えていた。地球の平和

を守っていたのも、この星での居場所を作るために行っていた浅はかなカモフラージュさ。本当は故郷から通信が入り次第、何もかも見捨てて即シャトルに乗ろうと考えていたんだ」

『……ハロルド』

『けれどそう……ミカ、君が現れた』

男はミカの頬を両手で包みこみ、零れおちる涙に口づける。

『僕が辛いときには支えてくれて、そばに居てくれた。ミカと離れる事がこんなにも辛いとは思わなかった。だから……』

腰に腕が回され、ハロルドはミカをしっかりと抱きしめた。

『僕と一緒に、宇宙の彼方にある僕の故郷まで来てくれないか。そこで一緒に暮らそう、君が開発してくれたフルロイシンTXのおかげで決心がついたんだ』

『ハロルド……ああ、嬉しい……！』

少女の涙のパワーは物凄い。あつという間に背景を薔薇に変え、周囲に甘ったるい雰囲気撒き散らす。まさに大団円に相応しい演出で、恋人達は幸せそうに自分達の世界を作っている。

僕は全くこのアニメのストーリーを知らないのに、感動巨編として涙を流す事は出来なかった。そもそもどんなお涙頂戴劇を見ても泣いた事なんてなかったけれど。ついでに男の言う不可解な単語は延命薬だと健太郎が教えてくれた。不老不死に近い宇宙人ハロルドとごく普通の人間ミカの恋物語で、お互いの命の時間の差がキーポイントになっていたらしい。

「結局ミカと旅立ちエンドか。けど寿命を延ばす薬なんて安直過ぎるよなあ、せめてワールドスリープとか、時間圧縮とか、使い古さ

れた古典SF手法でも出せば良いのに……ま、よかったハッピーエンドで。父さんにも教えておかないと」

鼻をすすりながら目を瞬いている健太郎は、やっぱり小夜子の弟だなと感じさせる。彼女も映画を見ると、大抵目を真つ赤にして泣き腫らすからだ。ちなみに先程の映画でもラストはぼろぼろと大粒の涙を零していた。泣き所が何処にあったのかは甚だ疑問だが。

時計を見れば時刻は18時をまわっている。夏場の窓の外は赤い夕焼けに染まっていて、そろそろ夕飯の食材を買いに出かけた小夜子が戻ってくるだろう。

「ハロルドは超能力者で、念力に予知に透視、テレパシーやサイコメトリーなんかも使える超万能のオールラウンダーなんだぜ。俺達みたいなよくわからないちっぽけな力とは違うよなあ」

「そんな力が欲しかったの？」

物語を見納めた健太郎は、興奮が冷めきらないのか頬を上気させて笑っている。

「だって格好良いじゃん。正義の味方になって悪者を懲らしめるんだよ」

彼の頭の中で想像されているのは、悪人を蹴り倒し、か弱き人々を守り、不思議な力を駆使して宇宙を飛び回るヒーローに違いない。人々に望まれ、愛され、認められている存在。

屈託ない笑みを浮かべる健太郎は、年より幾分か幼く見えた。けれど僕は彼の言う能力が決して素晴らしいものではないという事を知っている。

「たとえばそんな力があつたて、本人が望むように生きていけるとは

限らない。それに故郷も彼女も両方とろうなんて、甘い考えだよ」

画面のクレジットを見つめながら、僕はぼんやりと呟いた。

「現実はいくらに楽じゃない」

そう、現実は厳しい。

「どうしたの兄ちゃん？」

参考書に作った涙の染みをティッシュで拭きとりながら、健太郎が怪訝な顔をする。

「いや、よかったね。ハッピーエンドでさ」

「兄ちゃん達もそうなるでしょ、限りなく完璧に近い優秀な人間と欠点の多いおとぼけ宇宙人だけど」

別段何の含みもなく発せられたその言葉に、僕は頷けない。その理由を健太郎は、そして小夜子はまだ知らない。

当然、相手が異星人でも僕は構わないよ。

けれど小夜子、僕は君にいくつか嘘をついている。

僕の嘘を、この裏切りを、彼女は許してくれるだろうか？

第14話

この地球上のごく一部の生活地域に住む者達は、概ね僕の事を何でも出来る優等生、という評価をしているらしい。

全国模試の答案結果を担任から笑顔で渡されて、僕は阿鼻叫喚の悲鳴があがる教室内で溜息を吐いた。隣の席の友人上原孝之は三日三晩の徹夜を敢行したらしいが、机に突っ伏して終始無言のままなので、芳しい結果ではなかったのだろう。肘の下からはみ出ている用紙には希望の大学判定の評価が右肩下がりのグラフになっている。

高校2年生の夏は何もかも中途半端な時だ。新入生のような新鮮さもなく、受験生のような切迫感もない。未だ明確な将来のビジョンが見えない者が、唐突に行われた大学の判定テストに戸惑うのも無理はないだろう。

薄っぺらいA4用紙の結果を見ることがせず、僕は自分の座席へと戻った。先週の騒ぎから一変して窓ガラスは全面新しいものに差し替えられ、今はどれも半分ほど隙間を開けて外の空気を取り込んでいる。この件も謎の破損事件として翌日は皆話題に持ち切りだったが、あっさりと業者に直されてしまったのは面白味にかけるらしく、もはや誰も口にしなかった。思うに、人間とはほんの少しの不可解な成分の混じった物事が一番興味を惹かれるのだろう。

「いいよな、毎回全国上位の奴は……」

上原の恨みがましい声は無視をして、僕はさっさと妬みの元を靴にしまった。彼の努力が次に四日四晩に向かわない事だけを祈っておく。

「ところでさ、例の先輩とはどうなんだよ」
「先輩？」

「とぼけんなよ、テニス部の部長さん。えーっと片桐さんだっけか？」

意外な名前が思いがけない人物から飛び出して、僕は眉を顰めた。彼はその瞳を輝かせてこちらを見ている。テスト結果の熱気で教室内の温度が上昇しているようだが、上原の視線も負けなくらいに熱かった。

「どうもなにも。少し話をしてただけだよ」
「告白だったんだろう？」

僕は何となく小夜子の友人である片瀬遙を思い出した。彼女もまたこの手の話題が大好きで、クラスメイトの半数は専ら彼女に情報を握られているらしい。しかしながら頭の回転において、残念ながら我が友人は彼女に遠く及ばない。

「いや、今のこの国の政治経済状況からお互いの周辺に関わるいくつかの事例まで、ごく一般的な世間話をしていただけけど」
「うら若い男女が2人、人目の付かない校庭の外れで交わす言葉がそれか？」

期待通りの返答を得られなかった彼は、僕に非難がましい抗議を送る。

「あんな美人を前にして……お前の審美眼は狂ってる」

それはある意味で大変に正しい。けれど美術の時間にモデルの石膏に落書きしている誰かに美的センスを問われたくはない。

「ああそつだ、映画見てきたから」

話題を切り返すその言葉に、上原の肩がびくと跳ねた。

「……藤倉と？」

彼が何を思っで彼女の名を口にしてきたのか。もう随分前から僕はそれに気が付いていた。そして上原には気の毒と思わないわけでもなかったが、隠すつもりはない。

「そう。小夜子お前が僕と行きたかったんじゃないかと気にしてたよ」

「マジで？あーなら今度は俺と——」

「あ、それ無理」

「何で」

「僕と付き合う事になったから」

休み時間の喧騒が、おそらく彼の耳には一瞬途絶えて聞こえただけに違いない。時間が凝るような、実際は数秒しかないその瞬間。彼は開いた口をそのままに身体を硬直させ、やおら視線だけで上空を仰いだ後、静かにまぶたを閉じた。そしてぎこちなく上げられた右腕が目元を覆い、ゆっくりと左肩から力が抜けていく。

「俺、お前ってドSだと思っただけ……」

小さく小さく呟かれた言葉には、彼の明るい気性で無理に押し殺したような寂しさが潜んでいた。強張った口元がぐっと引きしめられて、一度ゆっくりと喉元が上下する。

「まあでも……薄々わかってたよ。2人でいると雰囲気違っもんな、やっぱり」

ゆるゆると放された手が机に落ちて、上原は少し俯いていた顔をあげた。赤みのさす目でしっかりと僕を視界に入れている彼を、僕は素直に立派だと感じた。この視線から逃げる事は許されない。

「お前さ、いつも穏やかで優しい感じだけど、藤倉といるときは自然と嬉しそうな顔してるぜ。だからこないだのテトリスもあんな鬼畜技ではめてきたんだな」

わざと明るい調子で声を張り上げる彼に、僕は無言で頷いた。謝る事は彼に対して失礼にあたるだろうし、上手い言葉も出てこない。彼がなぜ小夜子を気に掛けていたのか、そんな事は僕は永遠に知らなくていい。知る権利もない。

「あーもう、てか俺踏んだり蹴ったり。失恋決定じゃんか」

震える声に限界がきたのか、その呟きを最後に上原は席を立ちあげ、こちらを振りかえる事なく教室を出て行った。僕はその後ろ姿を見送って、椅子に身を倒すと教室の雑音から耳を閉ざす。瞬時にぼんやりとした思考が首をもたげて目を瞑った。

恋に勝った男と、敗れた男。俗な表現では僕達を勝ち組と負け組にされてしまうのだろうか。

けれどそれは愚かな間違いだ。僕は彼を羨ましいと思っている。

ごく普通の家庭に生まれ、しごく順調に育ち、多くの友人に恵まれ、部活に励み、たまのテストで失敗し、クラスメイトに恋をする。当たり前の生活を当然のように享受して、それが尤もだと信じて疑わない。いやそもそもそんな疑念など一生持つ事もないだろうし、持つ意味もない。ありふれた日常を何の含みもなく過ごせるその権利。

羨ましい。そしてときには狂おしい程妬ましい。

なぜなら彼は持つている。いや彼に限らず地球上の人類は皆平等に所持しているのだろう。僕には永遠に手に入らず、何に変えても欲しいもの。

僕が切望するものはただ一つ、平凡な『人間』として生きていける資格だ。

僕が小夜子とその家族に初めて出会ったのは3歳の頃。自宅の庭のベランダで母とお茶を飲んでいた僕の目の前に、それは突然現れた。

真っ白な細長いカプセル型の宇宙船。おそらくかの星ではこれがスタンダードタイプだったに違いない。大人が2・3人で一杯になりそうな体積のそれは、ふわりふわりと頼りなく宙を漂い、子犬が駆け回る程度の音も立てず椿の木に引っ掛かって落下した。バスケットが出来るくらいには広い庭に、それは大した衝撃もなく芝生を這うように転がって、ごつんと大きめの飾り石にぶつかる。回転運動をやめた途端カプセルはガタガタと忙しくその身を震わせ、すぐに丸く縁取られた昇降スペースが開いた。小さな黒髪の少女がひょこりと顔を出したのは次の瞬間のこと。

おかっぱ頭のくりくりした瞳が上下左右へ好奇心に揺れていて、生えそろうた青い芝生にそろりと手を伸ばす。草が触れる感覚が珍しいのか、ごくありふれた品種のそれを何度も指先で掠めるように撫でまわし、少女は嬉しそうな声を上げた。子供らしい屈託のないその響きに僕は驚いて顔を上げ、丁度視界に僕を見つけた彼女もまた目を見開き、そしてにこりと笑いかける。

「ええ、お、オウ、ソー、りい」

更に程なくしてカプセルの入り口から現れたのは、赤子を抱いた成人女性と男性によく似た2人組みだった。全員が蛍光オレンジのマントのような長い布を羽織っていて、色合いが何とも目に痛い。突如現れた、あきらかに怪しい風貌の団体。僕は持っていた紅茶のカップを握ったまま息を飲んだ。

「ねえ貴方、その用語は地球で通じるものなの？」

「この星で一番の勢力を持つ言語だとももの本に書いてあったんだよ。挨拶は何だったかな……発音が難しい」

どう見ても外見上は限りなく人間の男に近い彼は、もごもごと口を動かした。赤ん坊の高い笑い声のような、か細い囁き声のような、理解し難い発音が続く。

「ほら反応がないわよ。きっと違う言語を使用している生物じゃないかしら」

「ちよつと待つて、ビュータの翻訳機能は壊れていないはず……」

僕が反応に困っている間に、彼らは白いカプセルの中へ身を乗り出して何かを探し始めた。ガチャガチャと大きな音を立て余程慌てた搜索をしているようで、少女は心配そうにその行動を見守っている。

やがて再び顔を出した彼は、右の掌にごく小さな黒い箱をのせていた。形は丁度正方形で、まるで結婚指輪を入れるような蓋の付いたケースによく似ているものだ。

「あー、ソーリー。あいム あ ビジター。ないス とウ ミー
ちユー」

小箱の構造はよくわからないが、その中から確かな発音の音声が流れてでていて、彼はそれを聞きながら口を動かしている。

「ちゃお、うい、ア、ロハ」

「あらあら、急にお客様が4人もいらしたわ」

のんびりとジノリに口をつけて事の成り行きを見守っていた母は、そこで初めてポツリと呟いた。それを反応と受け取ったのか、彼の表情が明るくなる。

「ぼんじゅー　　る　　だんけ　しえん　　ちん　　どうオ　グアん
じゃオ」

「しかも随分マルチリンガルな方みたい」

母に緊迫した空気は全くない。それどころかお気に入りのアールグレイのティーポッドへ手を伸ばし、のんびりとおかわりを淹れだした。ほのかに漂う優しい香りに満足げに頷いて、まだ半分以上残っている僕のカップにもそれを注ぎ足す。

「日本語がわかる方だといいわね」

子供心にも関心を持つべき所はそこじゃないと思ったが、僕の母はいつだってこうだった。

「アンと　りすト　にいハお　　こんニチは
「こんにちは」

ようやく飛び出した反応出来る言語に母はゆっくりと立ち上がった。彼らは赤い花の咲く椿の枝の影からこちらを伺っている。

「あーこん、ニチは。おさがせしテ、スミません」

黒い小箱を耳に押し当てながら、彼はぺこぺこ頭を下げた。

「ええこんにちは。もしかしてあなた方は宇宙からいらっしたのかしら？」

「わた、したちは、‘エノタト’カラきました」

「きつと遠い所からいらしたのね。私は佐川カエデ、それからこの子は息子の稜介よ。中に夫もいますから、よろしければお茶でも何かしら？」

人の話を聞いているようで聞いていない。母は鼻歌交じりにステップを踏んで、怪訝な顔をしている彼らに近づいて行った。その行動は何か楽しい事を思いついたときの母の癖だったが、傍から見ていてこれではどちらが不審者なのかわかない。

それでも一応表面上は友好的な態度に見えていたのだろうか。彼らは母の奇妙な行動から逃げようとはせず、その一挙一動を見守っていた。そしてあと数歩で腕が掴めそうなくらいの至近距離まできたとき、母はその場で突然足を止めて、あ、と叫んだ。

「あら大変。私、たった今重大な問題に気がついたわ」

「モンダイ……？」

不穏な気配を察知してか、瞬時に彼らの表情が曇る。ついでに母も眉根を寄せて、さも深刻そうに重々しく口を開いた。

「紅茶のカップが3つしかないのよ。だって私達、3人家族なんですもの」

僕は心の中で彼らに同情の溜息を吐く。

きつと不安と緊張を抱いて未知なる星へと降り立っただろくに、
よりによって初めて接触したのが僕とその母だったとは。

僕は興味津津といった体で庭の草木を弄り回している少女を見つけた。人間にそっくりな、幼く無邪気な黒髪の女の子。

いくら変わり者とはいえ、なぜこんな得体の知れない来訪者を母は平然と対応出来たのか。その理由は簡単だ。

本当に、夢にも思わなかったよ。宇宙船の不時着——この辺境の惑星に、まさか自分達と同じ運命を辿る異星人が現れるなんて。

第15話

『軌道要素ト性質ヲ調べテイマス…… 平均公転半径149'59
7'870Km/近日点距離0'983AU/遠日点距離1'01
7AU/平均軌道速度29'78km/s ……』

『——大丈夫、この星は生存可能条件を満たしているわ』

『あくまで機械の試算結果だよ。それに支配的地位にある生物は我々とはかけ離れた姿形をしている。擬態が必要だし、その分身体に負荷がかかる』

『いいの、行きましょう』

『けど……』

『ここでシャトルが爆発して、宇宙空間に投げ出されるよりは生きる可能性があるわ』

『駄目だ危険過ぎる、そもそも何の交流もない未知の星なんだ！
救援を待つ方が得策だろう？』

『それでもお願い、このままでは「この子」がもたない。絶対に死なせたくないのよ！』

『どうしても？ 自分達の命の保証は出来ないんだぞ』

『ええ、どうしても。ここで諦めたら、私は例え無事に故郷へ辿りついてもし生後悔するわ』

『……わかった、行こう。あの青い惑星へ』

どうも、宇宙船の故障なんてのはよくある話らしい。

人類が初めて宇宙に飛び出したのは今を遡って数十年前の事。生命の誕生から駆け足で進化を遂げてきた彼らからしてみれば、それは決して早過ぎる事ではない。けれどそんな彼らがこの先数千年の時を経て、文明を更なるスピードで発展させても感知出来ないであろう遠く離れた彼方に、僕の両親の故郷はあった。

その地で出会った父と母は、長い年月を共に過ごし、旅行と称して多くの銀河系を巡っていたらしい。どれだけ星をまわってもそれ以上に完成された航宙技術はないと言わしめる程の高度な文明を武器にして、星間を渡り歩く。この星の表現で表せば、スペース・トラベラーと言ったところだろうか。

しかし順調に続いていた旅が足止めを食らったのは、宇宙船のエンジン部分の故障が原因だった。

暗黒の海の中でのトラブルは、どれだけ進化を経ても命に関わる重大な問題である。当然ながらあらゆる手段を用いて修理を試みたものの、その修復は絶望的だった。父はすぐさま救難信号で遙か遠くの故郷へ助けを求めたが、母は決断した。一番距離の近い、とある銀河系の青い星への着陸を。ほとんど情報もない星への不時着、それは大変危険な賭けでもあった。けれど全ては実行されたのだ、当時生まれてまもなくだった僕のために。

幸せを絵に描いたような、川の子で寝転ぶ親子がいた。

「昔々、あるところにそれはそれは美しい私……じゃなかった女の子と、素敵な陽介さん……ではなくて男の子がいました」

子供に話をせがまれて、布団の中眠る前に母親は口を開く。

「2人は出会ってすぐに恋に落ち、結婚しました。そしてそのまま新婚旅行に出かけて、色んな星を巡ります」

妻との間に子を挟んだ父親は、やれやれと首を振った。

「ある星では誰かが別の知的生命体に食べられそうになったり、別の星では誰かのせいで現地生物と喧嘩になったり、宇宙空間ではまた誰かが寝ぼけてシップから落ちそうになったり……ああ、マイクロイオン・エンジンの故障も、誰かの食べかけのおやつが隙間に入り込んだせいだったか」

父親の遠い目としみじみと語る口調に、子供も憐みの目線を見る。

「随分苦労したんだね……」

「でも、楽しかったわ」

反省の欠片もない母親は、けろりと笑って子供のおでこを撫でた。さらさらの癖のない髪を指先で梳いて、瞼を下げる。

「それはまあ、君といたからね」

父親の答えを聞いた彼女は、嬉しそうに頷いた。

「そう、2人一緒」

だから本当に幸せだったの、と母親は子供を抱き寄せる。子は照れ臭そうに身をよじったが、その温かさが心地よいので腕を解く事はしなかった。

「それでどうして、この星で暮らす事になったの？」

薄々これが両親の昔話だと気がついていたので、子供は大きな瞳を瞬かせて母親を見上げてみる。

「デブリとの衝突よ」

途端、母親の声が変わった。普段の穏やかな様子とは違う、少し固い声。

「デブリ？」

「宇宙粗大ゴミ。この星の周囲には特に多かったわ、ほとんどが宇宙産業廃棄物の鉄屑みたいな物だけ。とにかくあれがほんの数ミリでも船体にぶつかると、物凄い衝撃になるの。当たり所も運も悪かったわね、丁度点検のために外甲シールドを切っていたエンジン部分に近い箇所だったから」

「ぶつかってきたのは古いシャトルの燃料タンクみたいなもので、相当大きかった。至近距離で大砲に撃たれたようなものだよ」

父親も同意して、子供の頬を撫でた。

「それで堕ちてきたの？ この地球に？」

子供は驚いて父の手をとり、握る。

「信じられないよ、作り話でしょ？　僕はどう見ても人間じゃないか」

「そうね、ここからは……ちょっと、切ないお話」

母親の腕に力がぎゅっと込められた。

「僕達がこの地に降り立ったときに、不幸があつた一家がいたんだ。疲れ切つてナイフを持った父親と倒れた母親、そして真っ赤に染まつた赤ん坊」

突如語られる物騒な言葉に、子供は身を固くする。

両親は一体何を言っているのだろうか？

「今にして思えば、何らかの理由で絶望から心中に走つた直後だったのかもね。でも、命の切れる寸前で出会えた事は僥倖だった。僕達の擬態能力は君も知っているだろう？　生身の身体があれば、簡単に取り繕う事が出来る」

「……それって」

「決して褒められた事ではないだろうね。でもあのときその父親は僕を見てこう言っただよ。妻も子も、自分は幸せにできなかった。二度目の人生が可能なら、やり直したいと」

子供の責めるような、言葉に詰まるような、悔いているような、もどかしい感情の入り混じった視線を受けて、それでも父親は笑っていた。

「本当にたくさんの惑星を見てきたけど、私達と同じ姿をした生命体はどこにもいなかったわ。それに力も。この星で生きていくなら、それは当然の選択だったの」

「君にはまだ、理解し難いかもしれないけど……僕はこの選択を後

悔していないよ。いつか親子3人が無事に故郷へ辿り着くためには、必要な事だった」

でも、だけど、それは――

「……それ、本当の話？」

「さあ、どうかしら。生まれたばかりの貴方が覚えていないくらい昔。本当にあったのかも、なかったのかもしれない話よ」

暗い影など微塵も見せない母の笑顔に、子供の胸は張り裂けそうなくらい痛んだ。

「何だか眠くなってきたから、もう寝ましょう。この話はお隣のあの子にも、秘密にしておきなさいね」

子供は知っていた。未だ幼いはずの自分の自我が、同年代の子供よりも遥に発達している事を。普通の子供とはどこかが違う事を。

本当は、もつと重大で深刻な事態だったはずだ。未知への星への墜落、人間への擬態、募る故郷への思慕。それこそこんなふうに笑ってなどいられないような。

けれど2人は明るかった。まるで何でもない事のように振る舞い、常に我が子を愛していた。

だからそんな両親が、子供は好きだった。

それは幸せの中にどうしようもない切なさを含んだ、遠い日のある親子の会話。

無機質なアラームの音で目が覚める。すっかり馴染んだ目覚ましを叩いて、僕はゆっくりとベッドから身を起こした。

白い壁紙に、机と調度品だけが並んだ殺風景な自室。一般的な高校生男子としてはいささか不気味なくらい物のない整った空間は、ほとんど生活の匂いを感じさせない。それよりもむしろ肌寒いくらいの寂しい印象で、大きく仕切られた窓から降り注ぐ朝日だけが温かみを感じさせる。季節は夏だというのに、パジャマの下は汗すらかいていなかった。

昔の夢を見たのはいつ以来だろう。後頭部がズキリと痛み、僕は思い切り顔を顰める。その原因には心当たりがあるのだ。

そろそろ、「連絡」が入ってもおかしくはない頃になる。

枕元にある、灰色の光沢を持った小さなパネル。ごく薄い、そう丁度液晶テレビのようなディスプレイを持つそれは、僕の両手で包みこめる程度の大きさで、触ればひやりと冷たい。真つ暗の平坦な画面を指先でそつと撫でてから、僕はベッドサイドのボードにそれを立て掛けた。

今日も、反応はない。

このパネルが光り、故郷からの救助信号を拾ったのはもう5年も前になるのだろう。目を閉じれば今も、あの時の両親の言葉が鮮明に蘇る。

『必ず故郷へ帰ってくるんだよ』

『私達は、ずっと貴方を待っているわ』

サイドボードに一枚だけ貼られた写真には、長い髪を頭上でまとめたエプロン姿の母と、眼鏡をかけてスーツを着た父が2人並んで映っている。

『この星では、決して幸せになれないのだから』

別れの日。そう涙ながらに告げたのは母だったのか、それとも父だったのか。

故郷からの連絡は、まだこない。

「ねえ綾介、その長さあつてる？」

落ち着いたベージュの色合いのカーテン生地は、教室の窓を覆うだけあつてかなりの面積があつた。家庭科室の机では勿論幅が足りず、結局床のタイルの上に直接生地を置いている。

「うん、ぴつたり」

開く左右分が必要なため、同じパターンを2枚作らなければならぬ。小夜子はメートル単位の採寸定規を駆使してちょこちょこ歩きまわっては、手芸用のペンシルで印をつけている。

本人はあまり意識していないみたいだけど、彼女は基本的に手先が器用だ。僕だってやれと言われれば人並みにこなせるが、既製品を買う方が早いと思つてしまう。

「このお金、領収書を貰つておいてよかったよ。担任に確認したら、学年の小口から出してくれるって言つし」

「本当？ 結局お詫びになるような、ならないような……」

「気にしないでいいって。ほら、下押さえて」

昼休みの家庭科室は、当たり前だが誰も使用していなかった。教室とは離れた移動クラスの棟にあるせいか、休み時間とは思えない

静かさだ。

下を向く度に肩から流れるポニーテールの一部が邪魔だったのか、小夜子はそれを一纏めにして後ろで高く結び上げていた。白い首筋が露わになり、たまたま生地端着を持って立っていた僕からはそれがよく見える。

「ところでさ」

当然そんな事には気がつかない小夜子は、僕に背を向けたまま手元の定規を動かしていた。

「結局片桐部長からの手紙って何だったの？」

多分、何気なく言っただけなんだろう。ただ長い付き合いは伊達じゃなくて、その声が少し裏返っているのはすぐにわかった。

「気になるんだ。今まで僕が誰に呼び出されてもけろっとしてたのに」

彼女がそれ程この件を気にしているとは思ってもみなかったのが口元が小さく持ちあがる。小夜子は明後日の方向を見ながら、ペンをくるくると回していた。

「……今気がついたんだけど」

少し恨みがましい声で、呟く。

「稜介は結構な意地悪。それで多分わたしは……随分やきもち焼きかも」

表情は見えなくても、耳が赤いのは僕の気のせいじゃないだろう。一瞬、心臓が止まるかと思った。まさかあの小夜子がこんな反応をしてくると思わなかったのだ。

これでは、期待に応えてあげたくはないか。

「じゃあ、誰のためにずっと呼び出しを断り続けてきたか知ってる？」

僕がどうしてこんな人間を演じているのか、君はわかっているのだろうか。

「稜介、あのね」

すると彼女はいきなり真面目な表情で僕を振りかえり、ほのかに赤い頬を隠しながらこう言った。

「あんまり心のメモ帳がパンクしそうになる事は言わないで。ただでさえ、最近残りページ数が少なくなってる気がするんだから」

切実そうに訴えるような目で見られては、こちらに返す言葉はない。

恐らくそれは、彼女の頭の中では何か大きな意味がある言葉なのだろう。ただ生憎と僕にわからないだけで。

「そろそろ午後の授業始まるから、行かなくっちゃ」

慌ただしく裁縫用具を片付けて、小夜子は家庭科室を後にする。

僕はそれを複雑な気持ちで見送った。

この言動を彼女なりの照れ隠しと都合良く思い込むには、どうしても少し違うような気がしてならなかった。

「佐川綾介君」

授業が終わり、慌ただしく各々が部活や下校で教室から姿を消す中。背後からそろそろ来るのではないだろうかと思っていた人物の声がした。

短い黒髪に意志の強そうな目をした彼女は、確かに上原が美人と称するのに恥じない端正な顔立ちをしている。数人の友人達の視線を気にもせず僕の席まで歩み寄ると、彼女、片桐美奈子テニス部部长は開いていた前席に足を組んで腰掛けた。

「ちょっと時間あるかしら」

「僕も先輩も部活では？」

小夜子から彼女も県大会への出場が決まっている事は聞いていた。高校最後の夏、引退をかけた大切な試合であるはずだ。

けれど彼女は首を振って、机の上にあった僕の鞆の上に両肘をついた。

「その前に2人だけで話したいの。内容は手紙の件の続きよ」

第16話

「貴方の正体を知っています。」

大切な幼馴染に真実を伝えたくないのであれば、明日の朝、南門まで来て下さい」

まあ、手紙を開いた時にはそれなりの驚きがあったと思う。

「ラブレターじゃなくてごめんなさいね」

校舎から遠いあまり人気のない南門。体育用具倉庫の壁に並べられている石灰の袋の上に座ったまま、片桐先輩はそう言った。杉の木がお互いに隠れるように密集している場所なので、朝の日差しはほとんどが遮られている。

僕と彼女の接点と言えば小夜子だが、実際はこうして顔を合わせるのも初めてだ。

「随分上手く化けていらつしやるみたいだから、今回も恋文だと期待されたかしら。でも結構衝撃的な文面で、同じくらいのドキドキ感があったんじゃない？」

背中をゆっくり汗が伝う中、彼女はどこかひやりとした空気を身に纏っているようだった。細身な身体がピシリと姿勢よく背を伸ばされ、口元には涼しげな笑みが浮かんでいる。小夜子はよく彼女の事を熱血スポーツ少女だと言っていたけれど、こうして対面した限りでは正反対の印象を持つ。どこか張り詰めた、緊張を強いられるその雰囲気。

「貴女が思われている程僕は自惚れてはいませんが」

僕は彼女の真正面、杉の幹に身体を預けて口を開いた。

「それで、どういった御用件で？」

「あら、つれないのね。わたしと一緒にいるのを藤倉さんに誤解されたら嫌だから？」

下から見上げるような挑発的視線を向けて、片桐先輩は目を細める。

「心配しなくたって、わたしだって心に決めた人がいるの」

だからお互い様よね、と言って彼女は青い塗装の剥げかけた倉庫の壁に肩をついた。

「冗談のお呼び出しなら、そろそろ教室に戻りたいんですが」

「あら、これは真面目な呼び出しよ。それもそこの貴方の見かけに騙された女の子達の告白よりかは、よっぽど愛のこもったね」

片桐先輩はくすりと含みのある頬を持ち上げて、石灰袋の端を爪でつついた。引っ掻かれた紙袋は一筋の傷がつけられ、その間からラインパウダーがポロポロと零れ落ちていく。足元に広がる白い領地の山。僕はそんな彼女の動きをじっと目で追っていた。

「単刀直入に言うておくわね。藤倉さんと離れる気はない？」

雑木林の葉の隙間から降り注ぐ途切れた光を浴びている彼女は、運動部とは思えない程青白い顔色だった。いや、肌自体はよく日に焼けていた。その表情が、どうにも彼女の生気を奪っているように見せている。笑っているはずなのに、瞳の奥には全く光がない。

「心に決めた人がいると今言われたばかりですよね」

「やっぱり貴方は自惚れ屋さん。わたしはね、ただ単に可愛い後輩の為を思っでこう言ってるの」

「さつきから、おっしゃる意味がよくわからないのですが」

「わからない？」

途端、声の質が変わった。表面を取り繕うような猫撫で声から、獲物を狙う鋭利な刃物のように硬質で、それこそ氷を切り刻むかのような苛烈さを秘めたそれに。

「それ冗談よね、だって貴方本当は誰よりもわかっていると思うわよ。自分みたいな特殊な宇宙人が彼女のそばにいるのは無理があるって事を」

激した言葉のままさらりと、何気なく。彼女の物言いはまるで出来の悪い生徒をたしなめる教師のように、あっさりと確信をついてきた。

「あら、そんな怖い顔しないでよ。わたし他にも色々知っているんだから……そうね、貴方は宇宙人。どこか遠い星からやってきた未知なるエイリアン」

「片桐先輩」

「どんな星でも大抵の生命体は実体を持つし、比較的人型に近いものが多く繁殖、文明を築いてきたけど……貴方は違うでしょ」

「片桐先輩」

「どうしてそんなに詳しいのかって？ ふふ、そんなの簡単よ」

僕の言葉など聞く耳も持たず、いやそもそも聞こうとすらしていないのか。まるで自分の世界に酔っているかのように口を動かして、

彼女は右腕をそつと掲げている。

「いい加減認めた方がいいわよ。ほら、大切なあの子がこっちを見てる」

パチン、と指先が空気を弾く音。小気味良い澄んだその音色はこの陰鬱な気配を取り払うかのように周囲に響き、そして僕は咄嗟に振り返った。木々の間に隠された校舎、彼女のいる教室へ。

——小夜子が、いる。

「地球外生命体なんてどこにでもいるんだから。ほら、ここにも2人」

その声と同時に、僕の足は地面を蹴り——教室の窓には亀裂が入った。

僕の両親は当然ながら自分達の正体を隠して生活していた。それは藤倉家も同じで、基本的に僕達は人間社会に溶け込む事を一番重要視してきたからだ。小夜子が自分の正体に気がついた今でも、その方針は変わらない。

ただ時折思う事はあった。僕達以外にも、何らかの理由で地球へと辿りついた他の知的生命体はあるだろう。そもそも小夜子のような、異星で更なる別星人と出会うという恐ろしい確率の偶然を体験してしまったのだから、こう考えるのも無理はない。

けれどそれらとコンタクトをとる事はまずないだろうし、そもそもお互い存在に気がつくかどうかという大前提の問題があった。だ

から実際に出会う事はないだろうと、そう高をくくっていた矢先の出来事が片桐先輩の手紙だったわけだ。

「部活の後輩がね、昨日わたしの事を怒ってきたわ」

彼女との邂逅を思い起こしていると、片桐先輩はふと動かしていた足を止めた。

「佐川先輩には恋人が出来たから、あんまり2人きりになって近寄るなつて。知ってる？ 馬鹿みたいなファンクラブの決まりで、3年生にならないと貴方に1人で話しかける権利すらないらしいわよ」

通常のクラス校舎と移動教室棟を結ぶ用務通路は、部活動の時間になるとほとんど人氣がなくなつてしまふ。近くのグラウンドでは激しい掛け声や怒声が飛び交っているものの、渡り廊下となつているこの場所には声の残響しか聞こえてこない。立ち止まって耳をすましてみても、何と叫んでいるのかはわからなかった。

ついてきてと教室から出ていく彼女を追つて、僕達は随分と中途半端な通路の真ん中に立っていた。

「おめでとう、正式にお付き合いするようになったみたいで。わたしのアドバイスが受け取ってもらえなかったつて事がよくわかつたわ」

比較的柔らかな声でそう告げて、彼女は僕へと振り返った。

「僕はこれでも穏健派なので、先輩から何を言われても受け流せるつもりでした。けれど話が第三者にまで及ぶなら別だ」

「藤倉さんや他の人を巻き込んだ事を怒ってるの？ そうね、もうあんな力は使わないつもりよ。だって疲れるし」

わたしは貴方と違って人間に近いタイプなのよ、と呟いて、ゆるゆると首を振る。

「一体何が目的ですか」

「だから、藤倉さんと別れて欲しいの」

きつぱりとそう言う彼女が僕にそんな感情など持っていないのは明白だし、その意図がわからない。片桐部長は溜息を吐いて、かすかに見える校庭を見つめていた。

「昔ね、この高校に何でも出来る男の子が入学してきたの。勉強も運動も極めて優秀で、容姿も整って性格も優しい。友人からの信頼も厚くて、いつだってみんなの中心にいるような人」

突然語りだした口調は優しい。昔を思い出すかのように、彼女の視線は宙をふわりと漂っている。

「彼は昔からそういう人だった。そしてそんな彼の幼馴染だったあの女の子は、当然ながらその男の子に恋をしてしまったの。彼と比べると平凡で、頭も良くなくて、唯一テニスが好きな女の子。自分のおじいちゃんがこの星にやってきた宇宙人らしいけど、そんな自覚も力もほとんどない普通の子よ」

何かを思い出すとき、人はどこか自分に言い聞かせるように話します。それはその過去が良い物であれ、悪い物であれ、受け入れてきた事実があるからだ。

「好きだったの、彼のこと」

だからつまり、そういう事なんだろう。

「わたし達は小さいときからいつも一緒に、お互いが本当に大切だった。テニスも2人でよく練習したけど、大抵は彼の方が上手かった。幸せ、って言われれば本当にそう。2人でいる事が楽しかった。このままずっとずっと一緒にいられると信じていたから」

彼女の視線は遠く、遠く。まるでそこに彼がいるかのように静かに語りかけている。

「でも彼には秘密があつたの」

「秘密？」

「そう、彼の正体もまた宇宙人。貴方みたいな——わたし達より遥かに長い生の時間。つまり永遠の命を持つ生命体だったのよ」

ずっと一緒にいられないのは、わたしの方だったのと。あまりに寂しげに、彼女は微笑んだ。

全てがこんなはずじゃなかったんだ。

藤倉一家の宇宙船が不時着してから数日。大抵の会話は彼らが愛用していたビュータという小型の通訳機で済まされていた。この地球のありとあらゆる少数言語まで網羅していたそれは、まさに彼らの星の叡智の結晶。そして今後の生活のため両親達は毎日それを使って話し合いをしていたものだから、幼い小夜子にそんな便利な機械がまわってくるはずがなかった。

「りよ、すけ」

「稜介」

「りよー、すけ」

「稜介だつて」

「りよおすけ？」

それでも毎日毎日、彼女は飽きもせず僕の名前を呼んでくる。舌足らずな発音で、何度も何度も間違えて。

「そんなに頑張つて言葉を覚えなくてもいいんじゃない？」

ビュータを使えばこんな苦労は要らないし、そもそも僕は面倒だった。急に現れた異星人相手にどうして言葉を教えなければならいいのか。あの当時はいくら自我がはつきりあったとしても、なにせまだまだ子供だったわけだから。それに得体の知れない自分達以外の宇宙人とくれば、警戒心を抱いていても無理はなかった。

そんな僕の言葉や態度が彼女に理解されたのかどうかはわからない。けれど小夜子是这样言った。

「わたし りようすけ はなし したい」

その途切れ途切れの単語に僕がどれだけ驚いた事か。きっと、いや絶対彼女は覚えていないだろうけど。

そもそもこの星で暮らしていくには、僕達にはあまりに課題が多かった。

かの星に住む者達は、もちろん人類とは全く違う過程を経て発生した有機体だ。その存在も、概念も、根本的に何もかもが地球と違う。小夜子は都合良く僕の事を人型の宇宙人、と思い込んでいたみ

ただいだけれど、実際には彼女達のような他生物との類似ケースの方が特殊なのだ。僕達の実体が人間とは違っている、それは当然と言えはあまりに当然で。

自分の正体を知ったとき、悩まなかったと言えば嘘になる。この身体は仮初で、自分の本当の姿は……ああ、とても彼女には言えない。

悩みに悩んで、本当に泣きそうな気分になっていたそのとき。意を決してある日僕は彼女に問いかけた。

「ねえ小夜子、もし僕がガスみたいな実体のない存在だったらどうする？」

「空気みたいな存在ってこと？ 鼻から食べないように注意しなくちゃ」

「じゃあドロドロのヘドロみたいな液体だったら？」

「お風呂の度に、身体の一部が流されていないかハラハラするわ」

「……それだけ？」

予期していた答えと180度違うものが返ってきたので、僕の不安は一瞬にして消し飛んだ。というか一気に脱力する。そうして更にたっぷり30秒は考えてから、小夜子は言った。

「そうね、空気のように目に見えなかったら不便かも。ちゃんと声で居場所を教えてね。液体だったら夏には蒸発しないように、冬場には凍らないように注意しないと。それから間違っても冷蔵庫の中には入らないでよ、うっかり健太郎に飲まれそうな気がするから」

「……本気で言ってる？」

「当たり前じゃない。別にそれが稜介なら、いいよ」

しごく真面目な表情で小夜子は頷いた。

こんなにとぼけて力の抜けるような殺し文句を、後にも先にも僕

は知らない。

そんなふうには昔から無意識に口説かれたりしたら、僕の心が傾くのも無理はないと思う。

しかもそれを証明するかのごとく、河原で溺れた小夜子を助けたときの反応には驚いた。あのとき僕は確かに本来の力と姿を彼女に晒していたわけだけど、まあ見事な受け流しっぷり。忘れているのかとも思っただけ、あの出来事から僕の正体を疑ってきたわけだからそれはない。だから多分本気で僕の姿形はどうでもいいと思っているに違いないんだ。

一体誰が、どうして予想出来ただろう？ 本当に、こんな女の子がいるなんて。

この瞬間、という明確なものはない。

ただ彼女と過ごしているうちに、粉雪のように静かに優しさが降り積もって、それが真綿のようにゆるゆると僕を捕えて離さない。力一杯腕を振るえば簡単にその束縛から逃げる事が出来るはずなのに、それをする気になれない。それどころか、もっとその見えない鎖で繋ぎとめて欲しくて、こちらから彼女を捕えたいくなる。

こんなはずではなかった。そう、これは僕の誤算。

地球に降り立ってから12年後、つまり僕が小学校を卒業する年。遂に故郷からの救難信号をキャッチした両親は歓喜し、僕らはかの星へ帰還する事になった。

「ねえ、本当に帰るの？」

「当たり前じゃない、どれだけこの時を待っていたと思っているの」

母の嬉しそうな声に、僕は素直に頷けなかった。

「でも、僕は……」

帰りたくない。自分でも驚いたけれど、これがそのときの僕のまぎれもない本心だった。

大丈夫だと思っていた。割と平然としていられると過信していた。けれどそれは大きな間違いで、自分でも不思議なくらい僕は動揺していた。

だって、彼女と離れるなんて。あの笑顔が見られなくなるなんて。

「もう少し、地球にいちや駄目？」

あと少し。ほんの少しでいいから。

「綾介」

父の眉根を寄せた顔は僕の心を委縮させる。

「ここに残りたいのかい？」

両親を困らせるつもりなんてなかった。まして、こんな我儘を言うつもりも。

けれど。

「——わかった。そこまで言うのなら、僕とカエデだけで先に帰ろう。一度通信が繋がれば、二度目の救助船もそう時間はかからず来れるだろうから」

「陽介さん!？」

「でも綾介、一つだけ忠告だ」

嫌よ絶対一緒に帰るのと暴れて怒る母を宥めずかして、父は言った。

「小夜子ちゃんと母さんは似てるだろう？」
「……うん」

確かに彼女と母親は、その斜め上に行く思考回路が同レベルだった。まあこれは、いい意味でも悪い意味でも。

「それでね、稜介は僕と似ているんだよ」

「うん、そうだね」

「だから好みまで似ているようで、どうにも心配だ」

「……？」

「覚えておいて、僕達と彼女はまるきり違う生物なんだって事を。どんなに大切に思っても、あまりに生きる時間が違い過ぎるんだよ。僕らが故郷へ帰ったら、すぐにまた信号を送る。そうしたら必ず帰ってくるさ、この星では、決して幸せになれないのだから」
「大丈夫だよ。ほんのちよっと、こんなに急にこの星とお別れするのに未練があるだけだから」

そう、あと少し彼女とこの地球で過ごせば、それで十分。別れが唐突過ぎるから戸惑っているのだ。だからそれで、全てが納得出来る。僕はそう思っていた。

なのに。

毎日毎日、両親の事故という嘘に騙された小夜子は僕を心配してくれる。一人で眠るのは寂しいだろうと、僕のベッドまで押しかけては一緒に眠る。まだあまり上手ではなかった料理を作っては僕に食べさせ、決して一人にはさせなかった。涙のでない僕の代わりにぼろぼろと泣き腫らしては、わたしがいるから大丈夫と抱きしめる。そしてあと少し、それがどんどん伸びていく。もう少し、もう少しだけ。

ああ、こんなはずでは。こんなはずではなかったのに。

正確には僕の寿命はわからない。永遠の命、ではない。確実に制限はあるけれど、それが人類よりも遥に長い期間なのは確かだ。

小夜子のそばにいたい。僕の擬態は完璧だし、この生体には正常な繁殖能力も古いもある。彼女が死ぬまで一緒にいる事自体は可能だろう。けれどその後は？ 彼女が死んだからはいおしまい、と気持ち切り替えてその先を生きていく事なんて出来るだろうか。

覚悟を決めるなら、彼女と生きて、この地球で人間として死ぬべきだ。けれどそれを選びきれない僕がいる。故郷が、父が、母が、僕の帰りを待っている。あのととき命を賭けて僕を助けてくれた両親に対して、異星で命を絶つ事はこれ以上にならない裏切りだ。

だから今。彼女と別れてしまえば、誰もが最小限の傷で済むのかもしれない。なのにあの温もりと優しさをどうしても手放せない気持ちがある。

彼女の死後、残りの時間を一人で彷徨うには――僕の寿命はあまりに長すぎるんだ。

第17話

「今後の参考のために、これを貸してあげるわ」

そう言つて片桐先輩が差し出してきたのは、えんじ色の小さな日記帳だった。

余程長く使っているものなのか、革張りの四隅は所々汚れていて、差し込み式のバインダーの紙重量はかなりある。

「彼の日記よ。貴方も色々と思う事があるでしょうから」

遠くで響く校庭からの掛け声を聞きながら、彼女は薄く微笑んだ。肩を掴めば消えてしまうのではないかと錯覚する程、その表情はあまりに力無く脆い。発せられる声も弱々しく、如何に彼の話題が彼女自身に重くのしかかっているか、それを露見していると言つてもいい。

「どうして片桐先輩は僕達の正体がわかつたんですか」

もはや隠す事は無意味だろう。僕が尋ねると彼女はじつと自分の腕を見つめた。

「……わたしの祖父がね、藤倉さんのような完全に人間に溶け込める宇宙人だったの。だから正確にはクォーター。物質に軽い衝撃を送るくらいしか力はないけど、それだって物凄く体力を使って念じてやつとよ。窓ガラスの件は悪かつたと思つてるわ、あんなに大きな力になるとは思わなくつて」

機会があつたら彼女に謝つておいて、と片桐先輩は軽く頭を下げ

てきた。

「別に宇宙人探知能力とかはないのよ。でも初めて貴方と藤倉さんを見たときにね、わかつちゃったの。だって貴方達があんまりわたし達に似てたから」

周囲から信頼される完璧な人間と、ごく普通の女の子。彼女の目には、僕と小夜子が自分達と重なって見えていたんだろうか。

「彼はある日突然わたしに何も言わずに消えちゃったわ。そして残されたわたしはご覧の有様。心の中で彼の幻に追いつがって、もどかしい想いで胸が詰まって、どうしようもないのに涙が出るの。もう2年も前の事なのに」

震える言葉は僕に向けられたものではない。僕を通して、片桐先輩は彼に語りかけているのだ。

「本当は彼がわたしの事をどう思っていたかなんてわからないし、その日記にも決定的な事は何も書かれていなかった。でもだから、これはわたしの自惚れかもしれないけど」

ぼんやりとした焦点の合わない黒い瞳が僕を、いや彼を見つめている。僕が彼女の望む相手ではない事に胸が痛んだが、そのとき不意に小夜子の顔が脳裏を過った。

いつか、僕が故郷へ帰ってしまったら。彼女もこんなふうに僕を責めるのだろうか。こんなやり切れない想いを抱えて。

僕が、そうさせるのか。

「ねえ白崎君、わたしの事好きだった？ だから消えてしまったの？ 長く一緒にいて、お互いが辛い想いをする前に」

それは多分、片桐先輩が一番知りたかった独白に違いない。数秒の時間を置いて、僕のワイシャツの襟首を両手で掴みかかっていた彼女に、理知の光が戻る。

「……ごめんなさい」

そつと放された手はだらりと下ろされ、彼女は小さく息を吐いた。

「経験者としてわたしから言えるのはこれだけ。個人的に藤倉さんの事は可愛い後輩だと思っているし、同じような想いはさせたくないわ。だから貴方も何時か消えてしまいう気にいるなら、彼女に全てを話して別れるべきよ。言わない優しさなんて、わたしにはわからない」

微かな屋根の隙間から差し込む夕日が彼女の顔を照らしている。

そのせいで頬にはわずかに赤みが差していたけれど、結局表情からは何も読み取れなかった。

「それとも誰か他に真実を知っている人はいるの？」

「……１人だけ」

いる。僕の正体を知る人が。

「そつ」

そう頷いた後は、それ切りお互い言葉を交わす事もなく。丁度通りかかった教師の挨拶を切っ掛けに、僕達はそれぞれの教室へと踵を返した。

「あのさ、相談があるんだけど」

藤倉家に着くなり玄関まで出迎えてくれた健太郎は、いつになく真剣な表情をしていた。普段はしないのに僕の鞆を持ってさっさと廊下を歩き、僕を促すようにリビングへ向かう。

まだ小夜子達も帰ってきてはいないようで、居間には僕と健太郎以外誰もいなかった。彼はいそいそと忙しくあちこちを動き回り、冷蔵庫の中から麦茶とお茶菓子を取り出す。

「ささ、座つて。とりあえず一杯」

どこのサラリーマンかと疑うような声と共にお茶を差しだされ、さすがに僕も彼の下心満載の接待に眉を顰めた。とはいえ先程の一件で随分精神的に疲れているので、遠慮なく彼の作戦に乗る事にする。

僕が何も言わずにそれを受け取ったのを確認してから、健太郎も向かいのテーブル席に腰掛けた。

「最初に言っておくけど、俺じゃなくて友達の話だからな」

思春期真っ盛り、デリケートな年頃から出る友達の話というキーワード。つまりそれは十中八九悩める本人を差している。

「初デートって、何処にいけないのかな」

「そんなの相手の年や好みにもよるんじゃない？」

笑いたくなる衝動を抑えながらお茶を飲んでいると、健太郎の顔は耳まで真っ赤だった。

「健太郎にもそんな相手が出来たんだ」

「い、いいや別に聞いたただけだし！ 友達の話だし！」

必死に取り繕う彼の姿は微笑ましい。そして口元の表情を整えるのに腹筋が痛くなる。

「……ただ兄ちゃんならどうするのかなって」

「まず相手はどんな人？」

「えっと、結構小柄で可愛い感じの人。見かけは華奢で儂い感じなんだけど、話し出すとかなり明るくってはつきりしてるかな。髪が長くって、最近切りたいと言ってるけどそれは勿体ないと俺は思ってた……」

「同い年なの？」

「いや、一つ上なんだ。あ、中学の先輩ね。今は高一だけど中学校の文化祭で知り合って、そのまま連絡とってる」

「健太郎とずっと続いているの？」

「うん、毎日メールしてるよ。っていうかマジびっくりなんだけどその人さ、俺達と同じ——」

そこまで嬉々として口を開いていた健太郎の表情がピタリと止まった。そして数秒の空白。頭の中で、たった今の己の発言の迂闊さを振りかえっているに違いない。

「誘導尋問っ！」

大きな音を立てて、健太郎は椅子から立ち上がった。

「失礼な、健太郎が勝手に語り出したんじゃないか」

「ひどい、兄ちゃんひどいつ！」

「やだ、健太郎それ本当？」

大袈裟なりアクションで床をのたうち回っている彼の背後には、いつの間にか部活帰りと思われる小夜子が立っていた。それを見た健太郎の表情が後悔と絶望に染まる。

「何で姉ちゃんまで聞いてんだよっ！　　うわ最悪、超最低だっ！！」

家族にこんな話を聞かれるのはやっぱり抵抗があるものなんだろう。健太郎はソファに置かれたクッションに頭を埋め、聞き取りがたい怨嗟の言葉を吐いている。

「わたし達の初デートってこないだの映画でいいの？」

「どうかな、昔から一緒に色んな所に行ってるからね」

「そうよね。ああ、それにしても健太郎に先を越されそうで悔しいわ」

一方の小夜子は別に健太郎の恋の相手なんて全く気にならないみたいだった。むしろ引っ掛かるのは別の部分らしい。

「何を越されるって？」

セーラー服のリボンを丁寧に折りたたみながら、彼女は弟の足をえいと軽く蹴り飛ばした。

「桃色背景機能の習得。わたしにはまだその極意が会得出来ていないのに……」

「何馬鹿な事言ってるの、うちの娘は」

あわや反撃に出た健太郎と不毛な姉弟喧嘩が開始されようとしたその直前。救いの女神ならぬ藤倉家の生きる法律の声がした。2人の母親であるマヤさんは、仕事用のスーツに身を包んだままりビングの扉の前に立っている。

「ほら小夜子、さつさと夕飯作って頂戴。今日は冷やし中華なんか食べたいわね」

この家では彼女に逆らう事が許されていない。女王様のご命令に、小夜子は顔を顰めて鞆の中から財布を取り出した。

「もう、ほんとお母さんて傍若無人よね」

野菜がないから買いにいかなくちゃ、と小夜子はさつさと部屋を出ていく。そして残された健太郎にも厳命なるお達しが下される。

「健太郎は勉強。ほらちゃきちゃき動く」
「わかってるよ……」

受験生の身分では、その言葉に逆らう事は出来ない。彼もまた渋々頷いて自分の部屋へと向かった。

「お帰りなさいマヤさん」

「ええ、今日は本当に疲れたわ。クライアントからのクレームで所長から鬼のように怒られるし」

彼女の帰宅は日によってかなりバラつきがあるけれど、今日は比較的早い時間帯のはずだ。

「それで、随分浮かない顔してるみたいけど？」

飲みかけの僕のコップに構わず口をつけて、マヤさんは先程健太郎は座っていた場所へと腰掛ける。

「いえ、別に何も」

「そう？ 健太郎もあんなに浮かれちゃって馬鹿な子ね……ま、本当はわたし相手の子知っているんだけどね。そういえば稜介君も小夜子とこないだ映画へ行ってたっけ、楽しかった？」

「ええ」

「小夜子もね、あの日の夜どことなくぼうつとしてにやけてたわよ。こんな親の前で見せつけてくれちゃっていやね、青春だわ」

にまにまと、それこそ健太郎が見たら憤死するのではないかと思われるくらい人の悪い笑みを浮かべて、マヤさんは麦茶を最後まで飲み干した。

「ほんと、こんなに良く出来た格好いい男の子は他にいないものね。ううん、いるわけないか。だって稜介君は人間じゃないものね」

外見はともかく、小夜子とマヤさんの中身は全く似ていない。娘と違って彼女は鋭い観察眼を持っているからだ。

「御両親からの通信はまだ？」

そして心臓を凍らせるような事を平気で口にするのもまた、女王様の特権だった。

「いえ」

「そう、それでそろそろ答えはでたのかしら？」

「……」

背中をゆっくりと伝う汗。思わず両の拳がぎゅっと握られる。それらをマヤさんは目を細めてじっくり見つめていた。

「前にも言ったと思うけど。もう一度ね」

どこまでも声は優しい。そしてそれに騙されてはいけない。

「稜介君。あたしはこんな藤倉家を受け入れてくれた貴方達家族に感謝しているし、貴方の事も本当の子供のように思っているわ。そして母親の立場としては、子供には必ず帰ってきてほしい。たとえばどれだけ年月がかかろうと、絶対に我が子に会いたいわ」

迷いのない声。断罪者の気持ちを味わっていながらも、この真っすぐにそれない心が僕には眩しい。

「でもあの子の親としては違う。あたしの可愛い娘を泣かせたりしたら、貴方をきっと一生許さない」

僕の正体を知っているのは小夜子の母親であるマヤさんしかない。

そもそも藤倉家がこの地球へやってきたとき、僕達はもう随分人間としての生活に慣れていた。だから普通に振る舞う分には僕らの正体なんて怪しむ事はなかっただろうし、実際父も母も自らの正体を明かさなかった。突然やってきた宇宙人を迎えた平凡な一家。そ

う演出するのは決して難しい事ではない。

けれど僕がこの地に残る事になったとき、母は悩んだ末にマヤさんにだけ僕達の秘密を全て話してしまった。1人残す僕の事がどうしても心配だったんだろう。マヤさんもマヤさんで、割合あっさりそれを受け入れていた。ただもしかしたら鋭い彼女のこと、前々からおかしいと思う事があったのかもしれない。

マヤさんは僕の秘密に関してずっと協力体制をとってきてくれた。この姿の事、力の事、それから寿命の事。小夜子が溺れたあの日については、2人で口裏を合わせて嘘をついた。秘密の共有者としては、この上もなく頼もしい。

けれど僕と小夜子の関係が変わってしまった今では別だ。

マヤさんは本当に自分の娘を愛している。いつも天の邪鬼な態度で接しているけど、小夜子が熱を出せば一番に駆け付けるし、どんなにお酒を飲んできても彼女の料理は必ず食べる。幼い頃の写真を大事そうに定期入れに忍ばせている事も知っている。本当はとても優しい人で、そして僕の事も本当の子供のように愛してくれている事も。

母として、2人の子供の板挟みになって苦しい思いをさせている。僕は本当に親不孝者なのかもしれない。

そしてだからこそ考えれば考える程、彼の選択が最善に思えて仕方ない。

「日記、か……」

夕飯を終えて、自室で片桐部長から渡された日記のページをめくる。厚さにして4センチはあるであろうそれは、ずしりと手に重い開くと年季の入った古い紙の匂いと共に、おそらく小学生程度からと思われるいびつな字が並んでいる。

見るともなしにページを開けば、そこには微笑ましいくらい素直

な少年の内面が晒されていた。それが日を追うごとに成長し、やがて片桐部長の話していた最後の日までが綴られている。数分ざっとそれらを眺めやっていると、ふと妙な事に気がついた。

最後の日付が近づくに連れ、どうも紙が黄ばんで水を零したかのように乾いている。指の腹でなぞってみると、固まった繊維質がごわごわと引つ掛かった。おまけにその部分だけ文字が滲んで、どうにも読みづらい。というよりもインクが掠れるように浸みて読めない。

水を零した、と言われればまさにそれだろう。けれどそれは一点が雨粒のように間隔を開けて落ちていて、液体を一面に流してしまった時とはどうも違うような気がする。こんなふうにページを濡らすのは――涙の跡しかない。

ではこれは、彼の涙なんだろうか。最後の日から三日間、彼は日記を書かなかったのか、それともこの滲みの下に何らかの記述があったのだろうか。

「稜介」

そんな事を考えるのに相当没頭していたらしく、僕はすぐ後ろに小夜子が立っていた事に全く気がつかなかった。

「……小夜子？」

制服から部屋着のゆったりした緑のルームパンツに着替えた小夜子は、片手にリンゴの入った籠を抱えて立っていた。

「勝手に入ってごめん。でもインターフォン鳴らしても全然でないし、玄関の鍵は開いてるし、電気はついてるし……倒れてるのかと思った」

咄嗟に日記を閉じて机の上に置く。小夜子はそれを全く気にせず
に、僕の隣のベッドの上に座り込んだ。

「構わないけど珍しいね、僕の家に来るなんて。どうかした？」

「さっきお向かいの片山さん家からリンゴ貰っちゃったの。沢山あるから稜介も食べてよ」

ナイフも一緒に持ってきていたらしく、彼女はその場で赤い果実を一つ手にとった。

「稜介の部屋に来るのは久しぶりよね。小学校以来かも」

しゃりしゃりとリズムカルに赤い皮が剥がれ落ちる。重力に抵抗出来なくなったそれが床に落ちるのを、小夜子は器用に籠で受け止めた。

「相変わらず何も無駄な物がないよね、健太郎の部屋とは大違い」
「基本的に寝て勉強するだけだから。ご飯はそっちで食べてるし」

綺麗に切られたリンゴの欠片を手渡され、僕はそれを口に含んだ。
甘酸っぱい味が口内に広がる。

「あのね、こないだちょっとネットで調べてみたんだ。わたしの星の事」

残りのそれに切り込みを入れながら、小夜子は言った。

「黄色と赤と青のコントラストの綺麗なイーグル星雲。あの光が7000年も前のものなんだと思ったら、つくづく距離の遠さに驚くわ。あそこにわたしの故郷の星があると思ったら、感慨深いものね」

「小夜子は帰りたいて思うの？」

彼女はゆっくりと首を振る。

「全く覚えてない故郷なんて、わたしは帰りたくないよ。家族も友達もここにいるし。っていうかやっぱり自分が宇宙人だなんて未だに思えないんだけど……ああ、でも」

そこで言葉を止めて、彼女は僕を振りかえった。リンゴを切り終えたナイフを床に置いて、身体ごと僕に向き直る。

「もしあの星に大切な人達がいたら。稜介ならどうするの？」

小夜子の声はとても静かで、顔には薄らと笑みが浮かんでいた。そしてそれはとても、ついさっき話をしていた片桐先輩にあまりに似ていて。僕が答えに詰まるのを、彼女はじっと見つめている。時が、いや僕の心が凍るような気がしたのは一瞬だけだったらしい。僕の答えを待たずに、小夜子はすぐにぱっと立ちあがった。

「ごめん、こんな事聞かれても困るよね」

いつもの明るい声が頭上から降ってくる。

「あ、そうそうお母さんが呼んでるんだけど」

リンゴの籠を抱え直しながら、小夜子は言った。

「ビュータが直ったんだって。覚えてる？昔わたし達が遊んで壊したあれよ」

第18話

小夜子は言葉を覚えるのが早かった。あれだけ熱心に聞いてきたのだから当然かもしれないけれど、出会ってから半年もせず不自由なく会話していたと思う。赤ん坊だった健太郎はそもそも現地の言葉が記憶にないので問題ないし、主にビュータを使用していたのはマヤさんと一さんだ。

そしてその2人も数年でかなりのレベルに達してしまったものだから、ビュータの使用機会は年々減少し……僕と小夜子の玩具になった。

「で、これは結局何なの？ 便利な翻訳機器？」

久しぶりに見るそれ、小夜子の掌の上に乗せられた黒く小さな箱は、その蓋を閉じたまま沈黙を守っている。

再び藤倉家のリビングへ集合すると、一番遅く帰ってきたらしい一さんが夕飯を食べていた。普段なら家族揃ってダイニングテーブルで雑談している時間だが、それ以外の面々は少し離れたソファに座っている。マヤさんの視線はビュータに釘づけた。

「このビュータを単一機能モデルと一緒にしないで欲しいわね。これは正式にはマザ・ビュータと言って、宇宙空間へ向けて電波を送受信出来る機械なの」

「マザ？」

「そう。マザって一族の人が考えだしたもので、とにかく大発明だったんだから」

ビュータの外観は指輪のケースにそっくりなのだが、蓋を開くと小さなチップのようなものが2枚、厳重に布に巻かれて保管されて

いる。爪の先程の大きさで、板ガム並みの厚さしかない。

「それって凄いものなの？」

いまいちピンとこないのか、マヤさんの隣に座る小夜子は首を傾げている。健太郎だけは床に転がって携帯をいじっては、そのやりとりをちらちらと眺めていた。

「当たり前じゃない。電波光波っていうものはね、基本的に発生状態のまま波長に微動の変化なく、永遠に宇宙空間に伝播されていくもののよ。もちろん距離に応じて減衰していくけれど、衛星から外宇宙へ流せば、それこそずっと微弱ながらも拡散されるわ。ビュータの凄い所はどんなに弱い電波でも受信解析出来るし、その送信した電波光波速度を調節したり、ある程度なら一定の場所に電波を留まらせたりする事が出来る点よ。つまり――」

「お母さん、わかんないよ。もっと分かりやすく言って」

熱弁を奮つマヤさんを前に、小夜子は頭を抱えている。一さんは食べ終えた食器を流しへ運びながら、そんな2人を見て苦笑していた。

「つまり、これは遠く離れた星へメッセージを伝えられる送信機でもあり、またそれをキャッチする受信機でもあるんだよ。もちろん送受信にはお互いにビュータ機器が必要で、翻訳機能はその副産物みたいなものだね。送信の指定場所は勿論、ビュータに内蔵されている宇宙座標の特定が出来るような範囲に限られるけど」

「ビュータを持っている者同士なら、宇宙を隔てても会話出来るって事？」

「そうよ、つまり私達の星にメッセージを送れるの」

興味が湧かない様子のせいなのか、それとも前科があるせいなのか。指先でチップを掴もうとしていた小夜子から、マヤさんはさととビュータを取り上げた。後者の理由から娘を信用していないように、中身を確認してから一さんのいるテーブルの席に着く。

「あんた不用意に触らないでよ、これが直ったのは奇跡みたいなものなんだから」

これを僕らが壊したのは幼稚園に入っただけで傾いたのだろうか。壊したといっても、小夜子が外へ持ち出して落としてしまったのが真相だ。幼い世界には通訳なんてものは必要なかったので、興味が向いたのは専らにその中身になる。当時は僕も結構それが気になつて、彼女を止めなかった。

そういえばあの時はかなり僕も小夜子もマヤさんに怒られた気がする。チップは精巧なもので、とにかく衝撃に弱かったらしい。

「もう落したりしないのに……それ誰が直してくれたの？」

昔を思い出したのか、ややむくれた小夜子がソファに寝転びながら尋ねた。

「健太郎のまだ、お友達な人よ」

途端床に頭をぶつける鈍い音が響く。携帯をとり落とした健太郎は慌てて立ち上がり、それを拾って母親を睨みつけた。

「母さんっ！ 余計な事言わないでよっ！」

顔を真っ赤にして叫ぶ様子に、さらに意地の悪い笑みを浮かべるマヤさんと、苦笑している一さん。僕も何となく相手が彼にとって

どんな人なのか思い当たり、曖昧な笑みを浮かべて健太郎を見た。

「健太郎のお友達って優秀なのね、こんな宇宙人の作った機械を修理出来るなんて」

「……それで納得するから姉ちゃんは凄いよ」

腕のストレッチを始めた小夜子の隣で、健太郎はがっくりと肩を落としている。こんなに分かりやすい態度をとっているのに、そんなに秘密にしておきたいんだろうか。

けれど、ビュータを修理出来るような人物だったとは。つまりそれは小夜子達と同じか、もしくは限りなく近い種の異星人のはずだ。白いお皿を洗い終えた一さんがテーブルに戻ると、2人は互いに2枚のチップを手にとって嬉しそうに眺めていた。

「でもこれがあれば、救助の連絡が出来るんじゃないの？」

「これはあくまで電波なんだから。いくら速度が調節出来たって、届くまでは何百年何千年それ以上とかかるわよ」

「そんなのほら、よくあるワープとか出来るんでしょ」

健太郎の趣味に影響されたのか、小夜子の口調は確信に満ちている。しかしマヤさんは呆れたように溜息を吐いて首を振った。

「まったく気楽に言ってくれるわね。宇宙船みたいな物質を運ぶワープとは原理の次元が違うのよ。そもそも質量転換の法則は――」

「お母さん、もうその手の話はパス」

相当にうんざりしたのか、小夜子は大きく両腕でばってんを作る。

「専門的話は別として、メッセージか。名前を使うのが久しぶりで緊張するな」

「名前？」

足を反らす彼女の補助をしていると、一さんはマヤさんの肩を揉みながら呟いた。

「ビュータに限らず、外宇宙へのメッセージ送信は、最後に必ず送信者の正式な名前を入れるのよ。これ宇宙通常友好交流条約で結ばれた有名なルールなんだから、覚えておきなさい」

「いや、覚えたところで使わないって。それより正式な名前って？」

「どう考えたって私達のこれは日本名でしょ。あんたの向こうでの名前言ってなかったっけ？わたしはエフィーマヤ、一さんはデース、間を文字って小夜子はエフデス」

指折り数えるマヤさんの後ろで、一さんは首を捻っている。

「それから健太郎は…シロイゴハニー・スウドン・ポムドテール・スイスロール・タコヤーキ…えーとマヤ、あと何だっけ」

「ソーキソーバ・イツカリング・エトセトラ…だったかしら。私も自信ないわ」

一聞では絶対に覚えられないような衝撃的で奇妙な単語が続き、僕も小夜子も一瞬動きが止まった。一拍の間を置いて彼女が口を開く。

「美味しそう、じゃなくて長っ！どうしてわたしがそんなに短くて健太郎は無駄に長い」

「あの子が生まれた頃にあっちで流行した名前なのよ。長いから普段は省略形で呼んでいたけど。覚えきれないからメモしてたはずなのね、あの紙どこへやったかしら」

かの星でも名付けに流行り廃れがあつたのだろうか。それにしても、これは些か同情を禁じ得ない名前かもしれない。

「息子の名前くらい覚えとけよ……」

力無く呟く健太郎を前に、両親は真剣に彼の名前の続きを思い出そうとしていた。それがまた悲哀を誘う。今日は彼の厄日に違いない。

結局この日彼の正しい名前が発覚する事はなく、藤倉家ではにぎやかなまま、向こうの星へ何を送るかの家族会議が開かれていた。僕こそ重大で深刻な悩みを抱える異星人のはずなのに、藤倉家の面々と関わりと何故こうも力が抜けてしまうのだろう。これはこれで大いなる宇宙の謎だ。

それでもふと思う。僕も両親からの救難信号を感知できれば、合図として何らかメッセージを送らなければならない。

彼女を選ぶのか、故郷を選ぶのか。

そのときこそ、全てを決めなければならないのだ。

翌日学校へ登校するや否や、担任から分厚いプリントの山を渡された。たまたま朝練を終えて職員室のそばを通りかかったのが運のつきか、それとも学級委員なんて面倒なものに押しつけられた付与義務なのか。どちらにせよ煩わしい事にはかわりない。ましてテストの採点結果なら尚更だ。

教職員の準備室が主となっている階のためか、廊下に生徒達の姿はほとんどなかった。強い日差しが窓を通り越して、僕の影が前方

へ大きく伸びている。相も変わらず今日も暑い。

「佐川先輩」

無言のまま足を進めていれば、背後から新たな影がゆつくりと現れた。

「重そうですね、持ちましようか」

振り返れば、そこにいたのは見覚えのある少女だった。長い黒髪を二つに結んだ小柄な体格、それに下級生を示す赤いラインの入った上履き。

「ありがとう、えーつと1年生の文坂さんだよね」

確か委員会の集まりで何度か顔を合わせた事があつたはずだ。おぼろげな記憶を手繰り寄せて、彼女の名前を思い出す。

「覚えてて頂けたんですか、嬉しい」

流石に後輩の、それも女の子に力仕事を頼むわけにもいかない。やんわりと断っておくと、彼女は気にした様子もなく僕の隣を歩きだした。

外見は大人しい雰囲気なのだが、この少女の内面はその反対ではないだろうか。物事をはっきり発言するタイプで、芯が強い。

「小夜子の後輩でもあるからね」

「ああ、藤倉先輩。お付き合いされてるんですね」

僕達の関係は秘密にしてはいないが、大っぴらにもしていない。

彼女が知っているのは少し意外だった。

僕の疑問を感じたのか、文坂さんは少しぎこちなく微笑んで顔を上げる。

「こないだ律義に謝罪に来てくれましたから。ま、それはもういいんです。それよりも藤倉先輩、風邪でも引いたんですか？」

「どうして？」

「だって昨日、部活に来てなかったんですよ」

大事な県大前なのに、と続く彼女の言葉に僕は首を傾げた。

部活に参加していない？けれど昨日そんな事は言っていなかったし、僕もいつも通り小夜子は部活帰りだと思っていた。体調が悪いようにも見えなかったし、家族の対応も普段と何ら変わらない。

「佐川先輩」

続く彼女の言葉が僕の思考を中断させる。

「ここにアイスが2つあります。味はバニラと抹茶。先輩はそのどちらも大好きなんですけど、食べられるのは1つだけです」

いきなり飛び出した心理テストのような例えに、僕は眉を顰めた。女子の間で流行っているゲームのようなものだろうか、たまに小夜子も僕にこんな話を持ちかけてくる。

「選んだ片方は勿論食べられます。でも選ばなかったもう片方は溶けて、目の前から消えてしまいます。先輩はもう二度と、その味のアイスを食べられません」

けれど彼女の表情は真剣だった。

「それでも貴方は絶対にいつか選択しなければなりません。さあ目を閉じて、一番に思い浮かぶのはバニラですか、抹茶ですか」

「これは何の話？」

「誰でも迷うときつてありますけど、そんなときはちょっと立ち止まって、自分の心の奥底に聞いてみるのはどうですかって話です」

同じくらい好きな物。比べられない程大切な物。

けれど必ず選ばなくてはならない。それは――

「ちなみに藤倉先輩は両方思い浮かんだって言っていました」

「僕も両方かな」

「でも、選べないわけではないと」

彼女の言葉に氣をとられ、窓の隙間から吹いた風で誰かのテスト用紙がひらりと舞った。

「どついう意味？」

ゆっくりと宙を紙が降ってくる。2枚、3枚と揺れるそれが、僕と彼女の間を遮ってお互いの視線を隠してしまう。そうしてちらりとだけ見えた口元が、僕の問いの答えを紡ぐ。

「女の子は見かけによらないって事です。私も、それに彼女も」

第19話

チーズトーストに目玉焼き、それにトマトサラダとヨーグルト。典型的な朝のメニューが並べられた食卓へ向かうと、健太郎が一人パンを頬張っていた。白いワイシャツの制服姿で、椅子の足元には学生鞆が置いてある。

「おはよう健太郎。休みなのに学校へ行くの？」

朝の6時。平日ならともかく、休日に活動するにはまだ早い時間帯だ。特に寝坊の多い健太郎には。向かいの席に座ると、案の定彼はやや眠そうな顔をして卵の黄身を箸でつまんでいた。

「土曜補習。自由参加だけど、一応」

「他のみんなは？」

「父さんは仕事で、母さんはまだ寝てる。姉ちゃんは多分部活かな、朝起きたらご飯だけ作ってあった」

目の前の朝食は食欲をくすぐる匂いを漂わせているが、既に冷めきっていた。固まってしまったチーズトーストを一切れ齧ると、口の中に塊がごろりと転がる。食べられない事はないが、もう一度温めなおした方が良さそうだ。

僕も部活の自主練習はあるが、それだってまだ時間に余裕がある。朝早くから小夜子は何をしているんだろ。テニス部の朝練がこんなに早いとは思えない。

彼女の愛用しているトースターのスイッチを入れると、健太郎は思い立ったようにテレビのリモコンを掴んだ。

『では続いて朝の占いコーナーだぴょん！』

その途端画面に映っていたのはウサギによく似た妙なキャラクタ
ーだった。全身が真っピンクで、目が異様に大きい。睫毛にはマツ
チ棒が3本は乗るのではないだろうか。ぱつと見は可愛らしい外見
なのだが、無駄にハイテンションな高い声は耳に痛い。が、健太郎
にとっては違うらしい。目をきらきらさせて、テレビを食い入るよ
うに見つめている。

「今日からうさぴーの星座占いが始まるんだ」

僕から見て、これはどう見ても幼児向けのウサギキャラだ。個人
の趣味に口を挟むつもりはないが、健太郎の守備範囲の広さには脱
帽せざるを得ない。

「だってビビンジャーのミカ役の人と声優が同じだからさ、ファン
としてはチェックしないと」

そこにはきつと、彼にしか分からない深い世界があるのだろう。
何も言うまい。テレビの中の謎のウサギは、四角い枠内の中を忙し
く駆けずりまわっては不思議な鳴き声を発している。

『早速今日の一位はクレイジーな獅子座のアナタだぴょん！なん
たって恋愛運が赤丸急上昇、絶好の告白日和になるぴょんよ。今ま
での思いの丈をうざいくらい熱く語って、強引に押して押して一歩
も引かずに突っ込みまくるぴょん。アナタのペースに巻き込めば確
変、フィーバー、ユートピア！おまけにそれきたワールドイズマ
イン、全てはこちらのものだぴょん！恋人がいる方ならお互いの
関係がより深まるよう、馴染みの場所へのお出かけもお勧めだぴょ
ん』

聞き取りがたいが、とてもお子様向けとは思えない内容だ。そしてこのウサギは派手な言葉がお好みらしい。

『そんな獅子座さんのラッキーアイテムはズバリレポート用紙。用途は問わないぴょん、持っているだけでもきつとエキサイティング！ 良い事あるぴょんね！』

「おお、今日は獅子座の時代だな！」

該当者である健太郎は嬉しそうに手を叩いた。

「でも強引にか、メールだけでなく電話もしろって事かな」

「レポート用紙はどうするの？」

「うーん……論文でも書く？」

有難くないアドバイスに悩んでいると、ウサギは次々に下位の星座達の占いを語り出した。段々と順位が下がっていくせいか、次第に口調が辛辣なものに変わってくる。これは本当に誰を対象にした占いなのか。

『そして本日の最下位は……ブルーな蟹座のアナタだぴょん。オーマイガッ！ 今まで隠してきた事が思いも寄らない相手に全部知られて、大切なものを失ってしまいそうぴょん。スキャンダル、アクシデント、これぞ負け犬、人生こんなはずじゃなかった！』

「兄ちゃん、残念だったな」

健太郎が憐みの目を向けてくる。ウサギの微笑みもとても邪悪だ。

『特に注意すべきなのは身近な人だぴょん。アナタの予想を遙に超えた、とんでもない事をしでかしてくれるかもしれないぴょん。それに恋人には一日振りまわされる予感大で、覚悟が必要ぴょん。もしかしたら失恋！？ ハートブレイク、アンビリーバボー、他人の不幸は蜜の味！』

余計なお世話だが、よくもここまで言ってくれるものだ。むしろ感心して見ていると、ウサギは疲れてきたのかおざなりに最後の台詞を口にする。

『そんな蟹座さんのラッキーカラーは水色。同色の小物などを持ち歩いていれば、思わぬ出来事を回避してくれるかもしれないぴょん。ま、最下位なのであくまで気休めだぴょん。君の面倒を見てやる程うさぴーは暇じゃないし、人生つてのは何時だって上手くいかないものさ。そしてそれを楽しめてこそ、人生つてものを語る資格が得られるつてのは名言だね。じゃあばいぴょん』

空々しい助言を残して、ウサギは唐突にテレビから姿を消していった。これから朝の占いはこの失礼極まりないウサギの12通りの判断を仰ぐことになるのだろうか。

「これ持つてく？」

どこまでも占いに左右されやすい健太郎は、水色のハンカチを差し出してきた。

「いや、いいよ。ありがとね」

丁重にお断りしたのは、何も占いを信じていなかったせいだけではない。

ごめん健太郎。いくらなんでも、全面にビビンジャーの描かれたハンカチは遠慮したい。

朝食を終えて自分の家に戻ると、とりあえず溜まっていた洗濯物を片づける事にした。一人暮らし洗濯は週末まとめてやるのがセオリーだと思う。一日では大した事のない量も、一週間分となると結構なものになる。

洗剤と一緒にシャツ類を洗濯機に放り込む。定期的に音を立てて丸いドラムが回り出した。僕以外の人間がいない空間に、乾いた回転音が鳴り響く。

父と母が故郷へ帰って以来、この家はとても静かだった。それでも寂しいなどと思った事は一度もない。常に隣には藤倉家の面々がいてくれたし、何より小夜子がいてくれればそれでよかった。自分でも呆れてしまうけど、僕は本当に彼女が大切らしい。父の忠告を無視したつけがこうして回ってきているというのに、それでも最後の選択を出来ない僕がいる。

悩んで、迷って、苦しんで。何て滑稽なんだろう。この心だけはまさに人間の弱さに限りなく近いというのに。

自室に戻り制服に着替え、鏡に映った自分を見た。滅多にならないインターフォンが鳴ったのはそのときだった。

「おはよう綾介」

「小夜子？」

玄関から顔を出していた彼女は、見慣れたテニス部の白いジャージを着ていた。片手にラケットケースを持っているところからして、

おそらく部活に行っていたのだろう。

「朝一で自主練してきたの。昨日部活休んだから遥がお冠で」

「後輩から聞いたんだけど、昨日どうして休んだの？」

「んー、ちよつと小学校へ行ってたんだ」

「小学校？」

今更何故そんな所へ？

スポーツバッグからペットボトルを取り出して、小夜子はそれを一口飲み込んだ。

「そう、司書の速水さん覚えてる？ あの人のいいおじいちゃん。

まだ現役みたいで元気だったよ、稜介の事も覚えてた」

「それで、何をしに行ったの？」

「目的を聞かれると困るんだけど……えーっと、あれ？ 何か変な音がしない？」

ふと、洗濯機の音に混じってかすかな電子音が聞こえた。水の撥ねる音、布地の折り重なる音、そして合間に少し低めの機械的な細かい音。

これは。

「何の音？」

不思議がる小夜子をおいて、僕は自室のドアへと走り出した。

心臓の音がうるさい。鼓膜を破らんばかりに鼓動が鳴り響き、目の奥がじりじりと痛い。指先が冷たく、裸足の裏には床の感触がない。身体もやたらと重い。足を一歩踏み出す数秒が倍近く感じられて、自分が本当に身体をコントロール出来ているのか、それすらも判断できなかった。自分が今どんな顔をしているかもわからない。

どうして、どうして今なんだ。

いや、もう十分に猶予はあった。それに甘えて、ずるずると彼女の優しさを求めていたのは他ならぬ自分だ。

あと少し、ほんの少し。先延ばしにしていた未来がすぐそこに迫っている。

部屋のドアを勢いよく開けば、電子音はますますその存在感をアピールするかのごとく、ボリウムを上げてきた。

ベッドサイド、枕元のそば。真つ暗な画面を持つはずのそれが、赤い光を放っている。故郷からの救難信号を感知した際のサイン。光るパネルに、それを告げるこの着信音。

全てがあの日、両親が帰ったときと全く同じだった。サイドボードの父と母が僕をじっと見つめている。

『必ず故郷へ帰ってくるんだよ』

『私達は、ずっと貴方を待っているわ』

「稜介」

気がつけば隣には小夜子がいた。冷え切った手を、彼女が両手に握っている。

部屋中に響く音を無視して、小夜子は両親の写真をまっすぐに見ていた。

「おじさまとおばさま。お久しぶりです」

返事などあるわけがない。それでも小夜子はどこか懐かしそうに語りかけて、僕の腕を外へと引っ張った。

「ちょっと息子さんをお借りしていいですか。大丈夫、ほんの少しですから。それにわたしは、貴方達から稜介を取り上げるつもりはありません」

小夜子は僕の顔を見る事はしなかった。腕を捻って背中ごしに僕を引きよせて、そのまま玄関へと歩き出す。

「稜介、今からちょっと付き合つてよ。デートしよう」

あくまで普段通りで、散歩にでも誘うような陽気な声。ともすれば聞き流してしまいそうな程いつも通りの口調。

「断つたりしたら周りの人に言っちゃうからね。稜介は宇宙人なんですって」

第20話

家を出てから、ずっと僕らは無言だった。部活の友人に欠席のメールを送って、道を歩く彼女の後を追う。つかず離れずの距離を保ったまま、小夜子は一度も振り返らない。

何度もこのときを想像していたせいなのだろうか、僕は自分でも意外な程落ち着いていた。朝の眩しい日差しを受けながら、見慣れた通学路を歩く。住宅街の覚えのある景色から、彼女が何処へ向かっているのかがわかった。

数歩先で長いポニーテールが右へ左へと揺れている。振り子のように目を奪われるそれが、くるりと回って小夜子に変わる。

「デートの場所にはあんまりそぐわないんだけどさ」

何度も何度も2人でやってきた河原。僕達の遊び場でもあり、小夜子の正体を告げた場所でもあり、そしてこれから僕の運命が決まる場所だ。

「やっぱり、全部話すにはここがぴったりでしょ？」

確かに、これ以上ない縁がこの河原にはある。

白い砂利の敷き詰められた岸边に辿りつくと、光を反射した水面がゆらゆらと揺れていた。早朝の空気は暑さもそれほどもなく、至って清々しい。僕らのほかに人陰はなく、ときたま遠くで魚の撥ねる水音が聞こえる。小夜子は何をするでもなく辺りを一步一步と歩きまわっては、ぼんやりと周りの景色を見ていた。

「いつから僕の正体に気がついてたの？ 誰かから聞いた？」

「うーんいつかなあ。わたしが自分の正体を知った後だから、最近

と言えは最近だし。でも結構前から疑ってたって言えはそれもそうだし」

ぼつりと独白して、こちらへと顔を向ける。

「経緯を教えてよ」

僕の問いに、小夜子はちょっと困ったような表情を浮かべた。

「一言で表すとね、胡散臭かったの」

「誰が？」

「稜介が」

身も蓋もない一言だ。そんな第六感で僕の正体まで辿りつけるとは思わない。小夜子は再びうーんと唸りながら口を開いた。

「わたしの力って、頭痛と引き換えに都合のよい現象を引き起こしてくれる一見よくわからないものじゃない。要するに自分では制御出来ない、ランダムで、しかも何が起こるかわからない力」

「まあそうだね」

「だからおかしいの。そもそもどうして稜介がわたしの正体を告げるとき、わたしはどうしてクマ吉を空中で停止させる事が出来たのか。だっていつ発現するかわからない力なのに、稜介の話のときに都合良く力を使えたのって変でしょう？」

そう言つて、小夜子は持っていたスポーツバッグから愛用の硬式テニスボールを取り出した。それを僕の目の前で、何の気なしにぽろんと放り投げる。

当然ボールは宙を回転して、あっさりと川面にダイブした。とは言えこの川の水位はないに等しい。小さな波紋が広がっただけで、

ボールは流される事なく反対側の岸へと転がった。

「だからこれはさ、稜介が何らかの力でやってくれたと思うんだよね」

「それだけ？ ちょっと無理のあるこじつけじゃないか」

「そうね。だから小学校へ行ってきたんだ」

濡れたボールを回収して、小夜子は再びバッグをあさり始めた。そして手元に現れたのは小さなメモ帳。

「覚えてるかな？ 昔稜介っていつも図書館に入り浸っていたじゃない。司書の人と話して、特別に教員用の閲覧図書のある部屋にも入室してた。所謂持ち出し不可の本よね。わたしが気になって何の本を読んでいるのか聞いても、絶対教えてくれなかった」

小学校。図書室。随分前の事のように感じるが、その言葉には覚えがあった。確かに頻繁に通ってはいたからだ。

「それがどうしたの」

「えーと閲覧のみの専門書は『相対性理論』『生命工学の神秘』『基礎宇宙概論』『地球外生命体への探求』『ビッグバン理論』、それに一般図書からは『宇宙人の秘密』『サイエンス・コスモ』『スペースシャトルの構造』『宇宙の彼方へ』、ついでにリクエスト書籍で『生命の起源と宇宙』『未知との遭遇』『科学技術の発展とこれから』、などなど他多数」

のんびりと告げる小夜子の口調に一瞬耳を疑った。彼女の口から流れ出たのは、かつて僕が読み、そして調べてきた本の数々。

「……どうして」

「大変だったのよ、貸出カードを全部調べるのは。けどこんなマイナーな本は稜介以外に未だに借りている人がいないから、ばっちり名前が残ってた。専門書は速水さんの記憶に残っていたラインナップと、稜介からのリクエスト用紙で確認が出来たもの。こんな本を読む小学生は他にいないから、珍しくて覚えててくれたんだって」

そう言うって僕に手渡されたメモ帳には、先程の書籍の名前がずらりと書き込まれていた。

「貸出を電子カードで管理している中学高校は無理だったけど、小学校はまだ手作業で管理していたから十分調べられたよ」

貸出カード。そういえばそんなものを昔は使っていた気がする。

だから小夜子はわざわざ管理の甘い小学校へ出向いたのか。

正直これには驚いた。彼女がこんな行動に出るとは夢にも思っていなかったからだ。

「どうしてこんな本を読んだの？」

当然の質問。小夜子の表情は穏やかだ。

「興味があっただけだよ」

「じゃあわたしに教えてくれなかったのは？」

「たまたまじゃない」

「嘘」

けれどその声は確信に満ちている。

「稜介はね、都合の悪い事はわたしの耳に入れないようにしてるんだ。だから片桐部長の件だって絶対にはぐらかして言わなかったで

しょ？それにわたしにはね、稜介が昔ここで溺れたわたしを助けてくれたっていう記憶もあるのよ。これも稜介とお母さんに否定にされたけど」

覚悟はしていた。もう誤魔化しはきかないんだろうなと。そして何より、僕の秘密を知る2人の名前が小夜子から出てきたのだ。

「どこまで2人に聞いたの？」

「先に2人の名誉のために誓っておくけど、わたしから聞いたんだからね。2人とも、自分からは絶対話さなかったよ」

彼女達を責める気にはなれないし、僕にはその資格もない。いつかは言わなければならなかった。そしてそれから逃げていたのは他ならぬ自分自身。

「全部聞いた。だから寿命の事もね、故郷へ帰る事も知ってるよ」

こうして全ての代償が今やってきたのだ。大切な女の子に、何もかも知られて。

「ねえ稜介、結局自分はどうしたいの？ おじさま達の所へ帰りたいの？ それともわたしのそばにいてくれるの？」

小夜子はもう全てを決めるつもりでいるのだろう。本題を突き付けられて、僕は目を閉じて息を吐く。

脳裏に浮かぶのは、いつだって小夜子の顔だ。こんなに毎日隣にいたのだ。笑って、泣いて、怒って、出会ったときから彼女の全てを知っている。

全てを心のままに。煩わしい問題を捨て置いて、両親を裏切って、ほんのひと時の幸せのために君を選べるものならば。

「小夜子を」

選びたい。

「そっか、じゃあこのパネル……通信機は邪魔だよな」

気がつけば小夜子は赤く光ったままのパネルを手にとっていた。既に音は鳴りやんでいるが、光は急かすように点滅を繰り返している。

「捨てちゃおっか。そうすれば少なくともこの選択で悩む必要はないんだよ。わたしが、間違つて川に流しちゃうの。きつと機械なんだから水には弱いでしょ。だから稜介は仕方なく両親との連絡がとれなくなつて帰れない」

一瞬彼女が何を言っているのかわからなかった。そしてその刹那、小夜子の腕が動く。

瞬きの合間のはずなのに、ゆっくり、ゆっくりと。スローモーションのように彼女の手からパネルが放れる。宙を舞うように下降して、四角い身体がくるくると回っていた。ぼんやり、赤い風車のようだと思う。何かを訴えかけるかのように光るその軌跡。

——これで本当にいいんだろうか？

川面に落ちる寸前で、僕の心に走る感情。間に合うわけがないのに伸ばされた腕。安堵の裏の矛盾する心と、胸を締め付けるどうしようもない後悔。

そして掴めなかったはずなのに、水面の上でぴたりと停止したそれ。

「ほらね、捨てられない」

背後から小夜子の声がする。振り返ってみれば、頭を押さえながら彼女は微笑んでいた。

「帰りたいんでしょ、稜介」

「一か八かだったんだけど、よかったよかった」

痛む頭をさすって、小夜子は素早くパネルを片手で宙から拾い上げた。

「さすが奇跡を呼ぶ力ね。きっとこのためにわたしの力って目覚めたのよ」

満足げに頷いて、僕の両手にそれを押しつける。冷たいパネルのボディが、汗をかいていた腕には心地よい。

小夜子はその場に座り込んで、岸辺で茫然としている僕を見ていた。白い腕が僕を手招く。

「選べないんだよね。わたしも稜介のおじさまもおばさまも、どっちも大切に。だって比べられるようなものじゃないから。わたしだって稜介の立場なら選べない」

隣に腰掛けると、右肩に小夜子が頭を乗せてきた。唐突に家を出

てきてしまったので、何も頭を冷やせるようなものを持っていない。仕方なく片手で髪を撫でると、小夜子は僕の腕を掴んだ。そのまま頭のとっぺんにその腕を置く。

「だからごめんね、ずっと一人で悩ませて」

「僕も、嘘をついていてごめん」

臆病で、どうしようもなく身勝手に、でも君が大切だった。

「いいよ。もう十分苦しんだでしょ？ それより知りたい事が2つあるの」

どんなに重大な事でも、さらりと受け入れて流してしまえるのは小夜子の強さだ。昔から決して変わらない。

ああ、だからこんなに惹かれてしまったんだろうか。取り返しのつかないくらいに。

「1つめは稜介の力。一体何が出来るの？」

「健太郎の好きなアニメの主人公並、って言えばわかる？」

けれど人間として生活していく上で、極力そんな力は使わない。力については最後まで曖昧なままで終わらせたかった。実際僕達は念じるだけで色んな現象を引き起こせるらしいけれど、そんな力を使ったのは溺れる小夜子を助けたときと、彼女の説得のためにクマ吉を空中で止めた事くらいだ。両親からそれとなく聞いていただけなので、だから正直詳しく聞かれても答えようがない。

「わたしも別に知りたいわけじゃないの。言いたくないなら聞かない。でもただちょっと、そんな事が出来るなら後で一つ協力して欲しい事はあるかな」

「協力？」

「うん、お世話になった人がいるからね。あとはこのパネル。通信ってどれくらいでそっちの星まで届くの？」

小夜子は僕の片手にあるパネルを指でつついた。先程の扱いに抗議するかのよう、パネルは一層激しく点滅している。

「君達の機械よりさらにずっと早いよ。一度場所が特定出来たところなら、ほとんど時間差はないんじゃないかな。この通信を許可すれば、じきにこの太陽系を巡回している救助船がやってきて、後はゆっくり故郷まで帰るんだ」

実際両親の帰還の際はパネルが光って三日後には救助船がやってきた。今この通信を承諾すれば、僕もそれくらいには地球を旅立たなくてはならないのだ。

「じゃあおじさま達と連絡自体はすぐにとれるの？」

「いや、これはあくまでメインは巡視船と繋がっているから。両親はもう帰還しているだろうし、僕の星まで通信を広げたら、そりゃ届くには届くだろうけど少し時間はかかるよ」

ややこしい話には違いない。小夜子はそうと呟いて、頭の上にある僕の腕を掴んだ。

「ねえ、よく考えて。稜介にはこれから無限に等しい時間があるんだよ。わたしと一緒にいられる時間なんて、長い人生のほんの一瞬かもしれない」

触れたところから熱が生まれる。彼女の心臓の鼓動が、血液の流れが、穏やかな呼吸の音が、お互いを通して全身に感じられる。

「今はさ、こうして隣にいるから実感わかないのかもしれないけど。地球で育ったから、頭の中も妙なヒューマニズムに毒されて感覚が鈍っているのかもよ。本来なら稜介達は永遠なんて概念すら考えない生き物かもしれないでしょ？ だから今の感情は一時の気の迷い、若さゆえの過ち、若気の至り」

「小夜子はたまに残酷な事を言うね」

「うん、わたしもそう思う」

「じゃあ僕も言っておこうか」

この温もりを離しがたくて、僕は彼女の両肩を後ろから抱きしめた。

「本当は選べないわけじゃないんだ。あのパネルが光ったとき、真っ先に思い浮かんだのは小夜子の顔だった」

その身体のアマリの小ささに、少し泣いてしまいそうな気分になる。

「けど両親を裏切って君を選ぶ僕を、小夜子は許してくれた？何より家族を大切にしている小夜子が、そんな事をする僕を受け入れてくれた？」

そのとき、小夜子は意外そうな顔をして僕を振り返った。見開かれた瞳が少しだけ動揺に震えている。それから数秒視線を逸らして、観念したかのように溜息を吐く。

「わたし達、お互い分かりあい過ぎてるね」

そう、僕達の距離は近い。お互いが何を考えていたのか、こうし

てわかってしまう程に。

そつと腕を解かれて、小夜子は立ち上がった。そしてそのまま川の端まで歩いていき、ジャージの袖をまくってその場にしゃがみ込む。

暫くがしゃがしゃと水面を叩く音がしたかと思うと、不意に小夜子が再び僕を手招いた。その右腕に握られているのは、小さな川底の石。

「じゃーん！ 発見しちゃった。水色の石」

僕の掌の上に乗せられたそれは、確かに青空をそのまま閉じ込めたかのような澄んだ色をしていた。形は丸っこくて、親指の爪程の大きさしかない。

「昔2人で探しにきたの、覚えてる？ 持ち主のお願い事を一回だけ叶えてくれるんだって」

「あつたね、そんな事」

あの時は何度探しても見つからなかった。そして今も昔も、僕の願いは変わらない。

「ミカちゃんみたいに延命薬なんて開発出来ないけどさ」

こんな子供染みたものを信じてはいなかった。けれど目の前の小夜子があまりに嬉しそうに笑っているから。

僕は頼りない小さな石ころを固く握りしめた。

「わたしの考え。聞いてくれる？」

気がつけば既に日は高く、セミの声が揚々と鳴り響いていた。早朝の空気から一変して辺りはじりじりと蒸し暑く、天気だけは絶好の晴天だ。

河原を後に住宅街を歩いていると、周囲の家庭が一日の生活を始めるかのごとく活気づいていた。朝食の匂いに、子供の声、すれ違う近所の人々。多くの人にとってのありふれた日常は、こんなにすぐそばにある。ジョギングに精を出す青年を見送った後、僕は小夜子の腕をとった。

「手、繋ごうか」

返事を待たずに手を握ると、小夜子はそつと指を絡めてきた。

「稜介、真夏なのに冷たいよ」

「小夜子は温かいね」

汗で冷たくなった指先を、彼女のそれが優しく包む。

「温めてあげようか」

そう言つて、彼女は僕の顔に唇を寄せてきた。赤く色づいた柔らかな口元が、ふわりと頬と触れあふ。綿に撫でられたかのようなほのかな感触。

「どう？」

「どつって」

一瞬のかすめるようなキス。小夜子は少しか赤い顔をしていた。

「ドキドキして身体も温まると思ったんだけどな。わたしは緊張で冷たくなっちゃったよ」

「そっか、じゃあ今度は僕の番だね」

返答に開きかけた彼女の口を塞ぐ。頬に、額に、鼻先に。それからもう一度唇に。

軽く啄ばむ様な口づけで、最後にほんの少しだけ深く、優しい吐息を込めて言葉を奪う。

「……どうして何回もするの」

「慰謝料。初めては僕からって決めてたのに、小夜子がフライングするから悪いんだよ」

僕がそう答えると、てっきりもっと真っ赤になってあたふたするだろうと思っていたのに、小夜子は神妙に頷いただけだった。

「もっと動揺するかと思ってたのに」

「心のメモ帳をレポート用紙に変えておいたから、心構えが違うの。それにね」

繋がれた手に力を込めて、彼女はとびきりの眩しい笑顔で僕を見る。

「わたしだって一番を譲るつもりなんてなかったよ」

いつだって君に許されて、救われてきたんだ。

たとえばこの先どんな未来が待っていても、君を好きになってよか

っ
たと思っ
つよ。

閑話 Fへの純情大作戦

最近、姉の様子がおかしい。

いや、正しくはより奇行に走るようになったとも言っべきか。

もともと姉ちゃんとは妙にずれた言動をする人だった。例えるなら頭のネジが多かったり少なかったりするんじゃないかと、その締め具合自体が緩いと言うか。常人の感性和数テンポばかりの溝があると言うか。速球を投げればホームランとファールのギリギリの境界線で打ち返されると言うか。

そもそも長年自分が宇宙人だったという事実にも気がつかなかった姉のこと。多少不審な行動をしても最早誰も気に留めたりはしない。けれど連日謎めいた曖昧なアクションをとられては、流石に俺だつて訝しく思ったりする。

まず姉ちゃんは口数が減った。今までは家族が誰か一人でもいれば居間でくだらない話をしていたのに、ここところよく一人で自分の部屋に籠っている。何をしてるのかと扉からこっそり覗くと、大抵ベッドの上でじつと丸くなっている後ろ姿が見えた。電気もつけずに暗い部屋で小さく見える無言の背中、それはかなり不気味だ。かといって元気がないわけではない。いつも通りご飯は作ってくれるし、話しかければ誰とでも普通に会話はする。だから最初は兄ちゃんと喧嘩でもしたのかとも思ってたけど、それも違う。いや、むしろ兄ちゃんが家に来たときこそ、今まで通りの姉だった。呑気でマイペースで、真面目にばける。

だからまあ、思春期の多感な時期特有の訳もないセンチメンタルっていうものなんだと俺は思ってた。確かに変は変だけど、日常生活に支障はないし。

けれどそんな事を思っていたある日、遂に俺はそれを目撃した。図書館に寄って帰りが遅くなったその日、たまたま家には姉しかいなかったようで、だから姉ちゃんは一人リビングのソファで俺に背

中を向けて座っていたのだ。

なんだなんだ、お籠りタイムは自室から居間にお引越しかよ。そう思つて声を掛けると、姉ちゃんはガバツと勢い良く顔を上げた。そこには、真つ赤な目をして泣いてる姉ちゃんがいた。制服の袖なんかびしょ濡れで、スカートまで涙の染みがくっついていて。革張りのソファも丸い雫の跡が点々としていて、更には数度拭った形跡も。

はつきり言つて驚くよりも怖かった。姉が泣いている事がじゃない。声一つ立てず、唇を噛んで、肩すら震わせないよう両腕で押さえこんでいる姿は、この能天気な姉ちゃんには異様な事なのだ。泣きたければわんわん子供のように声を上げればいいし、家の中で、まして一人でいる時にこんな何かに耐えるような、我慢するかのよう異常な泣き方はしなくていいはずだ。事実これまで姉ちゃんはそうやって泣いてきた事なんて山程ある。今更家族の誰が気にするだろう。

無言で俺を見返す姉を見て、俺はやっと気がついた。これは日ごと自室から見てきたあの後ろ姿にそっくりで、つまり姉は毎日自分の涙を家族から隠していたのだ。

俺に見られた事がよっぽど気まずかったのか、姉ちゃんの顔は無表情のまま口だけが動く。

「健太郎、今度綾乃ちゃんと映画に行くんでしよう？」

声は意外な程しつかりしていて、震えてはいなかった。

「な、何でそれを……」

「良い事教えてあげる。綾乃ちゃんはドキドキして二転三転するよ。うな意外性のあるロマンス物が好きよ。健太郎との映画も密かにそれを期待してるはず。これとおき情報ね、だから今見たことは誰にも言わないで」

どうして、と聞き返す事は出来なかった。姉の気迫に押されたのも半分事実だけど、何せ目下俺の最大の弱みをこんな形で握られている事を知ってしまったのだ。そうして姉ちゃんは鼻を嚙りながらさっさと自室へ戻ってしまい、それ以降俺の前で涙を見せる事は決してなかった。

そしてそんな姉の奇妙な振る舞いが更にエスカレートしたのは、母さん達がビュータの説明をしていたあの夜からだ。

このときから姉ちゃんが陰で泣くような事はなくなった。少なくとも俺は知らない。けど代わりに家中の押入れを漁り出したのだ。しかも俺の部屋のクローゼットまで搜索されて、ひどい迷惑だ。何でも中学校まで使っていた絵具セットを探していたらしい。しかもようやく発掘したそれは色が足りないらしく、結局俺が学校から青と白の自分の絵具を持って帰ってくるはめになった。芸術にでも目覚めたのかと疑っていたら、次はやたらと外出を繰り返す。姉ちゃんが何処へ行こうと勝手だけど、一度川で転んだとかで物凄く汚れて帰ってきたのには参った。姉ちゃん、何歳だと思ってるんだよ。

とはいえ一応は姉だから、やっぱり俺だってこれらの変人行為には心を痛めていたりする。で、誰かに相談なんてしてみようとかも思ってしまうわけで。

俺と姉ちゃんを繋ぐ知り合い、しかもこの件に関して話が出来るような人物。それはつまり先輩しか思い当たらない。

おっとこれは別に、先輩に電話する口実ってわけじゃあないんだ。口元がにやけて締りが無いのは、嬉しいとかラッキーとか役得とかそんな不純な心の表れじゃあない。番号なんてとつくに暗記していたのにプッシュした事もないダイヤルへ指を滑らせて、派手なりズムで踊る心臓を宥めながらベッドに腰掛ける。

夜の12時を前にして、自分の部屋で携帯片手に頬を緩めている

俺。多分姉に劣らず結構気味の悪い雰囲気醸し出しているかもしれない。頭の片隅に残っていた冷静な部分でそう判断は出来たけど、大多数の興奮がそれに打ち勝った。

緊張と期待の動悸と共に、3回目のコールで待望の人物の声がする。

『はい、文坂です』

「も、もしもし。先輩ですか？ええーと健太郎、いや二ースですけど」

『あら二ース、どうしたの電話なんて。珍しいじゃない』

「ええとその、ちょっとご相談したい事が……」

先輩の声が耳元で。遠くにいながらこんな間近でこの人と会話出来るなんて、文明の利器とは素晴らしい。

『もしかして藤倉先輩の件？』

「知ってるんですか？」

『まあね。ああ、今日決着つけたんだ』

先輩は、いつもこうして俺の言いたい事をさらっと先回りしてしまふ。

「決着？」

『そこはいいから。で、様子はどうなの？』

もしかしたら風呂上がりなんだろうが、回線越しの息遣いがとても艶っぽい。その声に誘導されるように、俺は今日一日の姉の行動を思い出してみる。

今日、姉ちゃんと兄ちゃんは朝からデートに出かけた。そういえば俺と姉ちゃんは誕生日が同じだから、うさピー占いによれば恋愛

運は絶好調だったはずだ。けど昼過ぎに戻ってきたときの2人は、いつもと空気が違っていた。

ピリピリしてるわけじゃないんだけど、少し顔が強張っていて終始無言。なのに昼飯を食べ終わった後も一緒にいるんだよね。いつもなら用事がなければ兄ちゃんは隣の家に戻るのに、結局この日は2人ともずつと寄り添って居間にいた。分厚い本みたいなのを読んでいたけど、あれは何だったんだろう。父さんも母さんも何も言わなかったけど、絶対何かがあったんだ。

俺が思うにこの2人って、昔からどこか他人を寄せ付けない、それこそ悪く言えば排他的な世界を持っている気がする。お互いしか見えてない、けれどかといって熱烈に愛を語る感じでもない。それはもつと、精神的な、静かで深い所で繋がっているとでも言うべきなのかもしれない。あんまりこの関係に上手い表現が見当たらないんだけど、これは良いとか悪いとかの次元でもないんだろうな。

だけど兄ちゃんの目が赤かったのは……うん、見なかった事にしよう。男には色々あるんだ。

『そっか、結局そういう結論にしたのね』

そんな回想を掻い摘んで話すと、先輩は意味ありげに溜息を吐いていた。

「結論？」

『ううん、私達には関係のない話よ。ね、それよりビュータはきちんと動いたかしら？』

「はい、ばっちりです。母さんから先輩によろしくって」

『了解、マヤさんにもね』

電話の奥で笑う気配がして、俺はふと前々から思っていた疑問を口にした。

「先輩、どうして俺の母親と知り合いなんですか？それにそもそもビュータの修理が出来るなんて、先輩って一体何者なんですか」

『君と同じ宇宙人だって』

「ならその本名を教えて下さいよ。俺だけあんな変なのを母親から聞かされていたなんて理不尽だ」

『それは秘密、と言いたいたいところだけど。そうね、今度のデートのときにでも教えてあげるわ』

俺の耳をくすぐるように再び声が揺れた。メールだけでは絶対に感じられないこの実感。

ああ、勇気を出して電話して本当によかった。でも既に日付が変わってしまったから、紳士な俺としてはそろそろ別れを惜しまなくてはならない。

けれどその前に一番大切な事を確認しておかなくては。

「ところで先輩、その映画なんですけど」

『ああ、次の日曜ね。何を観ようか』

「実はもう候補を決めてありまして」

手に汗を握るような大冒険。悪の組織ビザポテロールからの執拗なる襲撃に苦戦するハロルドと、暗躍する新キャラクター。そしてまさかの古参人物の裏切り。更にはミカの昔の男出現により事態は何度も急展開、ラストは衝撃の秘密が明かされる——深みのあるストーリーにドキドキして、ハロルドとミカのロマンス要素も盛りだくさん。

「劇場版宇宙人戦隊ビビンジャー・希望の星はどうでしょう」

『…………』

ガッ
チャ
ン。
ツー
……
ツー
……
……

閑話 Sの告白

白崎君は、いつも遠くを見ている人だった。

勉強が出来て運動神経抜群で、異性からは大人気。穏やかで優しく、周囲の人からの信頼も厚い。整った顔立ちで微笑まれたりした日には、クラス中の女の子達の噂は彼の話題。誰からも一目置かれる完璧人間、そしてわたしの幼馴染。

だけど、昔から感じてた。

ずっと何かを隠してる。

だからいつだって、欲しい言葉は一つもくれなかった。

「美奈子、テニス部に入ってたんだって？」

「そうよ、白崎君はどうせ陸上なんでしょ」

高校に入学してすぐ、彼は運動部の先輩や顧問の先生から熱い勧誘を受けていた。小学校の頃から短距離を続けていて、中学校でもたくさんの大会に優勝していたからだと思う。

わたしと言えば、正直身体を動かすのが得意な方ではなかった。

でも中学からやり始めたテニスはそれなりに楽しいし、他に希望するような部活もない。

「前にテレビで試合の中継をしていたフェデラーが素敵なの。あの人がみたいになんてなくて」

「その前はモリス・グリーンが好きって言っていたじゃないか」

そういえば、もっと小さい頃はそんな陸上選手が好きだった気がする。2人で見たオリンピックはあまりにも懐かしくて、同時にそれを覚えていた彼には驚きだった。

休み時間の喧騒の中、白崎君は何かを続けて言いたそうにわたしを見つめている。けれど背後から部活の先輩に名前を呼ばれ、それ以上この話題が口にされる事はなかった。

「別にいいけどさ、練習頑張ってね。僕はインターハイを目指すよ」

そう言っただけで教室の扉から消えていく彼の後ろ姿を、わたしは黙って見送った。

貴方が隣でそうやって頑張っているから、自分も何かやらなくちゃ。

本当はそう思ってテニスを始めたのに、結局彼はそれを知らない。言いそびれたわたしが悪いのか、それともあんなに突然に消えた彼がいけないのか。

今となってはもう、どうにもならない事だけれど。

テニス部はあまり実績のない部で、コートも小さく整備もそれなり。部員もそう多くはなかったので、わたしの期待は早くも打ち碎かれた。彼に負けなくらい練習に励み、自慢出来るような成績を残しておきたかったのに。

「ね、片桐さん。白崎君と知り合いなんでしょ？」

「そうだけど」

フェンス越しのグラウンドは陸上部の姿がよく見える。お目当ての彼を見つけた部員達は、大抵ラケットを下げて隅でボール拾いを始める。勿論口実とカモフラージュのために。

その日も部員の一人がわたしに話しかけてきたのは、つまりそういった要件だった。

「紹介は？」

「無理。幼馴染、それ以上でも以下でもないの」

白崎君に関するわたしへの干渉は、かなり頻繁にあった。その度にわたしはお決まりの台詞でライバル達を牽制して、自分の言葉の重みに自嘲する。

確かにわたし達は仲が良い幼馴染。そしてその関係性が崩れた事は一度もない。

ただ一緒にいる時間だけは長かったから、もしかしたら周囲の人にはそれこそ親密な間柄に見えていたのかもしれない。けれど彼は昔から、何か言い表しがたい「線引き」のようなものを持っていた。彼が決めた、人との一定の距離。優しげな外見とは裏腹に、本心を他人に見せるような事はほとんどしない。これだけ近くににいるわたしでさえ、白崎君の本音を聞いた事がなかったのだから。

きつと何かを隠している、だからそう思った。

なので帰宅して我が家で寛いでいた彼が、わたしの顔を見てほんやりと口を開いたときはとても驚いた。

「美奈子ってショートが似合う気がする」

「何、いきなり」

白崎君はわたしの長い髪を一筋そつと掴む。

「いや、前に浴衣姿を見たときも思ってたんだけど……うん、髪を切るか上げるかしたときの方が、僕は好きかも」

彼にとってそれは、本当に何気ない呟きだったのかもしれない。けれど丁度夏だったし、意中の人からの思いも寄らない言葉だったし。

長かった髪をばっさり耳の下まで切ってしまうと、まずお父さんとお母さんは相当に驚いていた。別に好きでロングにしていたわけでもなから、わたし自身に未練はない。弟は意外といけると太鼓判を押してくれた。だからほんの少し自信をつけてみたけれど、翌日会った白崎君は何も言ってくれない。私を見て目を丸くして、さっと視線を逸らしてしまう。

「おかしい？」

「いや、びつくりしただけ」

穏やかな微笑みで首を振る。何かを誤魔化すときの彼の癖。

よく似合うだとか、素敵だとか。美辞麗句を求めていたわけじゃない。何か一言、彼の言葉通りに髪を切ったわたしをどう思うか、それだけが知りたかった。

なのに白崎君はいつも決定的な言葉をくれない。曖昧な優しさで発言を濁して、自分の心情は閉ざしてしまう。

今でもずっと、わたしの髪は短いまま。

少しでも伸びてきたら、それこそ神経質なくらい定期的に美容室へ足を運ぶ。

だってそうしておかないと、時間はあっさりと肩に届いてしまうから。

上手くいかない関係の、唯一の拠り所はテニスだった。

人よりも劣っている自覚があった分、練習には真剣に取り組んだ。毎日毎日遅くまで一人残ってはコート隅の隅で壁打ちを続けて、泥だらけになって帰宅する。疲れた身体は夢も見ないでぐったりと眠れるし、その間だけは白崎君の事を考えずに済んだ。けれどそんな日々を過ごしていたら、いつしか彼は渋い顔をするようになっていた。

「あんまり遅くならないで。それにあそこは工事中でしょ、夜は危ない」

コートの傍で道路整備工事が始まったのは、地区大会の一カ月前の事。何でも古くなってきた学校の外周りの道路と歩道を補強するらしく、連日トラックが忙しく往来している。

「別に平気よ、夜は作業していないし」

出場が決まっていたわたしは焦っていた。1年生は自主的に残らなければコートを使えないのだ。

彼の忠告なんて全く頭に入らず、わたしはそれから毎日夜まで練習を続けていた。部活に真剣に取り組む姿勢は顧問や先輩達に評価されたし、何より時間外のコートの使用許可まで取り付ける事が出来た。よって部活の後だけでは飽き足らず、わたしは休日まで学校へ出かけるようになっていた。

唐突な別れは大会まであと六日、最後の日曜日にやってきた。

午前中の部活動が終わると部員達はみんな解散してしまっただけ、例によってわたしは蒸し暑い中一人ラケットを奮っていた。夕刻に

なるとグラウンドの人陰もほとんどなく、校内はとても静かだったのをよく覚えている。ただその日はとても風が強かった。生温い風が時折頬を掠めては、ボールのコントロールを奪う。

今にして思えば、もっと注意深く行動していればよかったのだ。

ふとした瞬間に流されて零れてしまったボール。それはフェンスを越え、工事作業途中の道路の端まで転がった。

騒音の関係で休日の工事は行われていない。だから大した警戒もせず、わたしはコートを離れ、学校の外へと飛び出した。ボールは二車線道路の反対側のガードレールの下に隠れていて、道を渡って手を伸ばせばすぐに拾える。

けれどその端には、大きな鉄製のパイプのような物を数十本積載されたトラックが何台か放置されていた。ロープなどで固定されておらず、少しでも風が吹けば崩れ落ちてきそうな程の量。

再び強い風が吹いたとき、わたしは不気味に擦れる鉄の音を聞いた。そうして顔を上げて、ようやく自分の身に迫っていた危険に気がつく。

「美奈子っ！」

突然彼の声がして、視界は黒く巨大な塊に覆われる。

全身に待ち受けていたような痛みは一切襲ってこなかった。その代わりに激しく心臓が鳴り響き、何かとても大きくて温かいものに身体を包まれる。非常事態に緊張しているはずなのに、五感は何どく鈍い。

何が起こったのかはよくわからない。ただ熱い指先に目を隠されて、事態を確認する事が適わない。

耳元で優しく響く彼の声。思わず伸ばした腕は、何も掴んでくれなかった。

「最後に君を助ける事が出来てよかった」

それが、わたしの聞いた彼の最後の言葉。
ねえ、あまりに。あまりに呆気なさすぎるでしょう？

わたしに欲しい言葉をくれなかった白崎君。

本当の事を言えば、好きになった時点でわたしは一種の諦めを感じていたのだと思う。

だって彼はわたしを見ていない。何にもわたしに話してくれないの。

彼が姿を消したのはその翌日。父親の仕事の都合で急な引越しになったのだと担任は告げていた。

友人は勿論の事、わたしの家族もみな驚いた。どうしてこんなに突然、それも何の挨拶もせずに。わたしはぼんやりと、周囲の人たちの戸惑いを耳に黙っていた。

ただ、祖父だけは違った。縁側でお茶を飲みながら、茫然としているわたしに諭すように呟く。

「もともと住む世界が違う人達だったんだよ。この星で暮らすのに、僕ら程適応出来なかったのかもしれない」

「……どういう事？」

祖父は淡々と語り出した。

彼は遠い星から地球に降り立った異星人で、わたし達のような人間に近い生き物ではなかった。それに特殊な力を持っていて、命の時間もずっとずっと長く続く。故郷へ帰る方法を探し求め、そして

発見した。

嘘でしょ、冗談でしょ、もしくはそう、これは夢なんでしょう？

「美奈子にこれを渡して欲しいと頼まれたよ」

けれど全ては現実で、そうしてわたしの手元に残ったのはあの日記だけ。あの日から毎日、何度も何度も読み返した分厚い冊子。そこにわたしの求めていた答えがあるのなら、どれだけの慰めになった事か。

貴方の本音を知りたかった。

わたしの事が大切だったと。一緒にいて楽しかったと。そんな抽象的な概念はいらないの。

たった一言。

ねえ白崎君、わたしをどう思ってたの？

わたしはこんなにも、貴方が好きだったのよ。

「片桐部長」

ふと物思いに耽っていた思考を持ち上げた。眼前には難解な数式の書かれた参考書が開かれている。

自分の席で開いていたそれは、先程からずっと同じページのままだった。一応受験生だったという事実を思い起こして、わたしの名を呼ぶ後輩へ顔を向ける。

「藤倉さん？」

3年生の教室へ下級生が顔を出す事はあまりない。特に受験特有の空気に包まれている教室は、休み時間といえどそう騒がしくもなかった。現にわたしと同じように机に向かっているクラスメイトも数人いる。

そんな中、彼女は廊下よりのわたしの席まで歩いてやってきた。その手に抱えているのは、見覚えのあり過ぎるあの日記。

「勉強中にすみません。これ、お返ししますね」

佐川君に渡したはずの日記が藤倉さんから却ってくる。それが何故なのかと疑問を抱く事はなかった。彼女もまた、数年前のわたしと同じ立場にいるのだ。

数日前、部活帰りに彼女から佐川君の話をされたときは正直反応に困った。あまりに真剣だったものだから、結局何もかも話してしまったけれど。

きつとこの子達は、2人で話し合って望む未来を決めたんだろう。わたし達とよく似ていると、初めはそう感じたのに、今ではそう思わない。

「ねえ藤倉さん。彼に好きだって伝えた事はある？」

不意に口から出た言葉に、藤倉さんは首を傾げた後頷いた。

「ありますよ」

「そう、付き合ってるんだから当然よね」

やっぱりわたし達とは違う。

彼はわたしに何も言わなかった。そしてわたしも、彼に自分の気持ち伝える事はなかった。

もうすっかりお馴染みの自己嫌悪に苛まれていると、藤倉さんは小さな白い紙を差し出してきた。

「これ、家に帰ったら読んで下さい。稜介からのプレゼントです」

丁寧に封筒に入ったそれは、かつてわたしが佐川君に渡したものに
よく似ていた。

「部長、サイコメトリーって知ってます？物に込められた想いを読み取れる力、らしいですよ」

思いがけない彼女の言葉に眉を顰めると、藤倉さんは続けて小さく呟く。

「でも気持ちを伝えるのって、何も言葉だけじゃないと思うんですよ」

家に帰ると、既に夕闇が迫る時刻になっていた。父は仕事、弟は部活、常に家にいる母は町内会の集まりに出かけているはずで、つまりまだあと数時間はわたし以外誰も帰ってはこない。

逸る気持ちを抑えて2階の自室へと駆け上がりうと足を動かす。制服のリボンを解こうと手をかけると、ダイニングのテレビ画面が光っているのに気がついた。今日はみんな慌ただしく各々が出かけていったから、もしかして朝からつけっ放しだったのかもしれない。仕方なく食卓の上のリモコンに手を伸ばす。今は着替えさえ厭わしいくらいなのに。若干の苛立ちを抱えたままボタンを押そうとす

ると、目を疑いたくなるようなショッキングピンクの生物が視界に入った。

『続いて夜の限定うさピーコーナーだびょん！』

実に奇妙な、耳の長いウサギ。と、表現するのが一番適切だとは思う。小さい子向けのマスコットのようで、異様に大きな目が可愛いようで気持ち悪い。

『あまりに大好評なので、うさピー占いはゴールデンタイムに進出する事になったびょん。今日も残すところあと6時間のために、よりディープでエキセントリックなお告げをお届けしちゃうびょんよ』

こんなおかしなウサギには何の興味もない。それなのにテレビの電源を落とそうと掴んだりリモコンから手を離れたのは、続く発言に気を取られてしまったせいだった。

『今日の一位はミラクルハッピー目白押し、そんな射手座のアナタだびょん！ 憂鬱なんてぶっ飛ばせ、不景気なんて気にするな！ 偶には無駄な残業を上司に押しつける！ 目指せストレスフリー、今日も元気にビールが上手い！』

別に占いなんて信じてはいないけど、ウサギがなかなか熱のこもった演技で画面内を飛び跳ねているせいでつい目を奪われる。

『今日は今年一番の幸運を掴む日だびょん。宝くじが当たるかもしれないし、徳川の埋蔵金が見つかるかもしれないし、未知なる地球外生命体を発見しちゃうかもしれないびょん。おっとこれは言い過ぎたびょん？ 身近なレベルでいけば、昔別れたあの人から突然の連絡があるかもしれないびょんね。ラッキーアイテムは日記帳。ま

あちよつと落ち着いて、ページを開いてみたらどうぴょんよ』

今年一番の最良の日が、あと数時間で終わってしまうとこのウサギは言いたいのかしら。そんな劇的な幸運がどこに転がっていると思うのだろうか。

出だしの勢いに押されてしまったけれど、考えてみればとてもくだらない。

『そして今日は特別に視聴者からのコメントを紹介するぴょん。えーとまずはI県在住の高校生Rさん。 “先日ひどい占いのせいで僕の人生が本当に変わってしまった。感謝と一緒に恨みの言葉を贈りたい” んー、最初から物凄いツンデレさんだぴょん。これはうさぴーの熱烈な信者に違いないぴょんね』

なんて気分屋なウサギなのだろうか。占いの発表をさつさと切り上げて、何枚かの葉書を手にしてはにやにやと微笑んでいる。

『そして同じくI県から中学生のKさん。 “毎朝見てます。ミカと同じ声で世知辛い人生をズバリと切り捨てる、その姿に惚れました。占いは是非獅子座を御贔屓に” おやおや、またまたうさぴー教の信棒者さんみたいぴょんね。でもうさぴーは宇宙の果てからやってきた愛と平和のメッセンジャーだから、特定の星座に偏愛する事は出来ないのぴょん』

あまりに馬鹿馬鹿しい。肩の力ががっくりと抜ける。

『それから最後に…… おつとこの方は、住所とお名前が匿名みたいぴょん』

このウサギのせいで緊張が解けてしまった。ついでに2階に上が

る気力もなくなったので、食卓の椅子に腰掛けて、彼の日記を取り出した。もう中身なんて何十回も読み返しているのだから、知りたいたいの最後の部分。かさついた紙に指を引っかけながら、後輩から渡された手紙を取り出す。

白地に薄く書かれた几帳面そうな細い字。誰の手のものかなんてこの際どうでも良い。だって、だってこれは――

□月5日

毎日君の事を考える。

本当は彼女がテニスを始めたのは、僕のせいなんじゃないだろうか。君はいつも真剣で、どんな事にでも真面目に取り組む。

僕は努力などしなくても、大抵の事は人並み以上にこなせてしまう。だから君の姿が眩しくて、同時にとても申し訳なく思う。

僕にとって、君は素晴らしく素敵な女の子だ。

□月6日

気恥かしくて言えないけれど、君のショートカットは凄く良く似合ってる。

一緒に夏祭りへ行ったあの日から、ずっとその柔らかそうな髪を手で梳いてみたかった。

この地で誰かを好きになる事は決まっていなかった。そう、君に出会うまでは。

□月7日

色々悩んでいたけれど、故郷へ還る事を決断しようと思う。

多分暫くは胸が痛むね。でもそれが終わる恋の楽しみ方なのかもしれない。

こうして君を思い出して、泣いて、寂しがって、胸の痛みを託けて、悲しみを繋がつている事を意識する。

だけどそれだけじゃあいけないんだ。

涙が枯れたら忘れるように誤魔化さず、心の隅に綺麗に並べてしまいたい。

そして不意にどうしようもない慟哭が押し寄せてきたら、ゆっくりと思い出そう。

僕達が出会って過ごした時間が消えてしまうわけじゃない。

さようなら。僕の初恋は永遠に君のものです』

足元に日記が滑り落ちた。鈍い音と指先に感じた痛みも、今のわたしには関係ない。

心の中でさざ波が寄せては返し、心臓だけが鼓動を大きく主張する。目の奥が熱い。

手紙に書かれた文字とウサギの言葉。一字一句全てが同じ。

拾い上げた日記のページに染みついていた乾いた涙の後を、ゆっくりと指先でなぞる。ガサガサに乾燥したそれは、白い指の腹に引っ掛かって、ぽたりと落ちたわたしのそれで新しい円を作った。

『——ん？ これって違う番組用のコメントだったぴょん？ まあいいぴょん、テレビのハプニングなんて日常茶飯事、みんな大人の事情というわけでまとめるぴょん』

ぼんやりと滲んだ視界で画面を見つめた。珍妙なウサギは先程とは打って変わって優しそうな笑みを浮かべてわたしを見返し、それが更にこの心を握りしめる。

『今日はうさピーちょっとナイーブだから、占いは一位の発表でおしまいにしちゃうぴょん。ゴールデンは尺が足りないから仕方ないぴょんね。毎日楽しみにしている良い子のみんな、また来週ぴょん』

偶然にしてはあり得ない。そして本当に彼の言葉だとすれば物理

的に考えられない。このウサギはこんなコメントを何処で手に入れたのだろ。占いが終わり新しい番組が始まって、わたしはずっとその場で静かに涙を流していた。

わたしは突然いなくなった彼に対する悲しみと憤りで、周りが見えていなかった。

どうして気がつかなかったんだろう。この日記はわたしと出会ったあの日から始まり、別れの日で終わっている。最初から最後までわたしの事しか書かれていないのに。

彼がわたしをどう思っていたのか。

彼の心の中に、確かにわたしの存在はあったのだと。そう信じてしまってもよいのかしら。

ありがとう、そしてさようなら白崎君。幼かったわたしの初恋。

でもごめんなさい、彼は笑ってほしいと言ってくれたけど。まだ少し、この胸の痛みがそれを許してくれないみたい。

せめて今夜だけ、貴方を想って泣かせて下さい。

最終話 ロング・ラブレター

「えーと、まずはお久しぶりです。でいいのかな？」

使い方はちゃんと説明されたんですけど、いまいち不安が……私機械音痴なんですよ。だからとりあえずこれの性能の良さを信じる事にします。

お伝えするべき事はいくつかあるのですが、やっぱり最初はわたしの家族の話から。

わたし達家族が地球に辿りついたとき、何もかもわからなかった一家を支えて頂いた事、心より感謝しています。わたし自身にほとんど当時の記憶はありませんが、父と母から状況を掻い摘んで聞きました。社会に溶け込めて何不自由ない生活を送ってこれたのは、全て御二人のおかげです。ちなみに当の父も母も、ついでに弟も無駄に元気一杯です。写真や映像でも送る事が出来ればいいんですけど、そこまでの機能はないんですよ。残念です。

それから、息子さんの事です。

ご存知とは思いますが、彼ってやたらに優秀ですよ。容姿云々は別としても、頭脳明晰でスポーツもばっちり、他にもマルチな才能オブション追加しまくりの、とんでもない人物です。だからわたしは彼の事を完璧人間だと、ずっとそう思っていました。まあ人間の部分は厳密には間違いでしたけど。

でも、最近になって気がつきました。それって違うんじゃないかって。

だって地球で人間として暮らしていくつもりなら、そんな完璧ぶりを取り繕う必要なんてないじゃないですか。人間は誰だって必ず欠点なり短所なりを抱えているものなのに、むしろ怪しいですよ、あそこまで何でも出来る人って。おかげでほら、学校中の女の子達

から大注目ですよ。わたしを見習って、地味に平凡にスタンダードに生きるべきでしょう？

というわけで、昨日彼を問い詰めてみました。そうしたら衝撃の事実を白状してくれたのです。曰く、「好きな子の前では、格好つけていたいでしょ？」

……ああごめんなさい。ちょっと思い出して頬が緩んでしまいました。男の子って大変なんですね。

んん？ 何が伝えたいんだって？ つまり今のところわたしと彼は仲良くやっています、という事です。ただこの心境に至るまでは、ちよつと揉めましたけどね。

彼はわたしと御両親の天秤の間で長らく苦しんでいました。ずっと1人で抱えて悩んで、限界がくるまでわたしには何も教えてくれないんです。それでいて飽きもせずうじうじ背負いこんじやって、思考が暗すぎますよね。

まったく、答えなんてあるわけがないのに。変なところで彼は悲觀的です。

とりあえずわたしが死んだら後追いなんてのは却下です。せつかく授かった命なんだから、天寿を全うして頂きたい。御両親にも失礼でしょう、親より先に死ぬなんて、こちらでは三途の川で石積みさせられるらしいですよ。ああ怖い。

でもわたしがいないと寂しいってのはわかります。それはちよつと、ううんかなり嬉しいです。けどどうしようもないじゃないですか。わたしは地球人と同程度の寿命で、彼は永遠に等しいくらいの時間がある。出会えた時間が重なった事だけで十分奇跡のようなものなの。

彼を置いてさっさと死んでいく、残す側のわたしだって泣きました。悲劇のヒロインを気取って、一度は彼を道連れにしようかとも思いました。でもそれは出来ません。だって彼の事がこんなにも大

切なんです。

だからお互い、腹を括りましょう。

こうなる事がわかっていてもわたしを好きになったんです。そしてこうなる事を知ったわたしも彼から離れる気はありません。とりあえず生きている間は他人様に迷惑をかけずにうざがられるくらい、いつも一緒にいてやります。皺皺のおばあちゃんになっても必ず手を引っ張ってもらいます。そしてそれまでに野球チームが作れるくらい、子供も産んでおくんです。いつだって彼が笑顔でいられるように。

そしてわたしが死んだら。偉そうな事を言ってもこれで終わりです。彼がその先どうなるのか、結局のところわたしにはわかりません。

だからこの「声」を残しておきます。

広大な宇宙の海に、わたしはこれからビュータを使って何千何万と彼へのメッセージを流します。今日の天気とか、夕飯のおかずとか、別にどうでも良いような事です。座標指定はしないので、何処とも知れない色んな空間へ飛んでゆく事でしょう。

けれどそれがあれば、彼は生きていけるそうなんです。わたしがいなくても、何処かに漂っているわたしの生きている軌跡を辿れる事に意味があると。子供達の行き先を見届けたら、その声を探しながらいつか故郷へ帰るのも悪くはないと。本当はもうちょっと明るい方向性と思ったのですが、頑として聞いてくれないからもういいです。浮気の許可だって出したのに、どれだけ愛されているの、わたし。

でも。そう決めたからこそわたしはもう泣かないし、与えられた人生は前を向いて精一杯楽しく生きていくつもり。もちろん彼と一緒にです。

あ。もしかして、こんな考えのわたしにちよつと呆れてしまいましたが？ これでも結構一生懸命頭を捻ったんですけどね。そんなわけで、彼の帰りがほんの少し遅れる事をお許し下さい。そして、救難信号にこのような返答をする事も。

最後になりますが彼のお父さんお母さん、わたしに彼を出会わせてくれてありがとう。彼がそちらへ着いたら、この声を聞かせてあげて下さい。長い時間を旅してきて、これが久しぶりに聞くわたしの最初の声だと思うから。

—— ねえ稜介、元気？

これからわたし、貴方を口説きまくっちゃうからね。

広い広い宇宙に向かって、色んな宇宙人に聞かれたら恥ずかしい事も言っちゃうかも。

本当はわたしから貴方を見つけに行きたいんだけど、昔から探し事って苦手ですよ。

大変だからゆっくりでいいの。立ち止まって、休んで、挫けそうなら逃げてもいいよ。

たまには寂しくなるかもしれないし、涙が止まらなくなるかもしれない。それに他にやりたい事が出来たり、愛想を尽かされて気が変わってしまうかもしれない。そうしたら、そのときは自分が一番に思った事を優先してね。

だけど心の片隅にでもわたしがいて、貴方がそれを忘れられないのなら。

ずっと待つてるよ。

だから最後までわたしを全部見つけてね。

そんなの不可能だって？ でも弱気は認めてあげない。

大体、長い長い時間があるのにこんなんびりしたわたしを見つ
けられないなんて、永遠の名が廃るじゃない。
だったらきつと、永遠なんて短いね。

それからえーつと……大好き。ずっとずっと。

送信者正式名称、 エスドット・エフデス

うっん、ここはやっぱり地球式でいっとくべきかな？
じゃあまた、どこかで会いましょう。

藤倉小夜子 —— S・Fです『

おまけその1 Sとウサギの秘密

ひらり、ひらひら。

全てはそう、偶然から始まった。

思うにあの日。あの紙切れと私が出会った、それが歯車の一部だったのだ。

ひらり、ひら、ひら。

『シロイゴハニー・スウドン・ポムドテール・スイスロール・タコヤーキ・ソーキソーバ・イツカリング・ミソシルノグハ・ナメコイツタク・エトセトラ』

白い紙と薄い桃色の花弁を流れに乗せて、春風の悪戯は私の手元にやってきた。

中学校の卒業式の帰り道。申し分なく咲いた満開の桜の下を歩いていた私のところへ、不意に飛び込んできた小さな用紙。後輩から渡された花束や色紙、それに卒業証書や鞆で溢れ返った腕の中、私はそれに書かれた内容を見て思わず足を止めた。

閑静な住宅街の真昼間。式がなければこんな時刻にこの通学路を歩く事などない。けれど私がそれを拾った偶然が、全ての始まりだった。

「あら、ごめんなさい」

頭上から降ってきた声に思わず顔を上げる。青空をバックに近く
の民家の窓から手を振っていたのは、ごく普通の女性。

「あたしが落としてしまったの」

そう若くはないけれど、主婦には見えない。肩口で切りそろえられた髪にきらきらと光る意志の強そうな目は、働くキャリアウーマンを連想させる。

今そっちへ行くわね、と一声残して彼女は窓枠から姿を消した。数秒も経たずに玄関の鍵が回る音がして、その女性はわたしの元へやってくる。

「久しぶりに自分で掃除していたら机の奥から出てきて。懐かしいなあって思ってためていたら風に飛ばされちゃったのよ」

彼女が着ているワンピースは所々が薄汚れていて、足元の靴下は埃塗れだった。爪のネイルもぼろぼろかけていて、多分あんまり手先が器用ではないんだろう。

けどそれよりも私には聞くべき、いや確認すべき事があった。

「あの、もしかして……エノタトから来られた方ですか？」

私はその言葉を発した途端、彼女の目がすうつと細められた。春の陽気な日差しを跳ね返してしまいそうな程鋭い視線。

「何故その名前を？」

警戒、そして一瞬で張り詰めたこの緊迫感。けれどその態度が却って私の推測の根拠を裏付ける。

私は手元の紙をぎゅっと握りしめた。桜の花びらが2人の間にゆっくりと落ちてくる。

まさか、ね。

「私も、貴女と同じ宇宙人だからです」

宇宙って本当に広いのかしら。相手の驚いた顔を見ながら、私は
心中で複雑な思いを抱えていた。

「息子さんのお名前でしたか」

通されたりビングのソファで紅茶を貰い、私は拾った紙切れを彼
女へ渡した。

「そうなのよ、部屋の整理をしていたら偶々見つけちゃって」

彼女、藤倉マヤさんは苦笑してその紙をポケットにしまう。お互
いに簡単な自己紹介をした後に是非と進められて家にまで上がり込
んでしまったけれど、他には誰もいないようだ。

「あの名前、太陽系グルメ紀行の地球特番の影響でかなり流行った
んですよ」

「そうそう、向こうで主人と見ていて印象に残ったものだから。ま
さか実物を拝める日がくるとは思わなかったけどね」

かの珍妙なる名前は、エノタトで大流行したもの。かの地から遠
く離れたこの星で目にするとは思わず、そしてそれが意外な形で私
達の出会いを繋いでいた。

「文坂さんは、いつから地球にいるの？」

「もう5年になります。同郷の方と出会ったのは初めてですけど」

父と母と共にやってきた事を伝えると、マヤさんは玄関に置かせてもらった荷物と私の制服とを交互に見ていた。

「あ、そう言えばその格好。今日は卒業式だったのね。あたしの子供達も同じ中学よ。息子の1人は今も通ってるわ」

「何人家族なんですか？」

それはつまり、更に同郷人がいるという事。

「旦那と馬鹿で可愛い子供が2人、いえ3人か。ま、楽しく暮らせているわよ？」

そう言つて、マヤさんは嬉しそうに口元を緩めた。

その言葉に嘘はないようで、戸棚の奥や壁際には家族写真らしいものがちらほらと飾られていた。マヤさんと、その隣に同年代の優しそうな旦那さん。そしておそらく娘さんと……あれ？

「ん？」

息子2人と思われる人物の片方には覚えがあつた。卒業してしまつた憧れの先輩。

「どうかした？」

「あ、いえ」

昔からちよつといいな、なんて思っていた人だ。私は慌てて首を振つた。

「そついえば、娘と息子の1人が問題でね……」

写真の一つを手にとって、マヤさんは彼女達家族の事を語り出した。この星への不時着、日々の生活、隣に住んでいたという更なる異星の家族。そしてその息子と、自分の娘の将来に関する陰り。

思えば何故初対面の私にここまで深い話をしたのだろう。豪胆な人に見えて、その実彼女も見えない不安に押しつぶされそうになっていたのだろうか。気がつけば私は真剣に頭を巡らせ、小さく拳を作る彼女の腕をとった。

「マヤさん。わたし、ビュータを直せます」

全てを聞き終えた私は、一つだけ力になれそうな件を伝える事にした。

「だってそれを作ったマザって、私の父親の名前ですよ」

ひらり、ひらひら。まさかのセカンドシーズン到来。

人生いつどこでどんな出会いをするかなんて、誰にもわからない。ある日の部活帰り。腕白坊主のような初夏の風が、再び私の手元へやってきた。

今度は何を運んでくれたのかって、それはまた確かに白い紙切れだった。

ひらり、ひら、ひら。

『株式会社メディアスペースイメージキャラクター・うさぴー』

以前に故郷の名を目にしたときよりも、それは更に衝撃的だった

かもしれない。何せA4のコピー用紙にでかかと描かれていたのは、ど派手なピンク色を纏ったウサギのような生物だったのだ。そこから辺の女子高生のアイメイクよりも増量されたマスカラのような目に、やたらとにやけた口元。人を小馬鹿にしたような表情は、その長い耳をへし折ってやりたい衝動に駆られる。

そんな気味の悪いイラストは、あの日と同じ通学路、住宅街の大通りから風に流されてやってきた。とりあえず手にとつてどうしたものかと眺めていると、前方から慌ただしい足音が聞こえてくる。

真っ赤な夕焼けが綺麗な時刻。正面から走ってきたのは、背広を着た男の人だった。

割とシャープな顔立ちに、所々年齢を感じさせる皺。少し日に焼けた肌と、すらりと着こなされたスーツ。如何にも仕事の出来る素敵なサラリーマン、とでも言ったところだろうか。

けれど私にはその人に見覚えがあつた。両手に中身一杯詰まつた紙袋を抱えて、彼は私に向かって手を掲げている。

「申し訳ありません。そのプリントは僕のものなんですよ」

優しそうな声と、柔和な表情。それはあの写真に写っていた人物と全く同じだった。

「マヤさんの旦那さん？」

思わず口をついて出てしまった私に、彼、一さんは怪訝そうに眉を顰めた。

「どうして僕の事を？」

「ええと、奥様から伺っていませんか？ 私はその……エノタトの、です」

マヤさんはどこまで私の事を話しているのだろう。一瞬自分の軽薄さに不安が過ったけれど、一さんはああ、と頷いて笑顔を見せた。

「君が文坂さんか、偶然だね」

その場に紙袋を置いて、一さんは丁寧な私の手をとった。

「一度お礼を言わなくてはと思っていたんだよ。君のおかげでビュータが直ったんだからね」

「いえ、正確には父が修理しましたから……ああ、こちら、お返しします」

ふと、頭の片隅に彼の息子の姿が浮かび上がった。成程、親子なだけあって顔はよく似ている。

けれどこの滲みでるスマートさの違いは何なのかしら。

奇妙奇天烈なウサギを一さんに手渡しすると、彼は嬉しそうにその紙を上着のポケットにしまい込んだ。

「この不思議な生き物は何ですか」

「これ？ これはね、僕が考えた我が社のオリジナルキャラクターなんだ。うちは地方のアニメの制作会社なんですよ」

「……はい？」

お茶目な風がいらぬ世話を焼くように、不意に空気の流れが変わった。紙袋がパタパタと音を立てて、その中身であるプリントが一枚またしても私の手元へやってくる。

うさぴー設定集、と細かい文字で書かれたそれを見て、何故だか嫌な予感が走った。

「小さい会社なんだけど、最近ようやくニュースの占いコーナーの

受注を貰ってね。僕の担当はその内容をプロデュースする事なんだけど」

「占いを考えていらっしやるんですか？」

「まさか。直してもらったビュータがね、この間から不思議なメッセージを色々受信して。それがあんまりにもおもしろかったから、そのまま占いとして使わせてもらっているんだ」

「は？」

とんでもなく不吉な事が、今。爽やかな笑みを携えて耳に飛び込んでくる。

「ちゃんと地球に座標指定をして漂ってくる電波がいくつもあって不思議だよ、たまに恋文みたいなものまで混じってくるんだから」

「……」

「あんまりにも切ないものとかあるからさ、占いとしてみんなに知ってもらうのも悪くないと思って。そうしたら見知らぬ異星人からのメッセージを受け取ってくれる人がいるかもしれないじゃないか」

頭痛が。色んな意味で脳が悲鳴を上げてぐるぐると回っている。

「最初はウサギ座の方角から、エスって名前入りだったよ。後は……」

「……」

「も、もういいです」

「そう？　じゃあ朝と、それから夜の限定コーナーもちゃんとチェックしてね。それにしてもこれは、宇宙の謎だと僕は思うよ」

そうですね、と私は無難に頷いておいた。

彼はやっぱり貴方の息子で、そして貴方は彼の父親。それがよくわかってしまったので、これ以上の事はどうでもいい。半ば投げやりな気持ちで、私は夕日に向かって溜息を吐いた。

おまけその2 Fの個人的考察

ひらり、ひらひら。二度ある事は三度ある。

今思い返しても、何故卒業した中学校の文化祭へなど行く気になったのかしら。そこが最大の疑問だったわけだけど、彼と彼女を見て思う。運命や必然なんてものは所詮後付けの言葉で、自分の未来を決めるのは、何時だって他ならぬ自分しかないのだ。

ひらり、ひら、ひら。

『全国統一模試高校入学試験結果一覧 藤倉健太郎』

賑やかな熱気溢れる廊下の一角。喫茶店だのお化け屋敷だのと各クラスが楽しそうな出し物で騒いでいる中、そのぐしゃぐしゃの切れ端は埃に塗れて私の元までやってきた。

くたくたに折れ曲がり、手書きのボールペン文字の名前はインクが滲んで掠れている。拾い主が私でなければきっとゴミ箱へ一直線だったろう。何となく卒業した3年のクラスを渡り歩いていた私は、足元に転がってきたそれを興味本位で開いてみたのだ。

とりあえず、全教科があまりにひどい点数だという事だけはよくわかった。私は生まれて初めて、偏差値の折れ線グラフが底辺を這うという奇怪な現象を目にした。そして合格ランク表示の星が枠外へ墜落する、類まれなる様相にも。

とは言え見知らぬ他人の成績など関係ない。ただ拾ってしまった手前、処分に困った。なにせはつきりと生徒の氏名が記入されている。

「うわっ、見ないで！」

私がそれを片手に思案していると、近くの教室から悲鳴に近い声

をあげた男の子がやってきた。

「君の？」

わかりやすいリアクションに苦笑してみると、少年は顔を真っ赤にして目に涙を浮かべている。なかなか整った顔立ちをしているのに、そのギャップがひどい。

ああ、あの日に見た写真そっくり。

「そうです、うわああ！ てかしっかり見すぎだし！」

「ごめんごめん、ほら」

半ばゴミと化している結果表を、彼はよろよろと受け取ってがっくりと肩を落とした。

「うう……こんな点を知れたら、母ちゃんに殺される」

「しっかりしなさいよニース。たかが模試の結果くらいで」

弟がいたらこんな感じなのだろうか。一人っ子の私にはこの素直な反応が新鮮だった。

「何で俺のその名前を知っているんですか？」

不思議そうに私を見つめるニース。

君の名前どころか、その家族も、秘密も、私はみんなみんな知っている。

「さあ、どうしてかな？ 君の頭がもう少し良くなったらわかるかもね。応援してるわよ」

ちよつと意地悪く微笑んでみせると、彼はもつと顔を赤くして私の手をとった。

「俺、もつと勉強頑張ります！　だから名前を教えて下さい」

そう、同郷人の好み。

それから、彼がマヤさんの息子で、私とは全くの無関係というわけでもなかったから。

何となく教えたアドレスと、他愛のないやりとり。彼との関係はこの日から始まった。

予想外だったのは、その後やたらと彼に懷かれてしまった事だけだ。

ひらり、ひらひら。いい加減芸が足りないのではと疑い出す四度目の事。

つまりこの一家と関わる時、私はいつもこの風の洗礼を受けなくてはならないらしい。

さあ今度は何を受け止めればいいのかしら。休日には街を歩いていた私の元へやってきたのは、一枚の領収書。

ひらり、ひら、ひら。

『書店　お買い上げありがとうございます』

1 雑誌　オワライ　　¥ 5 6 0

2 雑誌　オワライ　　¥ 8 4 0

3 月刊誌　リヨウリ　　¥ 4 2 0

合計 ¥ 1 8 2 0

またのお越しをお待ちしております』

「あれ、綾乃ちゃん？」

「藤倉先輩、何してるんですか？」

丁度書店から出てきたらしい先輩は、両腕に書籍の入っているであろう紙袋を抱えていた。流されてきたレシートを返すと、彼女は買ったばかりの雑誌の表紙をちらりと私に見せてくる。

「ありがとう、実はちよつとお笑いの研究中なの」

若手芸人のとぼけた顔が掲載されたそれを、先輩はパラパラとめくっている。

「一体どうして？」

「私情である人に毎日メッセージを送る事にしてるんだけど、何を送ればいいのか迷ってて。物凄く遠い所にいる人なのよ」

休日の、人通りもそこそこある商店街。私は待ち合わせがあるのですが別に別れようとしていたけれど、何故この人がまたこんな本を購入し出したのが気になった。あきらかに趣味ではないと思う。

「それでそのお笑いの本は？」

「いつでも笑っていて欲しいから、とりあえず選んでみたの」

「それってちよつと」

違うのでは？ と続けなくなった私に、先輩は仕切りに首を傾けていた。

「やっぱり綾乃ちゃんもそう思う？」

うんうんと頷いて、溜息混じりに呟く。

「実はわたしも不安だったの。だって仮に百億光年も先だったら、今の流行なんてとつくに遅れているものね」

いやだからそこじゃなくて。

どうして気にするポイントが違うのだろう。普通に愛の言葉を囁いてくれるのならば、彼は十分ではないかと思うのですが。

「ここは色褪せない古典名作を選ぶべきなのかしら」

「えーとですね」

だから違うんだって。

どう説明すればいいのやら。このずれた先輩を前にして、私はつい最近の出来事を思い出していた。

憧れって言うか、恋に恋するって言うか、つまりは淡く儂い乙女心なんて表すべきなのか。

私が佐川先輩に対して抱いていた感情は、まあそんな可愛い範囲のものであつて。だから藤倉先輩が彼と正式に付き合う事になったときは、落胆よりも納得というべき感情の方が強かつた。

けれど、素直に認められないのがまた乙女心というもの。

「藤倉先輩」

「何？」

「ビュータをこんなふうに使おうって人、初めて見ましたよ」

マヤさんに修理したビュータを渡した翌日、コンタクトをとってきたのは藤倉先輩本人からだった。

放課後のテニスコート。あれから私達は顔を合わせれば自然と会話する仲にはなった。傍から見れば部活の先輩と後輩として。ただ実際はどうなのだろう。

「結局は自己満足ですよ。彼が辛く寂し想いをするのは変わりません」

ほんの少しだけ、意地悪を試みたくなる気持ち。藤倉先輩を前にしていると、たまにそんなものが心に思い浮かんでくる。おぼろげな恋心の残滓とでも言うべきか。

「それでもいいんですか？」

我ながら情けない気もするけれど、先輩は別段気にしたふうもない。ボールをラケットの上に乗せて、離れた所で壁打ちしている片瀬先輩の方を見やる。

この距離なら問題ないと判断したのか、先輩はフェンス越しに外でボール集めをしている私の所へやってきた。

「わたしには想像する事しか出来ないんだけどね、あんまり長い時間記憶って持たないと思うの」

小さく耳打ちするような声。そしてあっさりと、思いがけない言葉が口にする。

「だから何だかんだ言っても、きっといつか忘れてくれるでしょ」

一瞬、彼女が何を言いたいのか私にはわからなかった。思わず目を見張ると、先輩はその場でゆっくりと球つきを始めていた。

「そうなつて欲しいんですか？」

「うん。本当は彼にわたしの事なんてさっさと忘れて欲しいの。だって長い時間は心を慰めてくれるし、とっくの昔に死んだ私をずっとぐずぐず求められても困るじゃない」

「随分、はつきりと言いますね」

ぽこんぽこん、と可愛らしく地面を跳ねるボール。なのにその動作の主は私が思っていた以上にドライで容赦がない。

「それが一番健全なもの。でも不意に思い出してしまうかもしれないから、そのための希望を残す事に意味があるのよ」

「……そうですか」

もつと、自分と相手を最大限に尊重する考えをとる人だと思っていた。そしてそれが優しさなのだとおも

でも違った。この人は誰より何より、現実を見ている人だった。

温かな言葉と態度で相手を縛るよりも、自分も彼も前を見て生きていく事を選んだのだ。

その選択に善し悪しはない。あるとすれば、そこに秘められた彼女の人の知れぬ決意だけ。

「なら私は何も言いません。来週のデートに向けて、大好きな恋愛映画の新情報でもチェックしなくっちゃ」

私はこの人の事を好きでも、嫌ってもいけないけれど。

ふとした瞬間に、泣きたくなる事がある。

人生を歩んでいると、偶にどこかで出会う事があるだろう。特別に親しいわけでもないのに、心の奥底で感情を揺さぶるような人と何故かいつまでも記憶に残り、長く時が経っても心の片隅で鮮やかに思い出せるような人と。

生き方や信念に感化された、多分その表現が一番近い。けれど秘密には違うのだ。彼女の感情に思いを巡らせ共感する事はあっても、私がその道を選ぼうとは思わない。

ただ、時折。どうしようもなく複雑な思いが胸中に押し寄せる。名前のつけられないこの感情が、涙となって頬を伝う。その零れ落ちる雫の一つを見て、私は理由がなくても泣けるという事を初めて知った。

喜びでもなく、悲しみでもなく、ましてや痛みや感動でもなく。私にとって藤倉先輩は、その涙の象徴のような人だった。

数分の押し問答の結果、私は何とか先輩のお笑いという方向性を変えさせる事に成功した。百億光年先で、彼は私に感謝をする事だろう。けれど今はそろそろ待ち合わせ場所へ移動しないと遅刻してしまう。

「今日は弟とデートなんですよ？」

腕時計を気にする私を見て、先輩はお見通しとばかりに笑っていた。

「健太郎昨日の夜随分興奮してたから、もう映画館の前にいると思

「うよ」

「そうですか」

彼の様子は容易に想像出来る。期待に応えるか否かは別として、
こういうところが私は可愛くてたまらない。

「それより先輩。どうにも心配なので、最後に遠距離恋愛の秘訣を
教えてあげます」

よく晴れた青い空。久しぶりに湿気のないからりと晴れた夏の午
後。確かに今日はデート日和なんだろう。道行く親連れや友人同士、
夫婦や恋人達の流れ。みんなどこか楽しそうな表情を浮かべている。

「待たせて待たせて、とことん焦らしてあげるんですよ。それを楽
しめる男を選ばなきゃ、却って選んだ女の見る目が疑われます」

そう、ほんの少しくらい遅れていくの。彼がじりじりと待ちわび
ているのを、意地悪く心の底で喜びながら。

それは女の特権。先輩にも、勿論私にだってあるのだから。

「綾乃ちゃんたら、意外に悪女だったの」

「先輩には負けますけどね」

近くの横断歩道の信号が青になるのを見計らって、私は先輩へ軽
く会釈する。

「エスドット族の女の子は、名前にみんなエフの文字を入れている
んです。その意味は、貴方を惑わせる光」

人波の中最後に囁いた言葉に、先輩は穏やかな笑みを浮かべてい

た。その微笑みが彼を迷わせ、そして救った。

「健太郎の事も、お手柔らかによろしくね」

さあ、それはどうでしょう。あの子ってからかい甲斐があり過ぎて。とりあえずは映画館の入り口で待つ彼の顔を見て、それから決める事にしようかな。

おまけその2 Fの個人的考察（後書き）

Far, far the future.....

I never forget the thing that
you are waiting for me somewhere.

Hope is always there.

It is a maybe——

いつまでも君が待っている事を、僕は決して忘れない。
希望がいつもそこにあるのなら。
それはきっと——

Thank you for reading.

It is a maybe, happy ending!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1004o/>

S.Fです

2010年12月24日13時02分発行